

---

# 天使と悪魔の共同戦線

鳴月 常夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使と悪魔の共同戦線

### 【Nコード】

N8550V

### 【作者名】

鳴月 常夜

### 【あらすじ】

見た目以外は普通の高校生、朝浦陽助<sup>あさのうらひようすけ</sup>は都内の高等学校、滝原高校に通う生徒である。ある日の夜中、夢の中で自らを神と名乗る超適当な老人に出会う。その老人が言うには、人間界に天使と悪魔を一体ずつ送るので、面倒を見てくれと言うものであった。

しかし、その天使と悪魔は陽助が想像していた以上に意外なもので……？

## 1話：天からの刺客（前書き）

新作です！ 今回もまたSFに挑戦してみました。  
更新率は上がると思いますので、みなさんよろしく願います。

## 1話：天からの刺客

始まりと終わりは唐突、って何かの本で読んだことがある気がする。はつきりと覚えているわけでもないのに、誰かが言った言葉だったのかもしれない。

その文字を見た  
いや、聞いたとき確か俺は共感していたはずだ。

始まり、いつも唐突で待つてはくれない。抗うことも出来ずただただ、迫りくるもの。

終わり、こちらもまた唐突で待つてはくれない。逃げることもかなわない。

対の存在のはずなのに、すごく似ている。意味を入れ替えても通じるような気がする。

と、言うよりなんで俺がこんな話をしているのかというと、純粹に暇だからだ。

今は昼休み。しかしながら俺の周りには人一人いない。

誰もが遠巻きに眺めているか、離れているかだ。………どちらも同じか。

その理由は十分自分で理解している。

目つき、雰囲気、愛想………etc. 確かに俺は人付き合いがそんなに上手くはない。むしろ下手だ。

目つきも良くはない。三白眼がどうだとか目が鋭いだとかは知らん。そんなことで、ヤンキーだとか不良だとか言われたりする………いや、しない。

しないけど、周りに人がいないことは確かだった。

先に否定しておくが、不良ではない。煙草も酒も薬もしない。

ここばかりははつきりと言っておかなければならない。

そんな俺にも声をかけてくる物好きな奴がいる。物好き………とは違う？

「どうしたのっ、朝浦くん。そんな怖い顔して」

ほら来た。昼休み終了十分前に自分の席に座り、かつ俺に話し掛けてくるこの女。

歌音 美里。姓も名も下の名前みたいな奴だ。

そして俺の前の席でもある。

「怖い顔はいつもだ」

いつも通りの切り返し。ここから昼休み残り時間は会話に使われる。

「あはははっ、そうだったね。そういえばさー」

と、まあこんな具合である。

滝原高校生、2年C組、朝浦陽助。

そんな俺の生活は面白すぎることもなく、退屈すぎることもなく平凡な生活を送っていた。

面白いことは望んではいなかった。

だけど、退屈も望んではいなかった。

なんか今日は対比ばかりだな。

そう思ったころにはもう昼休み終了5分前だった。

「でさ、………聞いてる？ 今他のこと考えてたでしょ」

「ああ、………今日は対比ばかりだなって」

「？ どうしたの急に。何か悩み事？」

ちよこん、と高めに結んでツインテールにした髪を揺らしながら首をかしげる。

きゅるん、と目が心配そうな光を見せる。

歌音は女子でも可愛い方の部類に入ると俺は思う。だからと言ってこれはどうなんだろうか。

素でやっているのだとしたら恐ろしい。

「や、………なんでもねえよ」

「そう？ 無理には聞かないけど、困ったときはお互い様だからね？」

上手いな、歌音は。

自分から突っ込むことをしない。相手が頼ってきたら、本気でそれに応える。

なかなか出来た人間だよ。何で俺なんかに構うのかねえ…………。

あ、俺が一人だからか。

「さ、次は英語だよ」

何が楽しいのか、鼻歌交じりに教科書を準備する歌音。

そこは紛れもなく平和だった。

深夜、がたがたと風によって鳴り響く窓の震える音で目が覚めた。朝はあんなにも天気が良かったのにこれはなんだろう。

眠れなくなってしまったので仕方なくベットから起き上がる。リビングの電気をつけ、テレビをつける。

謎の低気圧が日本列島に接近中で……………雨風が強いです！ ああー

情けない声を出しながら風にされるがままになるレポーター。大変だな。

ソファーに腰掛け、ぽちぽち…………とチャンネルを変えてテレビを流し見る。

リビングに反響するのはテレビの音のみ。それはそうだろう、俺は一人暮らしなのだから。

両親に無理を言ってマンションの一室を買ってもらってここに住んでいる。誰もが憧れるであろう夢の一人暮らしというわけだった。もちろん親には感謝している。

俺は不良ではないのだから、高校をしっかりと卒業した後就職し

て親孝行するつもりだ。

と、そんな話はいいとして目が覚めてしまった。チラリと時計を見やると午前3時。

なんて時間に起きてしまったんだ。

ガガガガ、と風がさらに強まる。窓が振るえ、今にも割れそうな勢いである。

たぶん、というかまず眠れないと思う。俺はうるさいのは嫌いだった。

暇つぶしにすることもないのでソファで横になる。こうすれば多少は眠気が襲ってくるであろうという考えた。

コォーン、コォーン、と遠くで音がする。看板でも吹き飛ばされたのだろうか？

めきめき、と嫌な音。マンションが軋んでいるのかもしれない。どれほど風が強いんだ。

ゴゴゴゴ、と地鳴りの音。地震………か？

その揺れは激しさを増し、縦揺れへと変化する。

「ま、マジかよ………ありえんだろ！？」

身体を起こして辺りを見渡すと、そこはもう俺の知っているマンションではなかった。

空気が澄んでいて、明るい。先ほどの天候とは打って変わって晴天だった。

「へ………？」

混乱して座り込んで状況を整理しようと試みるが、それも上手くいかない。

夢か、これは夢でいいのか？ それにしては五感がやけに反応している………というか夢にしてはリアルだ。

すつ、とそこで俺の頭上から影が降ってきた。

「ほっほっほ………やあ」

「だ、誰ですか」

こちらを見下げていたのは白髭のおっさんだった。どこか仙人を思わせる風貌をしていた。

杖だつてついてるし、髭が地面すれすれまで伸びてるし。

「ワシは大天使、いや神様である！」

「こんななれなれしい神がいるかよ……」

「嘘じゃない！ 本当じゃもーん」

そう言つて神様（仮）は頬を膨らませたりしている。もちろん可愛くないし。

加えてヤバイ、むかつく。夢の中のはずなのにすつげえ腹が立つ。初対面の人間にここまでイラッとしたのは初めてかもしれない。

「まあ、そんなことはどうでもいいのじゃ。明日からお前のところに天使と悪魔を一匹ずつ送るからのー世話してやってくれ」

「まったくもつて意味が分からないんですけど。唐突にもほどがあるでしょう！」

「下界に修業のために仮住まいが必要でのー。普通……いや、とりあえず頼んだからの」

「適當すぎんだろー！」

「はいさようならー」

神様（仮）がそう言つと周りの景色が液晶のごとく大破していく。崩れ落ちた風景の隙間からは真っ黒の空間が現れ、俺はそれに？まられていった。

「夢であつて欲しかった……」

朝目が覚めると、黒い羽を生やした小さな女の子と白い羽を生やした少女がじゃれあつていた。

というか、一方的に白い羽の少女が黒い羽の女の子に向かって何事かを話していた。



「はっ!?」

両方は俺に気づくと立ち上がり、深々とお辞儀をした。

「私たちは天界からやってきました。単刀直入に言いますと、私達はこれからあなたのお世話になります。じ……………神様からお告げを頂いていると思いますか?」

白い羽を生やした少女            おそらく天使であろう子がそう言った。

ああ、確かに聞いているとも。夢の中で、な……………。

使いが2人ほど修行で人間界に行くからよろしく頼む、と。とりあえず送つとくからがんばってねー、みたいなノリで。

「……………聞してる」

「ひやははははっ、そうか。じゃあ、わ……………アタシ達はここに住むことになったから、よろしく!」

黒い羽を生やした女の子            おそらく悪魔であろう子がそう言った。

それも聞いた。そして、この非日常が俺は何で受け入れられるか、なんだけども。こういうこと昔にもあった気がして……………今は記憶にないんだけど確かにあったんだよ、昔。

だから驚かないって言うか、驚いても何もいいことがないって言うか……………。

起きてしまっていることはどうにもならないような気がして、受け入れるしかないと思うから。

「あの……………どうかされましたか、ゴ……………陽助様?」

天使が顔を覗き込んでくる。あまりにも整った顔に思わず見蕩れてしまう。

「って! なんでもない。……………2人、名前は?」

「私の名前はミユと呼んでください。下等……………いえ、陽助様」

どうぞよろしく願います、と礼儀正しく頭を下げる天使、ミユ。

「アタシの名前はスイです、っだ! よろしく!」

一瞬頭を下げようとするが、一度びくりと体が跳ね上がると、こっ

ちにガンを飛ばしてきた。怖くない。

むしろ、小さな女の子が『怒ってるぞっ』って言ったときの顔にしか見えない。

ミュより頭一個分低いスイは、身長と顔のせいもあってかなり幼く見える。

と、話がずれたな。

「で、俺は具体的に何をすればいいんだ？ 修行って言っても俺が教えられることなんかないぞ」

「いえ、大丈夫です。学校に通い、人間と触れ合うことが今回の目的だそうです。なので、下等生物……いや陽助様にはそのサポートをしていただきたいと思っています」

……何かおかしな点は見当たらないだろうか？

「じゃあ、スイもおんなじってことでもいいのか？」

「ひうつ！ ああ？ ……ああ！ オッケーだ！」

……何かおかしな点は見当たらないだろうか？ 気のせいでは……ないだろ！

「ちょ、ちょっと待て。俺は何か大事なことを見落としている、というか見て見ぬふりをしているような気がするんだが……」

「いきなり饒舌になりましたね」

こいつだ。

「おい……ミュ。お前相当性格悪いだろ？」

「何を根拠に言っておられるのですか。 あなたのような下等生物……いや間違えました、陽助様にそんな洞察力は備わっていないかと私は考えます」

「肯定ってことでいいか！？ それに間違える要素がどこにあるんだよ！ 最後の方も誤魔化してるつもりかもしれないけど結構貶してるからな！？」

「いきなり饒舌になりましたね（笑）」

「（笑）じゃねーよ！」

「あわわわ、喧嘩はよくないよおー。ミュちゃんも陽助さんも……」

……はっ！」

俺とスイだけが、この部屋の中で凍りついた。

「あ、えと、喧嘩なんかしてんじゃねえよカスどもがあ！」

「すべてにおいて遅いわ！ てめえもキャラ作ってやがったな！」

「んなわけないだろうがあ！」

「だから遅いつつの！」

「急に饒舌に

」

「それはいいっての！」

なんやかんやで騒々しい朝だった。折角の休みの日の一日の始まりがコレだった。

「で、平日はどうするんだよお前ら」

朝食を3人(?)で取り終えた後、テーブルを囲んでこれからについて話し合う事になっていた。

天使や悪魔も食物を取るんだなあ、と無駄に知ってから5分後の話である。

「もちろん学校に行きます。すでに許可は出ています。ジ………神様は何でも出来ますので」

さらりと言ってみせるミユからは、冗談を言っている様子はない。それにしても、取り繕ってる感がビシバシ伝わってくる。

なんか早くもうんざりしてきた………。

「わっ……アタシも行くことになるからなっ！ 覚えておけよ！」  
こっちはこっちで、無理にがんばってる感がすごく出ている。

それが可愛らしく見えているのも一つの問題だとは俺は思う。どう考えても悪魔って言う感じじゃない。

「どうせそんなことだろうとは思っていたけど……羽はどうすんだ

？」

「ステルス機能が使えますのでご安心を。ゾウリムシ……いえ、陽助様が気にかかることはおそらくないかと」

「わざとだろ。切れて良いのか？」

「そんな怖い目で睨まないでください。震えてしまって立てません嘘だ。超余裕、見たいな顔してんじゃねえか。」

「ここここ……怖いよお」

涙目でカーテンに包まっている奴一名。言わずとも解るだろう。

「……………まあいい。それよりお前らここに」

ピンポン

玄関のチャイムが鳴った。正確に言えば、エントランスからの通信だが。

「んあ？ 誰だろ」

モニターで確認すると、ニコニコと笑う青年がダンボールを抱えていた。

「きたようですね」

「そだね……………はっ！ そだねっ！」

二人して同じような反応を見せる。どうやら宅急便のようだ。

ダンボールを受け取り、部屋へと戻ってくる。

これ、なんだ？

「早速開けましょう」

出てきたのは、制服・カバン・体育服……………etc・

コレは一つの可能性を表していた。生活用品が多い……………。

「お、おい。まさかお前ら……………ここに住むわけじゃ、ないよな？」

そんなときだけ二人はシンクロしたように声を重ねて言う。

「「あたりまえでしょう？」」



## 1話：天からの刺客（後書き）

いかがでしたでしょうか。

見た目ヤンキーな陽助に加えて性格破綻天使ミユ、超ビビり悪魔スイが主な登場キャラクターとなっています。

この三人が繰り出す日常とその他の出来事を楽しみにしてください！

これからもどうぞよろしくお願いします！

## 2話：名前の付け方

昔、夢で見たことがあった。お前は統率者になるのだと。

この間の夢のように適当なものではなかった。真剣な声で、そして真剣な眼差しで俺を見つめて。

もう一度、お前は統率者になるのだ

言っている意味が理解できなかった。それもそうだ、小学5年生だったころの夢だ。

なのに今でも、はっきりと鮮明に残っている。

これはこれは不思議なことだ。しかし、統率と言われても何を統率するのか俺には分からなかった。

そして俺が非日常を受け入れられるのが最も理解できなかった。

それより前の話なのだが、今と同じことがあった気がする。気がするのだが、覚えていないので気がするという程度でおさまっているのだ。

性格のねじ曲がった天使とビビリの悪魔。こいつらと理解不能な日々をこれからすごさなければならぬというのも、自然と受け入れられていた。

「アオミドロさん、起きてください。そして使用人のように私たちに朝ご飯を提供してください。私たちが餓死してしまいますよ？」

朝から抑揚のない声で平然と毒を吐き散らす天使に起こされた。

いや、すごく可愛いのだが性格が破綻しているので起こされても全然うれしくない。

「なんだアオミドロって……。そして訂正をしないお前が怖い」

「朝から色々元気ですね。突っ込みとかその他も」

「さっさと部屋から出てけや！　つか、まだ6時じゃねーかよ！」

「私は規則正しい生活を送らないと気が済まないんです。というわけ  
で協力してください」

「とりあえずあと1時間は寝かせてもらうぞ。それまでお前も我慢  
しろ」

そう言つて布団をかぶりなおす。

「……………」

とくに返事もなくなったのであいつも納得したのだろう。俺はその  
まま眠りに。

「うごああ！」

腹部に思いつきり肘が入った。

「決まりました、じゃすとみーと」

キラリ、と目を輝かせて親指をぐっと立てるミュ。

「嫌でも目が覚めましたね、さあ、朝ごはんを作ってください」

「て、…………てめっ」

「…………おなかが痛いのでしょうか？」

「何普通に聞いてんだよ！？ お前の仕業だろうが」

「記憶にございませんな、はっはっは」

「てめえ何キャラだよ！」

俺とのやり取りに満足したのか、俺の部屋を出ていくミュ。ついでに

「朝ごはん」

と呟いて出て行った。どんだけ腹減ってたんだよ……。

リビングまで行くと、すでに制服に着替えたミュが椅子に背筋をピ  
ンと伸ばして座っていた。

そういえばスイの姿が見当たらない。まだ寝ているのだろうか。

そんな俺の気配を察してか、またも抑揚のない声でミュは言う。

「あの子はまだ寝ていますよ。たぶん遅刻ギリギリまで起きないと  
私は思います」



珍しく一切毒のない返しだった。

「わかったらさっさと飯作れ。……………作ってくだ、作れ」  
毒は盛ってあった。

「なんでいったん敬語に直そうとして途中で止めて命令文に落ち着くんだよっ!？」

「朝から陽助様は饒舌ですね。しかし目つきが怖いです」  
知ってるわ。ほっとけ。

心の中でぶつぶつ言いながらも朝食の準備をする。いつもより一時間早い朝食作りである。

いつもの軽くすませるメニュー。もちろんトースト一枚とミルクティーという組み合わせである。トーストにはマーガリンしか塗らない派である。マーマレードとかジャムなどはどうも甘すぎて自分には合わないのだ。

チン、ガシヨン。とトーストが焼きあがった。適当にマーガリンを塗りたくって皿に載せてテーブルに並べる。

「む、なんですかこのパン一枚は」

「文句言うな、俺がいつも食べている朝食だ」

「流石は下民。食事バランスが悪すぎて最早支えるどころの騒ぎではありませんね。万年横倒し状態ですね」

「マジでほっとけや! というか居候のくせに文句を言うな!」

「もぐもぐ……………」

「あ、いや。もう聞いてすらないのか。チッ、スイ起してくるわ」  
「怖いです」

微塵も思っていない癖に平坦な声で囁くように言ってきた。

つ、突っ込んでられん……………シカトだシカト。

ミュとスイ共同の部屋の前で立ち止まりノックする。一応念のためだ。

「スイ、寝てんのか？」

中からは声が聞こえない。寝ているのだろう、ドアノブに手をかけて中に入る。

床に敷かれた布団は一枚はきれいに片づけられていて（ミュのものだろう）もう一枚には黒い羽根をはやした少女が寝ていた。

「おい、ちよつと早いが朝食作ったから食べ。それに今日から学校だろうが」

「ううん……ふん。んああん、むにや」

「起きろっつーの！」

思いつきり布団を引つpegす。そこに見たものは少女の下着姿だった。

は？ はあ？ HA？

「てめえはなんで下着なんだよ！？」

俺の大声に目が覚めたのか、パチとスイの目が開く。

自分で自分の体を見まわし、かああああと顔が赤くなる。そして俺の顔を見る。

「ひうつ！ 悪魔がいますう！」

俺から布団を奪い取って体を隠し、ざざざざざと部屋の隅まで後退する。

「ななななな、なんでここにいるですか！？ 夜這い？ いや朝だから朝這い！？ そんな言葉ありましたっけーっ！ 私頭悪いからわからないんですっ、とりあえずごめんなさい貞操だけはっ！」

「マジで突っ込みどころが多すぎで腹立つんだけどもとりあえず誤解は解いておこう！ 俺は貴様を起こしに來ただけだぁ！」

「ひう、ごめんなさいー、怖いからすいませんー」

ギイ、とドアの隙間からこちらを見る目。

「ロリコン……」

ミュだった。

「てめえはてめえでなに不吉なこと言つて去ろうとしてんだおい！ 待てや！」

「いーやー、て・い・そ・うがー」

「だから無表情そういうこと言つのはやめろや！」

どったんばったんと朝から超騒がしかった。

「疲れた」

なんとか学校までたどり着いた俺は机に突っ伏していた。

朝から体力を使うことなんてはつきりいつてまず俺の中ではありえないので、体がおかしくなりそうだ。今日の授業の大半は睡眠になりそうだ。

「どーしたの、朝浦君？朝からぐったりしてるね」

前の席から声がかかる。歌音だろう、俺は顔だけ向けて適当に返事をした。

「うわ、いつもより顔怖いよ？」

「ほっとけ……………」

「そういえば今日転校生が来るんだってね！それも2人だよ」  
何がそんなにうれしいのか、歌音はいつもより笑顔である。

「とりあえず俺のクラスには来ないでほしい」

「あーっ、なんでそういうこと言うかなあ。朝浦君、これは友達を作るチャンスなんだよ？」

「いや、……………なんでもない」

いろいろ否定したい部分があったが、もうなんだか面倒くさかった。それに転校生の正体わかってるからな。マジ面倒な奴らだよ。

「このクラスに転校してくるといいね」

「あー、ああ」

俺は適当に相槌を打って誤魔化した。もう面倒くせえどうにでもなっちまえ、と。

でも、このクラスには来るなよ、と。

俺の願いは届いたのだろうか？

それは次に目が覚めてからの楽しみだ。

さて、おやすみなさい…………。

「朝浦君、朝浦君っ！」

歌音のはしゃぐ声で俺起こされた、時計を確認。30分程度しかたつていない。

「どうした、騒がしいぞ」

「優美さん、可愛いよ？このクラスに転校してきたんだよー！」

「優美？…………ああ」

ミュ ユミ ゆみ 優美か。了解。

再び寝ようとする俺を止める歌音。

「んだよ」

「なんだよじゃないよう。あんなに可愛い子が転校してきたのに興味がないって男の子として駄目だよ。こういうのはガンガンいかないと」

「わりい、どうでもいいとかいうレベルじゃないんだ。寝かせてくれ」

「一目見るだけでいいからっつ！」

首を曲げられ俺の視線は生徒が集まる中心へ。そこにいたのは普段は黒い羽根を生やしているであろう少女がいた。…………ああ？

「っっておかしいだろうが！」

「うわっ、びつくりした朝浦君。いきなりどうしちゃったの？」

俺は構わずスイのもとへ。

「お前はなんでそんなにめんどくせえ名前にしてんだよ」

「なななな、なんでって……。ミュが」

「じゃあミュはなんて名乗ってんだよ。翠ちゃんか、ああ？」

「いえ、普通に美由ですけど…………？」

「なんでだよっ！いきなり意味不明なことするんじゃないよ！」

「ひう」

周りからは非難の声。

朝浦が転校生を威嚇しているぞー。とか早速びびらせてるわー。とかかつあげ発生かー。とか。

「こらこら、朝浦君っ。優美ちゃん怖がらせ怖がらせたらだめだよ」

「べ、別にアタシは怖がつてねーけどな」

体格に不釣り合いな言動。というか学校でもキャラつくのか、長くは持たないだろうけどな。

「チッ、俺寝るから。邪魔すんなよ」

そう歌音に告げてから、俺は席に戻った。

その時また別の場所で出来てる人だかりの中からミユがこちらを眺めて笑っていた（ようにみえた）のはシカトするべきものだと思が警告していた。

俺はもう学校ではあいつらに関わらんと決めた。

今みたいに超面倒なことになるからだ。今の騒ぎで俺はさらに不良のレッテルが張られたことだろう。転校生を脅す朝浦陽助、か……。マジ萎える。

俺はすぐに深い闇へと落ちて行った。



### 3話：回り回って

こうして天崎美由ことミユと黒崎優美ことスイが何故かふたりそろってこのクラスに転校してきた。

転校生が同じクラスについてありえないだろ……。これもあの神様とかいう奴の仕業か。

なんでもアリだなもう、しかし俺は学校ではそんなに目立つタイプではない……。のであんまりあいつらとは関わりたくないとは思っていた。

学校では、せめて学校では静かに暮しかった。

「下等……………いえ、朝浦さん……………いえゴミムシ。私たちは今日転校してきたので学校内の案内をしてくださいませんか？」  
さつそく関わってきやがったあああつ！

なんなんだ、何故俺なんだ。他にもいるだろ、歌音とか！

「そ、そうだぜ！ 案内しやがれこのやろー！」

優美……………いやスイがいかにもって感じて迫ってくる。いやだから怖くないから、表情歪んでるし。

「ほらほら朝浦君、折角美少女転校生が迫ってきてるんだよ？ 仲良くなるチャンスだよ！」

歌音もなんだか面白そうにはやし立ててくる。駄目だこれは、避けられない。

だからといっておとなしく従う俺ではない、学校では静かに暮しかいって言うてるだろう！

「じゃあ歌音、俺の代わりに案内してやってくれ。俺が行くとまた変なうわさが立つだろ……………転校初日から浮いてたんじゃあこいつら先が思いやられるだろ」

俺は頭を机に伏せたままそう言った。

そう、こいつらのことを考えて言っているのだ。そのところ歌音なら理解してくれるだろうし、こいつら二人も理解できるだろう。

「何を言っているのですか？ あなたの噂なんてとくに取り返しのつかないことになっていますよ？ このクラスでさえこんなに風潮されているのですから……悲しいですね」

「だよなあ！ アタシもさっき色んな子から聞かされたし」  
グサッ

何かが深く突き刺さった。

俺……いや、分かってたけどさ、何この気持ち。しかも俺が心配してやっているのによ。

何こいつら……。

「え、え……えゝ？ 朝浦君が言ってることそういう意味じゃないと、思うんだけどなー？」

歌音が困り顔をしながらもフォローしてくれる。それがまたつらかった。

俺はこのとき確信していた。学校も安静の場ではなくなったと。

最悪だ……神よ、俺を見捨てたのか……？ いや神はあのおっさんだったか。もう終わったな俺、神の加護とか受けるとか受けないとかいう問題じゃねえな。直々に見捨てられているよ。

「どうなんですか、ゴミムシ。案内してくれるんですか、どうなんですか？」

「最早訂正もなしかよ……いいよ、いつてやる。その代わり何言われるかしらねえぞ」

「や、やった……じゃなかった。やっと分かりやがったかあ！」

早くも仮面が外れそうになっているスイはシカトしておいて俺は席を立つ。それだけで少し教室の雰囲気ざわつとした気がする。

心が折れそうだ。

「私も一緒に行つていいかな、朝浦君」

きゅるんと可愛く輝く瞳を最大限に利用して歌音はそう頼みこんでくる。これが素でやっているから恐ろしい。っていうか、今の流れだつてきて当然じゃないのか？ いちいち礼儀正しい奴だな。

「構わないよな。美由、優美」



「きゃー、いきなりしたのなまえでよばれたわー」

「なんつつ棒読み！　しっかしイライラするなお前は！」

「お、おまえっ。アタシのこと名前で呼ぶなよな！」

「え、えーっと……とりあえず行こうね？」

唯一まともだったのがやはり歌音美里だった。

「んで、ここが食堂。俺は大抵ここで食べるかさつき行った購買でパンを買って昼は済ませてる」

「かわいそうに、いつも一人で……お友達いないんですね。流石ダンゴムシレベルですね……。あ、いえダンゴムシ様に失礼ですねこの階級ピラミッドの最下層が！」

「え、え、……美由さん？」

「空耳でしょうか？」

「まぎれもなくお前の言った言葉だろうが！」

歌音が動揺し、ミュがスルーし、俺が突っ込む。

食堂に溜っていた下級生が驚き早足で逃げ出していく。ああっ、そんなつもりじゃ！

「流石は魔王の生まれ変わりとしか言い表せない眼をもった朝浦さんですね。ああしまった。朝浦さんと呼んでしまった……屈辱ですね」

止まることなく吐きだされる毒に対して俺はなす術がなかった。

俺は解毒薬なんて持ってきていない。このまま毒に犯されて死ぬのか俺。

もう歩く力も残ってないかもしれない。

歌音と言えこちらの会話に気付かずスイと話をしている。スイは取り繕うのに必死で冷や汗をかいている。どうしてもアレ、取り繕

う必要があるのか。

「あれ、屑さん？ ゴミクズさーん。次の場所へは行かないのですか？」

こちらはこちらで毒しか吐かないし、どう考えたっておかしいわ！  
「とりあえず時間がないからここまで、次の休み時間に他のところ回るからそれでいいだろ？」

「そうですか、何かイラツと……いえ、癪に障るのは何故でしょう」  
「さあ、なんで……でしようか、ねえ」

心は脆く崩れ去った。

ミュとスイは口を開かなければ美少女である。ミュは肩までのショートな茶かった髪をいつも綺麗にセットしている。背丈も女子生徒の平均より上でスレンダーな体系をしている。そのくせ出るところとは出ているというなかなか魅力的な身体なのだ。スイの方は、ミュより頭一つ分背の低い身長で、普通にしていれば愛らしいという表現がぴつたりと当てはまる。髪は黒髪ロングで腰辺りまで伸ばしており、艶やかな光沢をもっている。身体の方は言わずもがな、特定の人が喜びそうな感じだった。

二人とも美少女ということは俺だって認めてもいいと思う。現に授業中の今、ミュとスイは男子諸君の視線を集めている。ミュの方は気にする様子もなかったが、どうやらスイはそうもいかないらしい。妙にソワソワしているし、頭を掻いたりしている。あいつの性格からして恥ずかしがっているのだと俺は思う。

他に分かったことと言えば、ミュが頭がいいということ。転校初日で初授業だというのに当てられても動じることなく淡々と答えを出していく。英語の時間ではテキストの発音も完璧だった。

そしてこれもお決まりというように、スイは勉強ができない。当てられこそしていないが、先ほどから冷汗をタラタラ流しつつノート

を取っているところを見ると、多分できない。

っていうか、悪魔らしく振舞うのであれば勉強なんてしなくていいと思う。

変なところで真面目な奴だった。

「さて、この問題は……歌音。解いてみなさい」

ちなみに今は数学の授業中だ。スイは勉強を放棄したらしく、机に突っ伏している。ミユは授業が始まってから一切動いていないかのようにピツシリと背筋を伸ばして椅子に座っていた。

「はい、ここは……」

歌音も真面目な奴だった。俺はというとまあ、普通に授業を受けている。普通ってのがどんなものかは想像に任せるが、決して不真面目ではないということを心に留めておいてほしいと思う。

「できました！」

「よし、正解だ。流石歌音だな」

「えへへ……」

歌音美里。本当に不思議な奴だと俺は思っている。クラス内や先生からの評判も良く、元気で可愛気のある女の子。短いツインテールと光り輝く瞳が特徴である。成績も結構いい方。

そんな子が俺なんかとつるんでいる。いや、言い方がヤンキーっぽいな、俺は一般人。えーと、仲良くしてくれているのだ。真面目な女の子は普通俺のような根暗なのかヤンキーなのかどっちつかずのような奴に接してくれるものなのだろうか。それとも彼女なりの平等なクラスメイトとしての接し方なのか。そう言えば彼女はいつもクラス内の全員と一言以上は話を交わしている。彼女なりのスキップなのだ、と俺は考えるだとすると全く不自然ではない。会話数が多いのも席が近いというだけの話。ただ、俺のような奴と話していると変な目で見られるようになるってことは覚えておいてほしいね。

放課後、俺は部活に入っていないため颯爽と帰るのだが……だが。

いつもは学校の喧噪から逃れるために早々と帰宅する。しかし、しかしこいつらが俺の家に住み着くとなれば話は別だ。落ち着いていられない。

さて、どうしたものか……。

「あれ、朝浦君？」

学校指定の体育服に着替えた歌音がそこに居た。

確かこいつは陸上部だったな……。それにしても……いや、なんでもない。

「どうしたの？ いつもならすぐ帰っちゃうのに。あ、ひょっとして新しく部活始めたの？」

「違うけどさ……なんと言うか、帰ってもうるさいかなって」

「うるさい？ 朝浦君って確か一人暮らしだったよね？」

「え、あ、まあ……ってかなんで俺が一人暮らしって知ってんの？」

「何言ってるのー？ 前に話してくれたじゃない、マンションに住んでるって」

「そうだったかな……」

覚えていない。他愛もない会話は記憶から抜け落ちていくものなのだろうか。

俺に限ってそんなことは……あるかもしれない。

「……………」

無言で俺の前の席に座る歌音。春だからといってその薄着はどうなのだろうか、せめて学校指定ジャージを上に着るとか……………。

「走ってたのか」

「そうだよー。でもなかなかタイム上がらなくてさあ」

「ふうん……………」

他愛もない会話。

多分これも。明日辺りには抜け落ちているだろう。

「わりいな、やっぱ帰るわ」

「あ、そう？　じゃあ私も部活に戻ろうかな」

「じゃ、また明日」

「うん、また明日ね朝浦君」

俺は歌音に背を向けて教室を出た。

#### 4話：虚像のヒビ（前書き）

毎回思うんですが、タイトルと内容が一致してませんね。 - ( ; -  
- A )

#### 4話：虚像のヒメ

ゆつくりと家に帰ると時刻はもう六時を回っていて、そろそろ食事の用意をしなければいけない時間だった。こんなことを考えるのも、居候が出来たせいでいつもの俺ならばコンビ二弁当で済ませていただろう。何せその居候がうるさいのだ。栄養バランスが万年横倒し状態だとか、食事の時間はキッチリと決めてあるだとか…………。にぎやかになったのは言うまでもない話だが。

「ただいまー」

学校でぼーっとして時間を潰してから家へと戻ってきた。すでにリビングの明かりはついていて、そこにはミュやスイが転がっているのだろう。

それよりも食事の用意をせねば。

「お帰りなさい、何の用事もないのに学校に居座り窓から同級生が部活をしている風景を眺め見るだけの非リア充さん」

メイドよろしく玄関で出迎えてくれた天使は、半永久的に毒を生産し、相手に投げつけるといふプログラムが組み込まれているらしい。

「やめろ……………それ心決めるから止める……………」

俺は半泣きで懇願したのだった。

「ふむ。確かに真実というものは時に人を傷つける刃物にもなり得ると天界で糞ジ……………神様が教えて下さいましたね……………」

何やら勝手に納得してリビングへと戻ろうとするミュ。って何のために出迎えたんだっ！

「おい……………なんと言つかさ、居候なんだから家主に対してもっと何かあってもいいと思うんだが」

「何ですか？ 『お帰りなさい（はあと）』。あつ、お荷物お持ちいたしますね。晩御飯の心配はしなくていいですよ、私が作っておきますから休んでいてください（さらにはあと）』という具合にメイ

ドよろしくやってほしかったのですか？」

全部ばれてやがる……いや、（はあと）はいらないが。

「残念ながらそんな人は画面の向こう側の新世界にしか存在しませんよ？ もしそういう生活が良いのであれば次元ごとお引越しをお勧めしますが」

「分かった、もう分かった……俺が悪かったから、もう止めてくれ」  
帰って早々の猛毒地帯。家のベットで休んでも猛毒は治りませんよーと言われているようだった。

安息の場は……ない。

「では、宿題が片付いていないので」

そう言ってミユは背を向けてリビングへと戻っていった。俺は玄関でうなだれていた。

ひでえ、ひでえ話だ。

同居・同棲というワードを聞くと何やらよいものに聞こえるが、これは違う。断じて違う。

いつそ変わってもらいたいくらいだ。

うんざりしながらも靴を脱いでリビングに入り、ソファアの上に鞆を放ってから台所へ。

冷蔵庫の中身を確認すると、かろうじて今日の夕食分の材料はあった。と、いうことは自動的に明日の朝はトーストに決定だ。またミユに何事か言われそうだが、こればかりは仕方がない。  
そうして俺は夕食作りに取り掛かるのであった。

「いただきます」

いつも一人寂しく夕食を食べている俺だったので、静かなのはいいことなのだが、正直誰かが居る時の沈黙は気まずいということを知った。

ということと話題を振ってみることにした。



ミユに振ると一言余計な言葉が付く上に俺のライフが削られるのでスィに話しかけることにした。

「なあ、スィ」

「ひゃわっ……………ってなんだこのやろー！」

「そんなに驚くことでもないだろ……。まさにソレなんだけどさ、お前学校でもやんの？」

「そ、それってなんだよ。アタシが何だだだだって？」

「いや、もうソレだよ。キャラ作りの話だ」

「作ってなんかねえよ！　これがアタシの普通だ！」

どう考えても虚勢だ。っていうか、見た目とのギャップのせいでどうしても微笑ましいという感想が漏れてしまう。

幼顔に低い身長、腰まである長い黒髪は綺麗っちゃあ綺麗なんだが……………な。

「だっ、だから。作ってなんかないっ！」

あ、あとそれに加えて声だ。どう考えても小さい子…………ええと、表現としてはアニメ声？

だからこそ、小学生程度の子供が頑張って背伸びしているという印象しか受け取れない。

それでも、悪魔なのだが（らしい）。

「今日の昼休みさ、歌音と話す時もぎこちなかっただろ。無理ならやめればいいだろ」

「あ、アタシはっ、悪魔として舐められちゃいけないの！」

「あー、そう」

「まとも聞いてないだろっ！」

ぶんすかと怒っているちびっこ悪魔は全く迫力がない。それに比べてこっちの天使は違う意味で迫力がある。

「なんですか。あまりこちらを見ないで下さい。穴が空いてしまします」

「いや……………」

「本当に穴が空きますよ？　あなたの目に」

「俺の目かよっ!？」

この調子だ。

天使と言え、なんだか神聖だとか心が澄んでいると言え、いいのか、まとめれば『優しくて良い奴』って想像すると思う。気品高い、というのか？

それなのにミユは話せば一言目には毒、二言目には毒、もちろん毒毒…………。

口さえ閉じていればすごく可愛くは見える。いや、見えるだけだからな。

肩に付くかつかないかぐらいの茶かった髪の毛に女の子としては少し高めの身長。スタイルもなかなかではないかと思っ

「ぎゃああああっ! ピーマンが眼球につ!」

「何だか邪悪な気配を感じたので」

なんと言っことだ、野菜炒めのピーマンがどうしてこうも的確に俺の眼球に。

避けられないくらい早いスピードで弾かれたピーマンは俺の黒目を覆った。

「視界が緑に…………」

「食べ物が無駄にははいけませんよ」

「誰がやったんだ、誰が」

ミユは心を読むのかもしれない。そりゃあ天使だったらその程度のことぐらい出来るのかもしれないが…………。

「そ、そう言えばお前達。金は持ってんのか? 俺は弁当なんざ作らないから学校での昼は購買か食堂なんだけど…………。ないなら渡さなくちゃいけないし」

「いえ、心配には及びません。糞ジジイ…………いえ、神様からいくらかいただいていますので」

「容赦ねえなお前…………」

「そつだよ、ぜ! だからお金のことは心配する必要はない。」

必要なものがあつたら自分たちで買うからな！」

「俺はお前のキャラ作りの弱さが心配だ」

会話で詰まるのはどうなんだろう。話す前に考えるべきだと思う。

「なあっ！ 今のはせーふ、せーふだっ！」

完全にアウトだった。

こうして夜も更けていく…………。

「と、いうことで居候のお前らにも働いてもらおうと思う」

夕食を取り終えて、各自リビングでゆっくりしていたところへ声をかける。

スイはソファーから起き上がって、ミユは机に広げていたノートから顔を上げて、俺は台所で仁王立ちをしていた。

「チッ」

「おいそこ！ 舌打ちするな！」

「だ、駄目だよミユちゃん。住まわせてもらってるんだから……少しは何かしないと……ハッ！」

「いや、もう遅いから。全部言い終わってから気付くの遅いから」

駄目だこいつら……。

とりあえず気を取り直して……。

「何もそんな大きなこと頼もうつてことじゃないんだ。家事を少し手伝ってくればいいんだよ。夕食とか朝食とかは俺が作るからさ、掃除や洗濯は分担しようって言うてるんだよ」

「なるほど、盲点でした。もし全てを任せていたのならば洗濯の際に陽助さ……下等……が私たちの下着でハアハアするかもしれませんしね」

「ひいいう。気持ち悪いよお」

「するかそんなこと！ ってか無理に毒吐こうとするな！」

会話で消費するエネルギーがこんなに大きなものだとは知らなかった……。

「だ、だから。とにかく、洗濯に関しては洗濯物籠を分けて用意しておくから、分けて洗うこと！俺は自分で自分の分をやるからお前らは自分たちの分をやれってことだよ！」

「そうですか」

「ああ、そうだ。あと、掃除に関してだけどこれは風呂掃除のことな。俺ら三人でまわしていくからな」

「何かと細かいですね。もっと大雑把なのかと思っていました。見直しました」

「そりゃどーも」

どうにも褒められている気がしない。皮肉っていつのか？

「では、今日は私がやりましょう」

「え？」

「何か問題でも？それと追加注文ですが、お風呂は必ず私たちが先に入ります。気持ちが悪いですから。それと覗きやラッキースケベ回避のために私達が入浴中は自分の部屋から出ないでください」

「ああ、……………それに関しては仕方、ないのだが……………言い方ってもんがあるだろ」

言い終わるとミュは風呂場へと向かっていった。

まあ、これで生活にあまり支障は出ないと思う。面倒なことは早々に回避しておかなければならないからな。

それより、ラッキースケベってなんだ……………？

ラッキースケベについて考えていると、ちよいちよいと袖をひっぱられた。

「ん、どうしたスイ？」

「ミュちゃんね、あれでも多分ホツとしてるんだよ、あなたがまともな人で。口には出さないけどよかったって思ってると思うよ。…

……………ハッ！

「ハッ！じゃねーだろお前！絶対わざとだろうが！」

「 違 え ！ そ ん な こ と 思 っ て な い ！    ア タ シ は …… え え と 、 あ れ え  
ー ？ 」

「 馬 鹿 か お 前 は ！ 」

マ ン シ ョ ン 三 階 の 朝 浦 家 は い つ も よ り 数 倍 騒 が し か っ た 。

## 5 話：先行少女（前書き）

夏休みが終わりました。（・・・）  
学校始まるううー

## 5話：先行少女

「うーむ」

雲ひとつない晴天の昼、朝浦陽助は屋上のベンチで一人考え込んでいた。

陽助の気持ちとは裏腹に澄み切っている空はいくらか憎たらしげで、陽助の目つきをさらに悪くした。

今このタイミングで屋上に人が来ようものなら風景と人物とのギャップに恐れを抱くだろう。そしてこれも言うまでもなくその人は逃げ出すだろう。

天使と悪魔との共同生活が始まってから一週間が過ぎた。特に正体がばれることもなく、同棲がばれることもなく穏便に日々は過ぎていっていた。

そのところは陽助も文句は無かった。しかし、変わったことが一つ。噂の広まり度合いと内容の誇張だ。

ヤンキー朝浦が美少女三人を昼休みに連れ回しているとか、いずれは校内の女子全員をひきつれてハーレムを狙っているとか、天崎美由に様付けで名前を呼ばせているとか（これはミユがわざと呼んだために広がったものである）。

色々とよくない噂……………何故か女関連のことばかりが出回っているそうだ。

だからこうして今の時間帯は屋上で一人飯を食っていたのだ。一緒に居るとまた変な噂が広まるかもしれない。

今思えば、転校初日にミユとスイが絡んでこなければこうはならなかった。しかも俺は忠告したし。

不機嫌になる。歌音までもが巻き込まれていることも気付いたからだ。

ガチャ、

「今日はいいい天気だな」

「そうだな、こんな日は屋上で授業をサボるにかぎ

って、わあああつ！」

「何が

って、ひいひいっ！」

俺の姿を視界に捉えたとたんに男子生徒が二人ものすごい速度で去っていった。

自分で思った通りの現象を目の当たりにして、テンションも下がる。普段からテンションが低い俺にとってはよくないことだった。これでテンションゲージは0に、午後の授業には耐えられないかもしれない。

はあー　　と深いため息を吐き、ベンチにもたれかかって空を見上げる。

高く、遠く、澄んでいて届かない世界。　　そういえば　　  
　　と思いだす。

神の爺さんと会ったところもこんな風に綺麗な空が広がっていた。天界と言っただろうか、あれはどこにあるのだろう。この空の上？　　それだと俺が見た天界の空の理由が説明できない。もしかして夢の中だとか？　　それだったら説明はつくが、なんだかメルヘンチックだ。

とはいえ、天使と悪魔と暮らしているこんな状況なのだから何があっても驚かない気はするが。

要は、なんでもアリってことだろう。

「朝浦陽助っ！」

凜とした声が屋上に響き渡った。

俺は何事かととっさにベンチから身体を起こし、辺りを見回す。声の主は屋上の入口にいた。



長い黒髪を後ろに束ね、ポニーテールと呼ばれる髪型をした彼女は両腰に手を当てて仁王立ちをしていた。

前、横ともに髪は規定内の長さで留め、ひざ下までの女子高生にしては長いスカートを履き胸元のタイも歪んではない。それでいて可愛らしさと言うか美しさを出すのだから女と言うのはとんでもない。

だがしかし、俺はこの女生徒と知り合いではなかった。それゆえに何故名前を呼ばれたのかが分からなかった。

「え、えつと。何事ですか？」

動揺を隠そうと試みるが返って裏目に出て、声がひっくり返ってしまった。

ベンチから立とうとするが、止められる。

「動くな！……………そこに座ったままでいい」

何、何これ。今から何が始まるんですか。この人の居ない屋上で何が！

「お前だな、女子生徒を一気に三人も連れ回して不純異性行為に勤しんでいる朝浦陽助と言うのは」

「ちょ、違つ。何その誤解！？ いつの間にそんな悪性の強い噂に派生したんだよ！」

前より格段にレベルアップしすぎだろ！

「証言者がいるんだ。彼女たちの転校初日に声をかけ、校内を案内すると見せかけて……………そんなことおっ！」

「色々おかしい！俺から声をかけたわけじゃねえ！ あいつらが勝手に」

『

死ねばいい』

「え？」

なんだ、今のは。

氷点下を思わせる冷たい声色で願うようにして囁いたのは、誰だ？

「なんと云うことですか！ あつちから言い寄ってきたからと言って弄ぶのですか！ くううう…………このような下半身が本体であるような男はすぐに成敗されるべきだ。くそう、武器さえあれば…………」

空耳か？ つ…………ていかなんだこの展開！？ このままじゃ俺が一方的にやられてしまう。というか、俺の話を聞こうとしてもしてくれねえ！ 噂って言うものはここまで邪悪なのか…………。

何か、打開策は…………。

ガチャ

「あー、朝浦くんここにいたんだ。ちつとも姿が見えないから探してたんだよ？」

屋上への扉から現れたのは歌音だった。小さなツインテールを揺らしながら太陽の眩しさに目を細めていた。

ナイスタイミングだ、歌音っ！

心の中でそう叫び、ヘルプを出す。

「あれ、結穂ちゃん？ こんなところで何してるの？」

「美里っ、危険だ！ 近づいてはならない、この男は歩く生殖器だ！」

「何を口走ってんだこの女は！ っていうか歌音、助けてくれっ」

「え、え？ 何がどうなってるの！？ とりあえず結穂ちゃん落ちて着いて……！」

「と、言うことだ。俺は何もしてはいない、無罪だ」

一通り歌音がこの委員長気質の女子生徒に説明したところで落ち付いた。

「うつ、…………美里はそんなことないと言っているが、実際のところは分からないではないか。脅されているだけかも…………？」

「ち、違つよ結穂ちゃん。朝浦くんは顔は怖いけど悪い人じゃないよ」

「確かに犯罪者級の人相の悪さだが……」

「ほつとけや！ 俺の顔の話はいいだろうが！」

屋上のベンチに三人並び、討論会が始まっていた。

ところでこの先行少女は芹川<sup>せりかわ</sup> 結穂<sup>ゆいほ</sup>と言うらしい。同じクラスではなく、隣のクラスで学級委員長を担っているのだとか。歌音とは一年生の時に知り合つたらしく、仲がよいのは家が近いこともあるからだそう。それにしたつて突つ走りすぎだろ……。

「わつ、また舐めまわすような目で美里を見てる……いや違つ、私を見てる！？」

「見てねえよ！ どうしてお前はそうなんだよ、なんか俺に恨みでもあんのか！」

「あ、あはははは……」

早くも仲介役を放棄しようとしている歌音を救うかのように、予鈴が鳴った。

「さて、時間だし教室に戻ることにしようか。美里、気をつけてね」

「大丈夫だつて結穂ちゃん。元はと言えば私が朝浦くんに構つてたから仲良くなつたわけで」

「もう俺先戻つてるからな……」

疲れ果てた身体と脳を休ませようと屋上から逃げるようにして引き上げる。屋上の扉を閉めた時に何か聞こえた気がしたが、気のせいだろう。疲れすぎて幻聴を聴いたに違いない。

階段を降りながら思ひだしたことがあった。

「一年の時に歌音と一緒にだつたつてことは……俺とも一緒にだつたつてことだよな……？」

何故だか彼女のことは覚えていなかった。

教室に戻ると各々が席に着き始め、授業の用意を始めているところだった。真面目な奴になると、すでに教科書をひらいて予習をしていたり、ノートに質問点などを箇条書きしている奴もいた。

「あら、どこにいたんですか」

「屋上だ」

自分の席に向かう途中にミュが顔も上げずにそう訊いてきた。なので俺も顔を向けずに呟くようにして言った。

「ぼっち……（ボソリ）」

わざと顔をそらしてそういうのが聞こえた。

違う、断じてそんなんじゃない！ お、俺はお前らを巻き込まないために……。

実際悪化した噂も飛んでたしな。

ミュは相変わらずだったので、スイの方を見てみた。

寝ていた。

お昼寝ですか？ ここは学校ですよー、と教えてやりたいが俺が声をかけると素っ頓狂な声を上げるので放っておくことにした。教師に当てられておろおろするがいいさ。

若干ダークな気分なまま席に着き、授業の準備を始めた。

少し遅れて歌音が教室に入ってきた。



## 6 話：逃げるが勝ち

「ただいまー！」

「ただいま帰りました」

「ただいまっ……」

スイ、ミユ、俺と順に帰宅の挨拶をし、リビングへ向かう。

今日は急遽授業の終わりにホームルームが追加され、いつもより帰る時間が遅くなったため三人で帰ってきたという次第である。これを目撃されていたらお終いだな。同棲とか普通シヤレにならないかな。

ドラマ、アニメ、漫画などとは違ってそんなおいしい展開は存在しません。これは俺の教訓です、皆さんしっかりと心に刻んでおきましょう。

「さあ、夕食です。働け」

ほらね。

「腹減った、今日はすっごい疲れたよー。ホームルームの長さってどうしてこうなんだろーうね。うっざいったらありやしない………ねえ、今完璧じゃなかった？ 悪魔みたくなかった！？」

もうソレ言ってる時点で破綻してますけどね。

途中までは別人のようだったのに急にいつものスイに戻った感じだった。

「ふう、帰ってきてそうそう料理か。俺は忙しい主夫だったの」

「そんな凶悪面の主婦はいないと思います」

「変な所に突っ込み入れなくていい！ ってか主婦じゃなくて主夫！ 性別考えろ！」

「わー、差別してますわこのかたー」

「すっげえ棒読み！？ どうやんだよそれ、今度教えてくれよ！？」

「拒否します」

「皮肉だよっ！」

大きな鍋に水を張り、コンロで強火に。

その間にフライパンではひき肉を細かくして炒める。

「今からお鍋作るの？ 腹へってまてねーぞ！」

「違う。簡単にミートソーススパを作る、あとお前それ演じれてると思ってるかもしれねーが『お鍋』だなんて悪魔は可愛らしくいわねーからな」

「うぐっ……うるさい黙れっ！」

頬をほんのり紅く染めて怒るスイ。あー、やっぱりいい加減『女生徒』というより『女の子』って感じたな。

「生卵投入するからな！ アタシのには生卵入れるんだからな！」  
「わかったわかった」

最近分かったことだが、スイは異様に生卵に凝っている。この間はおでんのたまごが中まで火が通っていたのでキレていた。どうやら生々半熟までの間しか認められないらしい。

確かに半熟たまごは何にかけてもおいしいとは思うが………ちよつとこだわり過ぎではないだろうか。

「ミュはどうする。なんかトッピングいるか？」

「では、チーズでお願いします」

こちらはチーズ中毒だ。何にでもチーズをぶっかけ、食べる。

確かに卵同様にほとんどのものに合うということは分かるのだが……

……カロリーとか考えなくても……いいんだろうなあ、天使だからまあ、今回はミートソーススパだからどちらをトッピングしてもおかしくはないだろう。

パスタが茹であがり、さらに移すと水蒸気が立ちあがる。その上にフライパンで少し温めたひき肉＋トマト＋etc. をかけるといい匂いが辺りを包む。

ごくり、と誰かが生唾を飲み込む音が聞こえた。

「さ、さて、準備もできたし運んでくれ」

「お、おうっ………さーて、たまごたまごっつと」

「チーズをぶっかけて、と」

予想以上にみんな、腹が減っていた。

「ご馳走さまでした」

腹を満たして満足した俺たちはリビングでごろごろとくつろいでいた。まあミユはいつもどおりリビングの机の上で教科書とノートを開いて落ち着いた様子でペンを動かしている。

そしてスイはというと、こちらまあいつもどおりリビングのカーペットの上でクッションを枕に寝転がっていた。

ミユは私服に着替えたが、スイははまだ制服のまま寝転がっている。明日も学校があるというのにそのままだと制服にしわが出来てしまう。

「おい、スイ。さつさとその制服脱げよ」

「ひうつ！？ いきなりなんですか！ 何の誘いですか！？」

「何がだよ！？」

「そそそそんな、た、確かにこんな恰好で無防備に寝転がっていたら年頃の男の子ははつじょうでわたしがあぶなくなっただけひいになりますわががが……！」

「いや、意味分からんし落ち着け！ 俺は制服がしわになるからさつと脱いで部屋着に着替えろと」

「制服にしか興味なしですか！？ 私の身体なんてどうでもよくてとりあえず脱ぎたての制服ならなんでもおつけーみたいな変態さんでしたかつ！ ひいいい」

「一言もいってねえ！ おい、ミユ。なんとか言っ……っていいえし！」

リビングには俺とスイだけになっていた。

騒ぎ出したから勉強の邪魔になって自分の部屋に戻ったのだろうか。

「やばいです、危ないです、このままじゃあ変態さんに犯されますーっ！」



「やっべ、もうめんどくせっ！ 収集の付け方かんねえ！ 誰か助けてくれっ」

ぎゃあぎゃあど騒ぎ立てていると、リビングと廊下をつなぐ戸が開かれて。

ガスッ、と俺の頭に英語辞典が突き刺さった。

「うるさいです。近所迷惑です。このハネケイソウがっ」  
ミユがお怒りになっていた。

そして英語辞典はものすごい凶器になり得ると俺は身をもって知った。

「痛って……………」

頭をさすりながら風呂掃除をしようと洗面台のドアを開けるが、そこにマッ リンがなかった。いや、容器はあったが、中身が空だった。

「あれ、無くなってたのか………… 買い置きもねえ。仕方ないな」

一旦リビングに戻って、確認。

「おい、ジツク ンないんだけどさ。最後に使ったの誰だ？」

「ああ、私ですけど今日の朝確かに言いましたよ。お風呂の洗剤が無くなってますよ、と」

「そうだったのか………… いや、普通に納得したけど言ったの朝なのかよ」

「問題はないと思いますけど」

「それはこっちが決めんだよ！ まあ、いいや買ってくる」

「今からですか？ じゃあ早く行ってきてください。そして早くお風呂を入れてください」

「言われなくてもそうするが」

とりあえず買いに行く旨を伝えてリビングから出

って！

「お前朝言つたのって『バスが無くなりましたよ』っじゃなかったか!？」

俺がそう問うと、ミユは悪びれた様子もなく。

「ええ、ですからバス・マジ クリ でしょう? 略してバスです」  
確かその時俺は、『バス? 俺たち歩きで学校行つてんのになんか関係あるのか?』って返したはずだ。

バスってそっちかよおおつ。busの方じゃないのかよっ!

「わざとだろっ!」

「何を フツ 言ってるんですか」

「笑ってんじゃねーか!」

「早く入ってきて下さい。っていうか行け。間に合わなくなるでしよう」

「何にだよ……。今度からはちゃんと伝わるように報告すること!」

「分かりました早く行つてきてくださいこの腐葉土が」

なんつう天使だ……。こいつあひぬくれてるね!

近くのドラッグストアまで徒歩数十分なのだが、体感時間は結構長く感じたりする。なんせ夜だし、静かだし、何よりも一人だからだ。今まで一人だったのに何言つてんだ、と自分に毒づく。確かに今まで一人だった。でもあいつらが来てから時間が早く過ぎていくように感じられる。誰かが言つた『楽しい時の時間は短く感じる』って奴かもしれない。まったくらしくないと思う。  
などと色々なことに頭を巡らせていると、女性の声が聞こえた。

「あなた達っ、こんなコンビニの前で座り込んで迷惑になるとは考えないの？」

どこかで聞いた声だった。えーと、確か今朝に聞いたような気がしなくもない。

なるべくトラブルには関わらない主義なのだが、何故だか気になった。

そーっとコンビニの近くまで寄り、街路樹に身を隠して様子を窺う。その女性は長い黒髪を後ろで束ね、ポニーテールと呼ばれる髪型をしており、てあれば芹川結穂じゃねえかつ！

何してんだあいつはあつ！ わざわざあんなモロ不良ヤンキーみたいな奴らに関わりに行かなくてもいいじゃないか！ 数は………3人もいるし。髪の毛の色が赤だとか茶色だとかなんかカラフルだしっ。

「んだ、お前。文句あんのかア？」

「文句があるから言ってるの！ 邪魔になってるの！」

「この女……舐めてますよねえ！ ナニ？ いい気になってんのかなあー！」

男たちの一人、茶髪が芹川の腕をつかむ。

「つてアレ、なんかおかしい奴一人混ざってないか？」

「きゃっ、ちよつと、離しなさいよ！ こんなことしてただで済むと思ってるの！？」

「へえーえ、どうなるのか教えてほしいなあ」

「よく見たらこいつ結構可愛いじゃねーか。どれ、俺たちがちよつと……」

「触らないでっ！」

振り回した芹川の腕が赤髪に当たる。大したダメージにはならないし、赤髪もそれを知っていて避けなかった。

「いつてーな、ぼうりよくはんたい。っていつてもこの女から仕掛けてきたからしかたないよなあ？」

同意を求めるように他の男たちに言いかける。他の男たちもにやに

や笑いながら答える。

『触らないでって、言ったでしょ。気持ちが悪い』

「あ？」

「お？」

赤髪、茶髪が同時に疑問符をつけた言葉を発する。それに構った様子はなく芹川は、

「ちよつと、店員さん……なんで助けしてくれないのっ」

コンビニ店員に助けを求めている。しかし、コンビニの店員は気弱そうで、先ほどからチラチラ様子を窺っているものの飛び出してくる気配はなさそうだった。

これは、万事休すってやつだな……。

この時間帯、歩道には誰もいないしコンビニの客もいない。店員は使えないし、不良どもは三人。

おいおい、俺ってこんなキャラだったかなあ。誰かを助けてやれる奴だったかなあ。

つかでいいのかよそんなこと。いや、出来ないことはないような気もしなくはないけども……あーっわけわかんなくなってきた！

「へへへ……この時間帯じゃあな。誰もこないし」

「そうだなア。では、この女の」

「だ、だっ、誰か助けてっ……………」

芹川結穂の声が震えていた。

俺は何故だか走るのではなく歩いてコンビニの前まで向かっていた。そして一言。

「や、やあ。 芹川。その人たち知り合い？」

なななな何やってんだ俺は

っ！

なんでナチュラルに話しかけてんの！？　ここは走っていて驚いている間に芹川助けて戦闘無しに逃げるのが一番なのにつ！

イカン、俺もなんかおかしくなっているらしい。普通に意味不明な行動取ってしまった。

しかし、もう収集はつかない。それならいつそのままっ。

拳を握りしめながら相対する。

「しっ、知り合いなわけないでしょ！　助けてよっ！」

「ああん？　兄ちゃんさア、今俺らお楽しみタイムに移行しようとしているワケ、見ないふりしてあっちいったいった」

「そうだぜえ、まさか三人相手にやろうってんじゃないよな？」

「確かに、三人はつらい、つらいけど……。俺の噂が改善されんなら、よくね？」

握りしめていた土を茶髪にはら撒き、そのままタックルをかます。

降りかかった土に気を取られていた茶髪には避ける術もなく、

「うお」

バランスを崩した茶髪は芹川を離し、よろめく。そこにすかさず肘をたたき込み、一気に詰める。

「っおらっ！」

茶髪はコンクリートブロックに躓いて後ろから倒れていった。頭は打っていないだろうか。

大丈夫だろうと願いつつもまずは一人。

次は、と振り向くとそこにはもう赤髪が待機していて、

「ッシュ」

「がっ！」

赤髪からのボディブローを受け、身体が折り曲がる。そこに上から拳が振ってきたので転がってかわす。が、しかしかわした先にはもう一人の男がいて、足を上げていた。

踏みつけられるっ！

そう思った俺は、男の軸になっている方の足を狙って倒れた状態のまま蹴りを入れる。

面白いように膝が折れて男は地面に転がる。すぐさま立ち上がろうと迫ってくるが、ここはごめんなさい、顔面を蹴り飛ばして黙らせる。

「っつら！」

「あぶなっ！」

またも赤髪のプロローが真横から迫ってきていた。それを間一髪で避け、距離を取る。さて、最後の一人まで絞れたならもうこれは勝ちだ。そう、勝ち。

絶対に負けることはない、何故なら。

「ってことで逃げるぞ芹川っ！」

「え、何、引っ張らないでっー！」

逃げるが勝ち、だから。

## 7話：日常での籠城（前書き）

テスト期間入りました；

更新速度がかなり低下するつえに内容が薄くなっております。

どうかご了承のほどをお願いしますm（| |）m

## 7 話：日常での籠城

走って走って、さらに走って走って。自分の体力の限界に嫌気がさしながらも走ってたどり着いたのは駅前だった。

ただ闇雲に走ったわけではなかった。人通りの多い場所に移動したかっただけなのだ。ここならば交番も近くにあるし、人も多いし、なんとかなると思ったからだ。

それにしても疲れた。

あの赤髪から逃げるのにどれだけ走っただろうか。うちのマンションは駅から1km付近にある。先ほどのコンビニはうちのマンションより駅寄りなので……あんまり走っていないかもしれない。まあ、そんなことよりも今は逃げ切れたことに喜ぼう。

「ちよっ……あなた、朝浦っ……なんのつもり!？」

「なんのつもりって……助けてっていったじゃん」

息を切らせながらも会話を続ける。

何故だか芹川は目を潤ませながらも眉を吊り上げている。

「べ、別にっ……」

「っーか、なんだよあれ。わざわざ絡みに行く必要あったのか？いくら学級委員長だからってそんな……」

「嫌なの」

すっ、いつもの掴みかかってきそうな勢いは消え、目は光を失っていた。

その目は、知……っている。

最悪なもの、苦しくても忘れられないもの、自分の中の枷、そんなものを抱えている目だ。

「ああいうの、嫌なの。誰のためにもならないようなことを平気でやって、迷惑掛けて、誰からも煙たがられて、……性根の腐った



ような奴ら。死んだっていいような奴らがいることが、そこに存在していることが嫌なの」

「そんなこと……言ったら、駄目だろ」

「……でもね、嫌なの。 気持ちが悪いの。 朝浦陽助もそんな奴だと思ってた」

「へ？」

俺？ 何故にいきなり俺？ 今シリアス展開じゃなかったのか。 って、ああ、アレか。噂のせいとか、そんな根も葉もない噂のせいで初対面で殺されかけたのかっ！

「でも、少しは違った。 今でも何か考えてるんじゃないかって気持ちが悪い。 ……うつん、言い過ぎるのは分かるんだけど……でも違ったの。 少し、ね」

「意味が分かんないんだけど………どういう？」

「なんでもない。私、こつちだから」

そういうとポニーテールを翻して彼女は背を向けて行ってしまった。 何故だか、学校に居る時よりも幾分かその背中中は小さく見えた。

俺の、幻覚だろうか。 考え過ぎだろうか。

それでも、見えたんだ。

「あ、バス・ ジッ リン………買い忘れた」

家に帰ったところにはすでに10時を回っており、怒りのオーラを無言で発するミユとソファで転寝するスィに出迎えられた。

「い、いや………これにはわけがあつてな？」

「早くお風呂を洗ってください。 ついでにあなたは人間から足を洗って下さい」

「俺に死ねと！？ 確かに遅くなったのは謝るけどさ！」

俺が洗剤の有無に気付いて買いに行こうとしたのが9時だった。つまり、一時間経過しているということだ。そりゃあ一時間も待たされたら腹が立つだろうが……仕方ないじゃん。

「まあ、いいでしょう。私は早く寝たいのでお風呂を早く沸かして下さい。二回言いました、この意味が虫けら陽助様に理解できるでしょうか」

「わ、分かった。すぐにでも……」

あまりにもオーラが絶大すぎて、毒に対しての突っ込みすら忘れていた。

それにしても、あっさりと許してくれたな……。それはそれでラッキーだが。

だがそれは、今日の話である。

「起きてください、おつかいレベル0さん。早く起きないと私の光速の拳があなたの鳩尾にツシュ！」

肺から空気が絞り出された。

「つぐはう！？ …… な、殴ってから言うなあああっ！」

ヤバい、言ってから拳を放つまでのタイムラグの無さがヤバい。

こいつはキレてるね、昨日は許してくれたんじゃないかって保留にしてくれたってところかっ！

「わ、分かった。起きるけども、……もとはと言えばお前が洗剤のことをややこしく言うから」

「そうですか、では。……ああ、スイも起こしてきてくださいね。

私はリビングで微動だにせず待ってますから」

シカト、いくない。

いじめ、いくない。

「な、なんてことだ……居候のくせにっ！」

俺は多分怒ってもいいと思うんだが。

「はあ、……性格なんだろうな」

どうしてか怒る気になれない。　なんと云うか、なんだろうか……

「あんまり人と接することがないからかなあ……」

独り言をつぶやいてみる。　多分、そう思ふのならそうなのだろう。ベツトから起き上がり、ハンガーにかけてある制服を手取る。とりあえずズボンとワイシャツだけを着て部屋を出ようとする。

あ………れ………？

部屋のドア、少し隙間が開いて………？

目が合った。　隙間の向こうから覗く目と。

「独り言……。流石一人ぼっちですね」

目がそう言った。　っておい！

「お前はリビングで微動だにせず待つてるって言ってただろうが！  
？　なんで人の部屋覗いてんだよ！」

「いえ、朝ですのう」

「いや、全く意味が分からんのだが」

「まあそういうことにしておきましょうか。　長いこと出てこなかったものですから色々と気になりました」

これ以上の詮索はやめよう。　……というか俺はなんで後手に回ってんの？　くっ、こいつ。

ミユと正面に向き合う。

よく見ればこいつ、可愛いんだけどなあ……。　前にも言ったけど毒がね。

「な、なんですかー。　そんなに見つめられたら照れてしまいます  
うー」

「棒読みで言われても反応に困るわけだ」

「そうですか」

「そうです」

「では」

「おう」

そのままミュは食卓に付き、俺は隣の部屋へ。

部屋のドアの前に立ったところで、思い出す。

スイは確か寝起きは暴走していて何度変態扱いされたことか。というか、俺が起こしに行くから問題になるのであって、ミュが行けば万事解決じゃね？ とは思うのだが、ミュは……。

食卓の椅子に腰をかけて微動だにせず待っている。

これは、駄目だ。

そもそも、俺のことは起こすくせに何故にスイは起こさないんだ。

同じ部屋で寝てんだから自分が起きたついでに起こせばいいものを……。

文句ばかり垂れ流していても仕方がないので、一応ソックをしてからドアを開ける。

案の定、幾重にも積み重ねられた布団の中で虚勢張り悪魔は眠っていた。というか眠っているのだろう。

分らない。ここからじゃあ見つけれない。

この山から探し出さなければならぬ。これが面倒でおそらくミュは起こさないのだろう。

っていうか、なんでこんな布団を……。引つ越し当初はこんなことがなかったのに。

「おい、スイ！ お前は布団の中で籠城でもしてんのか、はよ起きろ！」

一枚ずつ引き剥がしながら声をかけるが、見つからない。

布団を引き剥がしているうちに、何か見知ったような感覚がした。

何か、食べ物に似てないか……これ？

「きゃべつ……？」

城からキャベツ城へとレベルダウンした。

きゃべつがモチーフなら、馬鹿悪魔は中心にいるのだろう。

均等に布団をはがすことを止め、一気に中心部まで捲る。

中心には小さなスペースがあって、そこに丸くなるようにしてスイ

は眠っていた。

「窒息死するだろこれ……つてうえええつ!？」

この間俺は注意した。寝るときは下着だけではなくパジャマを着用せよと。

多分寝る前には着ていたのだろう。だが、それはスイの寝相の前には無意味なのか!？

何故にパジャマのズボンがずり落ちている!？

そしてまたも計ったようなタイミングでスイは目を覚ます。

「ひっ……。また朝這い!？ しかも下から脱がすという上級者!？」

シュバババ、と表情を変えながらも最終的に行きついたのはやはり涙目だった。

「何が上級者!？ つうか、このパターンはもういいよ!」  
カシャ、と背後で音が鳴る。

恐る恐る振り向くと、そこには。

「少女を襲う目つきの悪い男子学生……」

微動だにしないと公言していた彼女がいた。

「何撮ってんだてめえ! それはシャレにならないから消せ、いや消して下さい!」

「これで私は絶対的支配者確定ですね」

「不吉な言葉っ!？ 俺を社会的に抹殺するつもりかっ!？」

「……………」

「なんで何も言わない!？」

また、にぎやかな朝を迎えることとなった。



## 8話：あだ名の付け方（前書き）

テスト勉強の合間に投稿です。

かなり更新に間隔が開きました、申し訳ございません。

次はテストの終わった水曜日夜に更新できると思います。  
皆さまどうぞ次もよろしく願います。

## 8話：あだ名の付け方

ミュ、スイと時間帯をずらして家を出たせいでいつもより早めに登校する羽目になってしまっていた。

こういうのは普通、家主である俺が後から出るべきなのだがスイがまだ寝ぼけて歯ブラシの柄の方に歯磨き粉を付けて歯を磨いているというカオス極まりない状況だったので、後のことはミュに任せてさっさと俺は出ていったわけである。

あのまま待っている、時間帯をずらした時に遅刻になる可能性があったからな……。

出来るだけ悪い印象は他生徒や先生に与えたくない。俺だって真面目に学校生活を送っているんだ。

それに、前の噂の件もあるしな…。

そんなことを考えつつ歩いていると、昨日のコンビニが見えてきた。ああ、……あの不良達って普段何してんだろうな。ここで待ってたりしないよな？　っていうか、うちの生徒ではなかった気がするんだけど。

そのとき、ザッ　と昨日俺が様子を窺うために隠れていた街路樹の後ろから人影が現れた。

「！？　ほんとに昨日の奴らが現れていなかった。」

以外にも、木陰から現れたのは昨日俺がここで助けた芹川結穂だった。

「何してんだお前」

そう呼びかけると、彼女はビクツと身体を震わせてこちらを窺うようにして見つめてきた。

「べ、別に……」

「それ昨日も言ってただろ」

「昨日ここで朝浦にあったから、ここに居たら会えるかなって思っ



たの！」

「は？」

「へ？」

この通学&通勤時間帯の交通量の少くない通りの真ん中で彼女は何を言っているのでしょうか？

ほ、ほら。昨日とは違うコンビニの店員も何事かとこっちを見ているじゃないか。

通りすぎる女子中学生がにやにやしながらこちらを指差しているじゃないか！

「お、お前は一体何を……」

「違う！　そういう意味じゃなくって。　お、お礼を……言おうとしただけなんだからっ！」

彼女は頬を赤らめながらそう叫ぶと、走り去っていつてしまった。

わけが分からない。　っていうか、お礼なら昨日の夜にそれっぽいことを言ってくれた気がするが？

それにしてもなんなんだ、わざわざこんなところで待っていないくても学校で言うなりすればいいものを。

くつ。今度はコンビニの店員がにやにやしてやがる……。

周りの不可解な笑みに包まれながらも、俺は学校に遅れないよう歩みを速めるのであった。

いつもよりだいぶ早く教室についてしまったので、特にすることもなく机に突っ伏していたところ、

あれ、なんで隣のクラスの学級委員長がここに？　だとか、相変わらず美しいなア……といった声が色々な方向から聞こえてくるので顔を上げてみると、そこに今朝の彼女がいた。

何故か赤い顔をして。

「なんだ、まだなんか用があんのか？」

「え、えつと……。昨日は助かったわ、朝浦のおかげで……。何もなかったわ」

「俺は何事かあったけどな」

「だ、だから。あの……。その……。今日の……」

「シカト？」

「だ、だからっ！」

「おう！？」

芹川が何かを言わんとしたところで教室のドアが思いっきり開き、これもよく分からないのだが元気いっぱい歌音が入ってきた。

「おつはよー！ あれ？ 結穂ちゃん、このクラスで何してるの？」

その後ろからはミュとスイが並んでいた。　どうやら一緒に登校してきたらしい。

まあ、歌音のことだから元気いっぱいなのは『転校生と一層仲良くなれたから』だろうと察しはつく。

それにしても、一気に騒がしくなったな……。

早めに話を付けるため、芹川に先を促す。

「んで、なんだって芹川？」

「や、やっぱりなんでもないっ！」

芹川はやはり叫ぶようにして台詞を吐きその場から退散する。

それを今朝と同じように見送ってしまう俺。　さっきからループしてね？　これ。

「あれ？ 結穂ちゃん、結穂ちゃん！？」

友達がいきなり爆走したとしたら流石に驚くだろう。　歌音も目を丸くしていた。

っていうか、なんでお礼ごときでこんなに遠回りになってるわけですか？

別にいい、って今朝も言っただけなんだけどなあ。

「はっはーん。分かった、これは……。昨日だねっ！」

急に歌音が何かを悟ったようで、笑顔のまま俺に人差し指を向けてきた。

ビシッ、つと突きつけられたその指に俺はたじろぎつつも、訊いてみる。

「な、何が昨日なんだよ？」

昨日は確かに芹川を助けたが……それがどうした。

「そう、結穂ちゃん……そうなんだね」

「おうう！？ なんだお前、いきなりテンション上げんな！ 朝から本当にどうした……」

「おはようございます、鈍感朝浦さん。相変わらず極悪人面のくせに青春を謳歌していると思うと吐き気と鳥肌が一気に襲ってきますね」

「ちよちよ、ちよつとまでお前！ なんで俺はそんなに罵られなきゃいけないんだよ！」

「ふ、ふん。 おはようだぜ、朝浦。 ……きよきよきよ、今日も、ごう……」

「お前は無理に言わなくてもいい」

強烈な毒舌をふるってくるミュと、今日も悪魔っぽく振舞おうとしているスイ。

いつも通りの日常のように感じられるが、違う。なんか違う。

「これは……何が起きている？」

俺には理解できそうもなかった。

「それよりも歌音。 えらくご機嫌だよな」

「え、うん。 美由ちゃんと優美ちゃんと登校してきたんだよー！ やはりそうだったか。 人と仲良くなることで幸せになるってお気楽な奴だよな。」

「それにしても美由ちゃんと優美ちゃんて名前似てるよねー。 たまに間違えちゃいそうだよ、だってひっくり返したただかもんね。 あだ名つけようよ、あだ名。 仲良くなった記念にねー！」

俺も思っていた。学校でミュ、スイ、と呼ぶことはできないし何かいい方法は……あった！

ミュ、スイと俺があだ名をつけてしまうことである。

「俺が、あだ名をつけてやろう」

「お断りします」

息継ぎの一瞬の隙間についてこいつは断りやがったっ……………!?

「待て、いいあだ名かもしれんぞ」

「そもそも朝浦さんとはお友達になった覚えがありません。他人からあだ名をつけられるときは辱められるときだと相場は決まっています」

「美由ちゃん……それはひどいんじゃないあ？」

「いいえ、万年発情期の犯罪者面にまともな名前を名づけられるはずがありません」

「泣いてもいいはずだ。これは俺、泣いてもいいはずだ……」

がつくりと肩を落とす俺の頭を撫でつつ歌音は、

「い、一応聞いてみようよ、朝浦君が一生懸命考えてくれたのかもしれないしっ」

焦ったようにフォローを入れた。それにしぶしぶといった感じでミュは頷き、スイは何故かふんぞり返っていた。

「天崎はそのままミュ、黒崎はスイ。なんかでどうだ？」

その言葉に天使と悪魔は硬直し、逆に歌音は頭の上に疑問符を浮かべていた。

「なるほど、朝浦さんも猿並みには知能が回るそうですね。それがいいでしょう」

「ナイスアイディアじゃん！……じゃなくって、仕方ねえな！」

「素直に褒められんのか！？ それにお前は話すことを決めてから口に出せや！ もう滅茶苦茶だぞ」

「ねーねー、なんで優美ちゃんが『スイ』なのかなー？」

次はこちらが硬直する番だった。

「なんで？ なんでってそれは……本当の名前だから、ってこれは答えにならないし。盲点だったっ！  
どどど、どうすればっ！」

「そ、それはアタシが水が好きだからだっ！」

「え、そうなの？」

「そんなんだ！　いつもご飯の時にはお水飲んでるでしょ？」

そう言えばスイは何かと水を飲みたがる。お茶は何か濁っていつて嫌なのだという。というか、それはお茶の全てを否定してないか？　まあ、そんなことで水が好きらしい。前に透明度がどうか言っていたが忘れた。

「そーだったね。でも、なんで朝浦君が知ってるの……？」

第二波の攻撃が飛んできたとき、ちょうどチャイムが鳴った。

「よ、よし、歌音。授業が始まるぞ、用意しないと！」

「そうですね。ここばかりは菌類さんに従っておきましょう。あ  
と、スイ。ないすでした」

「え、え！　私よかった！？　良かったのかあ………って違う！  
？」

違うじゃねえよ……と突っ込む前に担任がクラスに入ってきた。

全て、計画通りっ！ではないが、とりあえずは誤魔化せたのでよし  
としよう。

それにしても、スイも役に立つ時があったな……いつもバカにして  
いたが、今日は助かったぞ。

そして俺は歌音にばれないようにそっと汗を拭うのだった。



## 9 話：知りたがり（前書き）

テスト終わりましたぐ（。？）ノ  
更新率も上昇すると思うので、問題はないと思います。

## 9 話：知りたがり

昼休みを知らせるチャイムが鳴り、午前の授業は終わりを告げた。今日もというかなんというか、ギリギリ分かる範囲内で授業についていっていたのだが、やはり凡人の俺では理解力に欠けるということが分かった。

いや、いつもそう思うのだが、改めて実感したというところが大きいだろう。

「ふあー、やっぱり数学は難しいよね。朝浦君は今日のところ分かった？」

前の席の歌音が振り返ってそう訊いてくる。

「いや、正直ギリギリってところかな。これはテストが酷いことになるそうだ……」

「えー、今からそんなこと言わないでよう。私も不安になっちゃうよ」

歌音も相当苦戦しているようだった。

その点、ミュは授業中に当てられた問題をスラスラ解いていて、教師すらも少し驚かせていた。

流石は天使。やはり天使と言うものは頭が良いものなのだろうか、それともミュが特別なのか。

そう言えば、ミュやスイの同属の話を聞いたことが無い。

俺が知っているのはあのやたら適当な神様だけだし。それから推測するに、ろくな奴がいまいような気がしてならないのだが、そこはどうしようもない。

そんなことを考えていると、またもや俺のクラスに来客があった。今朝も訪れた、隣のクラスの学級委員長だ。つまり芹川結穂と言うことになるのだが。

「朝浦陽助！」

「はいっ！　なんでしよう!？」



今朝の状態が全く嘘だったかのような気迫で、俺の元へと近づいてくる。

何やら覚悟を決めたような顔をしている。ほんの少し、頬が赤いのはどうしたのだろうか。気合の入れ過ぎで頬を叩きすぎたとか？

「こ、この間のお礼、を、受け取ってくれっ！」

どんっ、と俺の机の上に置かれたのは何やら箱型の物体。

「何だこれ、爆発物？」

「んなわなけないでしょ！ お礼だと言っててるの！」

「おゝ？ 結穂ちゃん。ついに決心したのかな？」

歌音がいつの間にもやら芹川の隣に立っており、肘で芹川のことを突いている。

俺はその箱型の物体の、上蓋をとってみた。  
するとそこには。

「お、おお……」

程よく詰められた白米が箱の半分を制圧し、その中央には赤い梅干しが乗っている。もう半分の領地には、タコさんウィンナー、唐揚げやプチトマトと言った定番の兵隊がそこに鎮座していた。

要するにこれは。

「弁当？」

「そ、そうよ。昨日のお礼にお弁当を作ってきたの、お礼によ！」

「なんで二回も言っただよ……。でもこれ、本当にもらっていいのか？」

「お礼だと言っててるでしょ」

「そ、そうか。じゃあありがたくもらうよ。今日の昼はパンの予定だったからな。助かったよ」

「……………」

「……………」

ニヤニヤしている歌音はいいとして、何故芹川はまだここに居るのだろうか？

別に俺の食べるところを見ていたって面白いことなんか一つもない

はずだけどな。

「本当に鈍感野郎ですね、あなたは。早く死んだ方がよいのでは？」

「ちよつと待てお前。何故に俺はそんな暴言を吐かれなければならないんだ……」

いつの間にか俺の席の近くにやってきていたミユがそんなことを言い出した。

スイは絶賛睡眠中である。

とりあえず、腹も減っているし頂いた弁当を食べよう。まずはおかずから一口。

「……うまいな」

「べ、別に普通でしょ！」

そこで俺はようやくミユの言っていたことが分かった。そういうことか。

「ありがとな、芹川。すごく美味しいよ」

「~~~~~！」

感謝の意を伝えると、彼女は何故かすごい勢いで走り去っていつてしまった。

飯を、取りに言ったのだろうか？

そこで歌音が。

「ふっふーん。大成功だね！ あ、そうだ、朝浦君。その弁当箱は私が返しておくから、食べ終わったら私に渡してね？」

「え、なんでだ？ 芹川と一緒に飯食わないのか？」

「ん？ 何言ってるの朝浦君。もしかしてマジボケ？」

「何が？」

「え………？」

そのとき何故だか歌音はムンクの叫びのような顔に変化した。

「おあつ、お前！ 何なんだその顔は！」

「あーさーうーらーくーんーはー、マジでした。がっくし」  
「意味が分かんわ！」

そんな中、ミユはまたもや俺のことを蔑んだ目で見ていた。

午後の授業はあつという間に終わってしまい、教室はすでに放課後モードで部活に行く者や残っておしゃべりを始める者などで溢れかえっていた。

俺はと言えば、どちらでもなくいつものように残ってはいるが自分の席に座ったままでいるという放心タイムになっていた。

理由は前に説明したとおり。しかし、今日はアイツらに聞きたいことがあった。

天使と悪魔が俺の家に住み着いてからかれこれ2週間は経った。それなりにクラスに馴染み、歌音とは特に仲良くなっている。それは良いことだ、風呂掃除の手順も覚えたし朝浦家ルール（陽助発布）も徐々に適用されて言っている。

だが、肝心のここに来た理由が明確になっていない。

というか、修行のために来たと言ってたよな？ アイツら何か修行してるのか？

人間と触れ合うことが目的だと言っていたけど、本当にそんなものでいいのか？

なんというか、詳しいことをもつと教えてほしい気がする。終わりはあるのか、とかな。

共同生活が始まって俺も疲れているのかもしれない。なんだか早く解放されたいような気分だったのだ。

そんなことを考えていても仕方がないのだ、なんだかんだで付き合いすぎていくしかないような気がした。だって神様直々に頼まれたからな、あの超適当な神様にな……。

「やべ、なんか頭痛くなってきた………」

あの天界（？）での出来事を思い出すと頭が痛くなってくる。 神

がアレでいいのか……。

そういえば、ミュやスイは人間界のことをちょいちょい質問してくるが、俺はアイツらの世界のこととか知らないんだが。

特に知っていてプラスになることはないだろうが、マイナスにはならないだろう。

というか、俺自身が少し興味がある。

ふと、窓の外を見るとグラウンドで陸上部が活動していた。

歌音はどうしているだろうか。

その姿を探して目を走らせていると……いた、ハードルを運んでいる。

楽しそうに部活仲間と話をして笑っていた。

それはなんだか平和で、日常を思わせるのに十分な見本だった。

「がんばってるなあ……」

気が付くと、教室には誰もいなくなっていた。

夕暮れの光が差す放課後の教室、なんだか神秘的な空間に紛れ込んだようだった。

鞆を持つて立ち上がると、教室の出口に一人の女生徒が立っていた。始めて見る顔だったので、同じクラスの人ではないと簡単に分かった。少しウエーブがかかった髪をしているその女生徒とがっつりと目が合い、気まずい雰囲気が漂う。

「え、と……」

俺が口ごもっていると、彼女はその強気な目の中に柔らかな光を灯してふっと笑い、踵を返してそのまま行ってしまった。

同学年のはずが、なんだか大人的な雰囲気をもった女の子だった。もちろん名前は知らないし、会ったこともないはずだった。だけれども何かが引っかかった。

上手く歯車の合わない感覚。そんなものが俺の心の中にはあった。

家に帰ると、居間では珍しくスイが勉強していた。隣ではミュが同じように勉強していたがその差は歴然だった。何よりも姿勢が違った。ミュはいつも通りシャキッと背を伸ばしてイスに座り勉強しているのに対して、スイは机に肘を着きながらあれこれと唸り、頭から煙を立ち昇らせていた。

なんだか出来る子と出来ない子の例がそこに並べられているように見ているこちらが鬱な気分になりそうだった。

たまにスイはミュの方に視線を走らせているが、ミュはその視線に対応することなく手を動かしている。

「なんだお前ら、勉強してたのか」

「おかえりなさいませ、低知能さん。テスト前の勉強ですよ」

「お、おかえりい……私はもう死にそうだよお……ぐすん」

いつも通りの毒舌というか蔑みに加えて今日はスイが性格を取り繕おうともせず頂垂れていた。

今朝、歌音との会話にも出てきたが、もうすぐテストなのだ。

テストの度に学年の番数が発表されるのだが、凡人である俺はいつも中間辺りをうろろしている。

歌音は前に話した通りに賢い。それなりに順位の方は高いのだろう。いつら天使と悪魔は……まあ、なんか見た感じで分かる。

ミュはおそらく上位層、普段の授業と家に帰ってから勉強の度合いでこんな俺でも大体予想はつく。

対してスイは、まあ……下位層だろう。

悲しいがこれが現実と言うものである。

「あ、そうだった。お前たちに聞きたいことがあったんだよな。主にお前たちのことについてんだけど」

鞆を自分の部屋に放り、ソファーに腰をかけながらそう言うと案の定予想していた応答が返ってきた。

「プライバシー侵害ですね」

「その答え方は予想済みだったんだが……。そうということじゃないんだよ！」

「天使のこととか悪魔について聞きたいのですね」

「分かってたんなら面倒な言い回しするなよ……」

「か……陽助様……いいえ、下等生物様が予想していたことを私は予想していたということがここで分かりますね。流石は単細胞です、流れが読みやすい」

「え、え、なんでこの会話の中だけで俺がこんなに蔑まれているわけ！？ あとミユ、お前なんか怒ってないか？」

「いえ、いつも通りかと」

「いやね、いつも通りなんだけどもさ、なんか違うつていうか……。もうこれがいつもどおりって言える俺はもうヤバいと思う。」

「アタシたちの世界の話？ ふっふーん。教えてあげようか？」

「スイがこちらを向いて反応する。先ほどの勉強に弱った様子とは打って変わってなんだか得意気である。」

さて、スイに国語力があつたかどうかが問題なんだけどな。

「して、なんでそんなことを急に言いだしたのですか？」

「そりゃあ、俺はお前らのことあんまり知らないしさ、一応これからも一緒に居るわけで、少しでも知れたらそれでまた何かが分かるようになるっていうか……。いや、とりあえずは俺の興味かな」

「恰好をつけようとしたけれども最終的に投げたパターンですね」

「うっさいわ、ほっとけ！」

「教えてほしいのですか？」

「ああ」

「だが断る。………と言いたいところですがいいでしょう。ジジイ

……いえ、神様より聞かれたらなるべく応えるようにと言われておりますので」

「神にも容赦ないお前すげえわ」

「どういたしまして」

ほめているわけでは無いんだけどな。

調子を狂わせられっぱなしの俺に対して、ミユは淡々と語りだした。

世界のことと、自分について。

## 10話：表情について

人間の感性からすれば、天使と悪魔が共存しているということはあり得ないという風に受け止められる。

相対してその二種族は仲が悪いのだと勝手な想像で盛り上がったている。確かに、実在していることを知らない人間がほとんどののだからそれは仕方のないことだろう。

ただ、天使と悪魔と言うのは、仲が悪いわけではないらしい。一部の天使と一部の悪魔がいがみ合っているだけで、特に垣根は存在しないらしい。ここで問題だったのは、一部の悪魔というのが悪魔の上位種だったということである。力で下位種を動かし、一時は天使の住む天界と悪魔の棲む地獄との大きな大戦となったのだそうだがそれを抑えたのが今の神様。あんな適当な感じなのに実は強かったという話だ。

のちに、大戦を巻き起こした一部の悪魔は封印されて、神様によって天界と地獄は統一。二種族の垣根を無くして天使と悪魔は共存することとなった。

そこで、主はあの神様となり今は平和に過ごしている。ということらしい。

ミユの話は要約すればこんな感じだった。

質問するたびに毒を投げかけられたりはしたが、それはまあいいだろう。

「と、まあこんな感じだと思います。お分かりになりましたか？」  
「大体分かった。たださ、人間界に修業に来るのはなんでなんだ？」  
「それはアタシが説明してやるぜ！」

意気揚々と椅子の上に立ち上がったスイはない胸をそらして高々と笑い声を上げた。



「『人の心を知り、今後の天使・悪魔としての生き方の糧となるようにする』！それがアタシ達に課せられた修行なんだぜ。だからとりあえずは学校へ行っておけて話だ」

「なんか、ありきたりと言うか内容の薄い修行だな。しかも終わりが見えなさそうだぞそれ、大丈夫か」

「何言ってるんだよ、そのためにお前がいるんじゃないか！　ってことで……これからよろしくお願いしますう……」

「いや、いきなり真面目になってどうするの！？　お前はマジでキヤラ作りが下手だな……」

「へっ！？　ああああ、悪魔が真面目なわけねーだろ！」

「もう滅茶苦茶だな」

「ちなみに、お馬鹿なスイが一度も脱線することなく、噛むことなく説明が出来たのはここに来る前に散々叩きこまれたからと説明しておきましょうか」

「みみみ、ミュちゃ〜ん。なんでそんなこというのぉ」

スイが泣き顔になってそんなことを言う。もはや悪魔失格だと思う。それにしても、やはり天使と悪魔は仲が悪いわけではないのか。

ミュとスイを見ていると分かるが、あいつらは仲がいい。あまり一対一で話しているところを見るわけではないが、部屋も一緒に文句は言わないし、こうやって絡んだりもしている。

俺の中で、やっぱり天使や悪魔に対する考え方が変わって来ている。これも、なんだか人間と同じことを言える気がした。見た目や偏見でものを言ってはならないというのはこういうことなのかもしれない。

「で、気が済みましたか？」

「あ、ああ……。よく分かったよ。でも、本当に学校へ行くだけでいいのか？」

「それしか今のところは言い渡されていません。あのジジイも明確に課題をくださればいいんですが」

「あ、もう取り繕うこともしないんだ……」

「何のことですか？」

「いや、いい」

やはりこいつは危ない。

人の心を疲弊させ、潰す力を持っている。これはこれは危険な力だ。

「そう言えばさ、お前たちってなんか特殊な力とかあんの？」

そう俺が聞いた瞬間、何故か食卓は凍りついた。

ミユは目を閉じ、スイはおろおろし始め、音が消えた。

「な、なんだよ……」

「陽助様、プライベートってご存知ですか？」

「そ、それは知ってるけど」

「ならば、そういうことにしておいてください。でなければ『しますよ？』」

「ひいっ！？」

なんか知らんけど脅されたぞ！？ 何がそんなに気に障ったんだ？ ま、まあこの話はやめておこう。

「なんですかその顔は、早くしまってください」

「顔はしまえるもんじゃねーよ！」

「大丈夫ですか？ 顔が赤くなってますよ？」

「いや、お前が変な突っ込みさせるからだろうが……」

「気持ち悪いところはありますか？ はっ……。すみません、全部でしたね……」

「え、ちょ、なんでお前はそんな暴言はいてくんの！？」

「違うよミユちゃん！ 陽助さんは……カッコイイよ！」

「え？」

「え？」

「あっ」

食卓が静まりかえった。

俺は口を開けたまま固まり、ミユは石造

のごとく微動だにせず、スイは目を白黒させていた。

「め、飯にしようか」

「そうしましょう」

「う、うん」

なんだか、ぎくしゃくし始めた。

と、そんなことも夕食を取り終わると忘れしまったのか、それともそれどころじゃないのか皆勉強に打ち込み始めた。普段なら一週間前から始めるとか一夜漬けにするとかテストの前はそんな感じだったのだが、こいつらが勉強をしていると、なんだかこちらも勉強しなければならぬ気がしてノートを開いていた。居間に三人、机に座ってカリカリと勉強中である。

だけれどもどうだろうか、ミユは背筋を伸ばしたまますっかり手を動かしているがスイは決まってうーとかあーとか泣き声を上げながら教科書とにらみ合いをしている。

俺は途中からだんだんと飽きてきて、目的は天使と悪魔の観察にシフトしてしまっていた。

チラリ、とミユのノートを見てみるととても綺麗にまとめられている参考書として販売してもいいんじゃないかと思えるくらいのものであった。

その視線に気付いたのか、ミユは顔を上げこちらを見て。

「何ですか、私の指を見ていたんですか？ 指ふえちでしたんですか？」

「なんでそうなるんだよっ！？ お前のノートを見てたんだよ。すっげえ綺麗にまとめてあるな……」

「天才ですからしかたないですね」

「謙遜とかしろよ……。まあいいか。ところでスイ、お前は大丈夫なのか」

スイの方へと視線を向けると、やはり机に突っ伏したままでうめき声をあげていた。

「大丈夫、……に見えるう？ 駄目だよお」

「だよな……」

どうやらスイは俺と同レベルの位置にいるらしい。 いや、もしかしたら俺より下かもしれないが。

しかし、これはやはりよくない。 当然のようにミュが頭がよく、俺とスイは罵倒されるレベルの馬鹿であるという展開は御免だった。だからと言って、勉強したところで俺の成績はたかが知れている。学生の本分は勉強である。

……… だからどうした、って話になるよな。

結果、諦めた。

次の日の朝、いつも通りに時間帯をずらしての登校。俺が学校について数分後、ミュとスイが登校してくるのである。

今日もどうやら登校途中に歌音と合流したらしい。機嫌のいい歌音が俺の前の席に座る。

「今日もご機嫌だな」

「そうだねー。お友達と一緒に楽しく会話しながら登校できたからだよつ。 だんだん仲良しになっていくっていいことだね！ 朝浦君もそう思うよねっ！」

「ああ、そうだな」

昨日よりも若干テンションの高い歌音だった。

そこでふと廊下に目をやると、この間の女子生徒がこちらを見ていた。

少しウェーブのかかった髪に強気な目、出会うと不思議な感覚に見舞われる少女。

「朝浦君？ どうしたの、ぼーっとして」

ハッ、と我に返ると歌音が自分の椅子の背もたれに前向きで寄りかかり、こちらを見ていた。

歌音ならあの子が誰なのか知っているかもしれないと、訊いてみることにした。

「なあ、歌音。 あの廊下に居る子んだけどさ、誰か知ってる？」  
「廊下に居る子？」

歌音が廊下を見据える。しかし、先ほどの彼女はもうすでにそこにはいなかった。

「誰もいないよ？」

「あ、あれ？ さっきまで廊下に居たのに……」

この間もそうだった。神出鬼没……とはまた違うのだろうが、いつの間にか現れては次の瞬間には消えているのだ。もちろん、追ったわけではないので、ただここから見えない位置に移動しただけなのかもしれないが、天使と悪魔が俺の家に居るわけだから、無駄に敏感になってしまっている。

「どんな子だったの？」

歌音が訪ねてくる。

「えっと、こう……ウェーブのかかった髪をしていてさ

一通り彼女の容姿や特徴、雰囲気伝えた。しかし歌音は頭を傾げて、

「うーん、ごめんね。私は知らないや。 今日の部活の時にでも他のクラスの子に聞いておくよ。 ………で、朝浦君。 どうしたのかな、その子が気になるのかな？」

「そうだな………って！ 別にそういう意味の気になるとかじゃないくてだな！」

「きやーっ。 ついに朝浦君も女の子に興味を持ち始めたのかなっ！？」

「なんかその言い方は語弊を招くから止めろっ」

そんなとき、遠くで声が聞こえた。

「……朝浦様は男にしか興味が無かった時期があつた、と」

「おい、てめつ、ミュ！ 変なことを言うな！」

俺がそういった瞬間、クラスの女子軍から反撃を受ける。

「朝浦君！ そんな怖い顔でミュちゃんに怒らないでよ！ 驚いているでしょ？」

どう見たって無表情そのものですけど！？

「朝浦君！ また暴言吐いてるの？ 暴力は顔だけにしてよね！」  
え、何これ、ミュの毒舌が伝染でもしてんのか！？

「朝浦君！ まだミュちゃんに『様』付けで呼ばせてるの？ いい加減止めようよ！」

いや違うそれはあいつが勝手に……。

「ちょ、ちよつとみんな、落ち着こうよ。朝浦君はミュちゃんに怒っているわけじゃないんだよ。顔だつて怖いけどこれがデフォルトなの！ 様付けは、ミュちゃんが面白いからって。……顔が怖いからって人のすることを全部悪い方向にもって行っちゃだめだよ、顔が悪いからって！」

「歌音、それフォローじゃないし……」

「あわわ……。朝浦君がしぼんでいく……。！？」

朝から精神的ダメージで俺の体力はゴリゴリと削られていった。

目から一滴のしずくが落ちたのは内緒である。



## 11話：対策と傾向、油断

今日は珍しく俺、歌音、ミユ、スイの四人で帰路についていた。夕焼け色に染まる住宅街はいつもとは違った一面を見せ、風景画として成り立つほどの神秘さを兼ね備えていた。

そこに仲良く並んで歩く四人の姿。

歌音は四人そろって帰るのがそんなにもうれしいのかご機嫌で、ミユは俺の踵を踏むという地味な悪戯を実行中、スイは腹が減ったと目を棒線のようにして空を仰いでいた。

そんな何気ない下校途中に、不審な影が物陰から現れた。

いや、現れたという表現はこの際どうなのだろうか。何もなかった空間から突如現れた、そう思わせるほどに奇怪な登場だった。

「ねえ、君たち。んゝ、正確に言うとその黒髪ロングの少女が目当てかな？」

並んで歩く俺達の前に男が立ちはだかったのだった。

その男はスイの特徴を挙げ、にやにやと気味の悪い笑みを浮かべていた。

黒いコートに身を包み、サングラスを着用。髪は黒のオールバックで、乱れは見当たらなかった。

年齢は俺達より確実に年上。ただ、青年ともいえるが、雰囲気があるで違う。

良くないオーラというか、雰囲気というかそんなものがヒシヒシと伝わってくる。

「な、なんだよ。アタシになんか用なのか!？」

指差されたスイも驚いた様子だった。ただのナンパにしては手口が少々雑な気がする。

「もしかしてロリコンの方ですか？ 良かったですね、朝浦さん。仲間が増えましたよ？」

「俺はロリコンじゃねえわ！」



「ちょ、ちよつと朝浦君、あの人なんかおかしいよ」

いつも通りのミュとスイに対して歌音は少し怯えていた。俺だってそうだった。

こんなわけのわからないことに巻き込まれるなんてことは小学校の時代以来だったからだ。

まあ、その時は目つきがどうこうとかで上級生に絡まれただけだったが。

「とりあえずさあ、後の人はいらないからさ、どこか行ってくれない？」

「お前、意味分かんないこと言ってるなよ。俺たちは今から帰るとこだ。邪魔すんな」

小学校の時に切り抜けた技術。自分の欠点を最大限に生かした脅し。とりあえずは乱暴な言葉遣いでそして目つきで相手を退かせるものなのだが。

「人のソレじゃあ何とも感じないよ。もっとう、暴力的にね？まあ、言っても分かんないか」

その時、ミュの顔つきが少し変わったのが俺には分かった。

それと同時にミュは俺に指示を飛ばした。

「朝浦さん。歌音さんを連れてとりあえずは離れてください。何も質問せずに速やかに言うことを聞かないと爪を全部剥ぎます」

そんな切羽詰まったミュの言葉に対し、男が放った言葉は別の回答だった。

「いやいや、ここでは何もする気はないよ？一般人の目があるからね。いざとなれば勝手にそっちが記憶操作してくれるとは思うけど……面倒だしね。その内また会いにくるよ。スイィティシフォネ」その後男はスイのことをもう一度指差し、そのまま背を向けて行ってしまった。

俺には突発的すぎて、何が起こったのかが理解できなかった。

それから家に帰るまで暗い雰囲気が出た。四人を取り囲み、歌音は頑張って盛り上げようとしてくれたのだが、スイはずっと俯いていて、ミユはどこか遠くを眺めていて全くと言っていいほど効果が無かった。途中で歌音とは別れ、俺たちは帰路についていたがそこでミユが突然口を開いた。

「先ほどのあの男、人間ではありませんね」

それは俺に放った言葉ではなく、スイに対してのものだった。

「そう……だね。あの人は……違うね」

スイの返事はいつものようなハキハキとした活発さが無かった。

テンションもいつもより三段階ほどダウンしているし、一体何事だったのだろうか。

俺には何が起きているのかよくわからないので、あまり口を挟まないようにしているのだが、すごく気になる。

「あの人は、私とおんなじ悪魔だよ。階級は私より上、大きな力が感じられたもん」

ぼそ、ぼそ、と言葉を吐き出していくスイ。ミユはそれを黙って聞いていた。

「スイ……ティシフォネっていうのは、私の真名。えっと、真名っていうのは本当の名前って意味だよ」

「ティシフォネ……なるほど。そういうことでしたか。では、狙いがあなたと言うことは」

「そう、あの大战で負けた悪魔族の意思を継いだ人だと思う……」話が転々としている中、俺の頭の中はごちゃごちゃになっていた。仕方なく今日の夕飯を何にしようかなどと考えていると、ミユがこちらを振り返ってきた。

「何を現実逃避しようとしているのですか、生ゴ……陽助様。あなたにとっても無関係な話ではありませんよ？」

「もう注意しても治らんだろうな……って待て、なんで俺にも関係あるんだよ!？」

「それはそうでしょう? あなたは私たちを神様から任された存在

なんですよ？ どうして無関係なのですか？ そのところを詳しく説明できるのならお願いします。まあ、朝浦様程度の知能では小学生相手にも論破できるかどうか怪しいところですけどね、ふっ」「こいつ笑いやがったよ！ 無表情で人を小馬鹿にして笑いやがったよ！」

「ちょ、ちよつとお……二人とも喧嘩は駄目だよ……うっ」  
キャラを作ることすら忘れて俺たちをなだめるスイ。これは重傷だと悟らざるを得なかった。

ミユは無表情でスイの横顔をただ眺めていた。

「と、とりあえず、家に帰って作戦会議だ！ よし、帰るぞ。走って帰るぞ！」

言われてしまつては仕方がない。それに、スイの困ったような顔をいつまでも見ていたくはなかった。

俺が走りだすと、続いてミユがついてきた。

「あわわっ。ま、待ってよう！」

スイも混乱はしていたが、一応ついてきてくれた。このままマンシヨンのエントランスまで走り抜こう。

嫌なことを今は忘れてさっぱり出来るように。

何か大切なことを考えるときは、一度頭を空っぽにした方がいいのだ。

だから、家に帰って落ち付いてからもう一度考え直そう。これからの対策を。

正直何が起こっているのかミユとスイが何について話していたのかは分からない。

でも、俺にだってできることはあるはずだった。

何かと問われても答えることはできないけど、何かがあるはずだった。

だって俺は、神に天使と悪魔の世話を任されたんだらう？

「陽助様はいつも頭が空っぽですけどね」

「人の心の中を読むな！？」

夕飯が終わり、皆が机に再びついたところを見計らって俺から本題を切り出した。

「えっと、今、何が起きてんのか詳しく教えてくれないか？」

ミュに言うとか何か言われそうなので、スイの方を見てそう訊いてみた。

「……多分。多分だけど、あの人は私のことを狙ってる。地獄に連れて帰って何かしらの行動を起こすと思う……」

「狙ってる？ スイってそんなにすごい奴だったのか？」

地獄の、しかもスイより階級が高いらしい悪魔がスイのことを重宝しているかのような口ぶりに俺は驚いた。

しかし、スイは。

「ううん。私はすごくないよ」

「……？ どういう意味だ？」

「……」

そこでスイは黙ってしまった。

リビングには沈黙が訪れる。ミュも全く口をはさんでこなかったし、これはいよいよ切羽詰まってきたのかもしれない。

「さて、今日のお風呂当番は誰でしたでしょうか？」

幾つか時が流れた後、ミュが突然そんな事を言い出した。

「ちよつ、おまつ、……空気読めよ」

「空気を読むのはKY陽助様の方です。今ここで何を考えようと事態は変わりません。分かったことをまとめて理解しておく、それで十分です。後は普段通りに過ごしましょう、それが一番だとは思いませんか？」

確かに、ミュの言うとおりかもしれない。

今ここで不安な気持ちを増大させようと、何が起るかは分からないし、現状は変わらない。ならばいっそ逆に受け止めてしまえばい

いのだ。

何が起きるかもしれないのか、という予想を立てていればいい。それこそ不測の事態に備えて。

「それに、いざとなったら陽助様がいます。……………超

頼りないですけどね」

「何だそれは!？」

「冗談です。スイ、心配しなくても私たちがいます。何が起ころうと、心配はいりませんよ」

「ミュちゃん……………陽助さん……………」

スイは少し安心したのか、目を潤ませて俺たちのことを見上げていた。

なんだかんだで俺が出来ることはなさそうだが、がんばってみよう。

「それにしてもミュ。お前も気のきいたことが言えるんだな」

「何を言っているのですか？ 私はいつも心配りしていますが、陽助様以外限定で」

「何故俺は差別されているっ!？」

「差別ではありません、区別です。……………というのも決まり文句になつてきたのであえて言いましょう、差別です」

「だからなんでだっ!？」

「ふふふっ、あはははははっ……………」

気が付くと、スイが先ほどまでの辛気臭い顔とは一転して、笑っていた。

やはり、いつも通りである方がいいのか。

流石ミュだな。きつとこの芝居もスイのことを気遣って……………。

「私は嘘など吐きませんので」

どうゆうことなの……………。



## 12話：残像視界

何事もなく次の日を迎えられた。

昨日のミュが言っていたように、そんなに心配することなかったのかもしれない。

カーテンの隙間から刺す朝日によって半強制的に目を覚まされる。ふと気がつくと、いつものミュの暴力&毒舌の目覚まし時計が作動していなかった。

時間は6時半、いつもならこの時間帯まで寝ていると鳩尾に肘を入れられるのだが……それが無い。

何か物足りないような感覚を頭から追い出し、リビングに向かう。そこには誰もいなかった。

寝ぼけ眼を擦ってみても視界が一転することはない、誰もいないのだ。

ミュも、スイも。いつもは流れているはずニュースも入っていない。テレビの電源がついていないからだ。ミュは人間界のことを知るところが出来るとニュースは毎日欠かさず見ている。スイは占いのコーナ―を朝の楽しみにしていてもテレビの前に陣取っているはずなのに、居ない。

「おい、……嘘だろ？」

慌ててミュとスイの部屋の前まで行く。ドアを叩く。

「寝てんのか、おい。朝だぞ！ ……いないのか？ 本当に居ないのか？」

ドアノブに手を触れる。開けて本当に居なかったら、そう思うと不安で仕方がない。

昨日出会った不審な男の台詞から読み取れる意味。スイが言った、私を狙っているという言葉。

もし、このドアを開けるとミュとスイがいて、実は俺はまたミュに騙されていて。

意地悪くミュが毒を吐いてくれるならそれはそれでいい。スイが涙目になりながら俺を変態と呼ぶのならそれでもいい。

この嫌な予感を早く振り払いたかった。

勢いよくドアを開けると、そこには綺麗に折りたたまれた布団。それと、ミュが立ちつくしていた。

不安の中に安堵が甦るが、それも束の間だった。何か様子がおかしい。

羽根が、黒い色をした羽根が部屋に散乱している。的確に場所を言々と、寝る際にスイの布団が敷かれているその場所を中心として円を描いて、だ。

「ミュ。何だ、居たのか……。スイは？」

何かごちゃごちゃした気持ちを押えこむようにしてようやく声を出せた。

必要最小限のことしか話せない。これ以上声を出そうとすると、叫び声が溢れそうだったから。

「やられました……。おそらく、昨日の夜でしょう……。空間転移によつてスイが連れ去られました。この羽根は抵抗した際に抜け落ちたものだ」と

ミュは普段より少し低いトーンでそう言った。

いや、実際はいつもと声は変わっていないのかもしれないが、俺にはそう聞こえた。

「連れ去られた……。？　もしかして昨日帰り道の男に！？」

「……ええ。しかし場所は割れています。先ほど感知しました、今から私はそこへ行ってきます」

そう言つてミュは神秘的に光る二枚の羽を広げた。白い天使の羽である。

見るのは二度目だが、明らかに最初に見た時より輝いているように見える。

「待ってくれ、俺も行く」

恐怖心を押えてそう言う。



「何を言っているんですか」

そこにミュの冷たい言葉が返ってくる。

「人間が悪魔に対して何が出来るのですか、昨日もそうだったでしょう。ここは私が行きますから陽助様は普段通り学校へ行ってください」

そんな言葉に、俺は恐怖を忘れて少しの怒りをおぼえた。

「何言ってるんだよ！ そんな俺だけが無関係って顔して普段通り過ごしてられっかよ！」

「そうじゃないんです。何も出来ないからついてくるな、と言っているんです。それに、これも修行の一環と考えれば大したことはありません」

そう言ってミュは窓のさんに足をかける。

どうしても俺を連れていく気は無いらしい。しかし、俺は納得できなかった。

理解はできる。俺はただの人間だから、悪魔に対して何もできることはない。

納得はできない。ただの人間だから、この問題は気にせずに普段通りでいると。

神様から直々に言い渡されたこの『二人をあずかれ』という命令。

その意味はどこまで解釈できて、広がっていくかは分からない。

だけでも、俺はその意味を出来るだけ拡大解釈していきたい。

言うなれば、プライド。

一般人が何を、とそう言われるかもしれない。でも、俺は。

神からの命令のそれを、『二人を見守ってくれ』と、そう捉えたい。おこがましいかもしれないが、俺はそう思った。

ミュやスイは、普段はただの女の子なんだ。学校に通って、勉強して、友達といて、笑って、そうして暮らしている人間と変わらない表情を見せる女の子たちなんだ。

それを男の俺が放っておけるのだろうか。

天使とか悪魔とか人間とかは関係が無い。全てをひっくるめて、俺

は言っ。

「待て、ミユ。確かに俺は何も出来ないけどさ、見守るってことはできるだろ」

ミユがこちらを振り返る。

何を言いたいのですか？　とそう問うように。

「神から直々に受け取った命令だぜ？　破れないだろ、そんなもん破ったら天罰が下るんじゃないのか。そんなの俺は嫌だね。だから、俺の身のためを思って言って。連れて行け」

それから少しの沈黙が訪れる。

ミユは考えているようだった。こうしているうちにもスイに危険が迫っているのかもしれないのだが、ミユは考えてくれている。結局、ここでも弱さというものは露呈されてきている。

しかし、退くわけにはいかなかった。

やがてミユはふうっ、と小さく息を吐いて肩をすくめて見せた。

「ウジ虫のくせに何をそんなに格好つけているのやら、恥ずかしすぎてこちらが真っ赤になりそうです」

「なっ、お前っ……！」

「分かりました、一緒に行きましょう。ただし、絶対に邪魔になるので後ろの方にいてください。前に出てきたら私が蹴り飛ばします」  
「お、おうっ！」

毒舌も気にならないまま、俺はそう返事をしていた。

「やはり、君はすごいよ。もったいない。どうしてそんなところにいるんだい？　地獄に戻る気はないのか？」

昨日と違い、サングラスを付けていないコートの男は、スイに向かってそう言い放った。

存在から感じられる力の量はすさまじく、スイでは敵わないことは

明白だった。

それなのに男はすばらしいという。スイにその意味は正確に伝わっていた。だからこそ彼女は拒む。

「い、嫌だねっ。 お前なんか知るか！」

「はっはっは……、どうしてそう強情になるのかな。 ティシフォネ」  
「その名前で呼ぶなっ！」

ブアッ、とスイの手から出現した黒い粒子が男に向かって飛ぶ。それを男は片手で粉碎する。

圧倒的力の差。しかし、男はスイを傷つけることはしない。

「もつと見せてくれないか。 君だって解放したいはずだ、久々に楽になるのもいいかもしれないぞ？」

「そんなこと……」

「ない、と言い切れるのか？ 本当に？」

「……………」

「ほら、素直になるといい。 俺はここで黙って見ているから」  
暗いこの場所では人気も少ない。ただ、それだけではスイの心配事は拭えない。

なんとしてでもここからは逃げ出さなければならない。

辺りを見回すが、逃げられるとしたら空。天井に大きな穴が空いていてそこからしか出入りできないようになっていいる。周りの様子から察するに、ここはどこかの廃虚だろう。

空間転移によってどのくらい飛ばされたのかはわからない。ただ、そんなに遠くまで運ぶほど男は力を使っていないようにも見える。

「う、う、だめ。 駄目だよ……………」

男は黙ってスイを見つめるだけだった。

何も気をそらせるようなものはない。攻撃も男には通じない。

どうすれば、とそう考えていた時、周りを囲んでいた壁の一部が吹き飛び光が差し込んだ。

そこにはミュと陽助の姿があった。

「ええ……………ミュ、お前……………」

「何か問題がありましたでしょうか？」

そんな軽い言葉を交わし合いながら、この廃虚内に入ってくる。しかし、男はそれを許さなかった。

「思っていたより早かったね。ただ、ここには入ってこないでほしい」

黒い球体を生み出し、それをミュと陽助に向かって放出する。

暗黒の電流をまとったそれは、地面に着弾すると、四散して大きな爆発を起こした。

「ミュちゃん！ 陽助さんっ！」

煙で何も見えなくなる中、男の声だけが聞こえてくる。

「姿形も無くなるくらいに粉々になったな。あの天使も人間がいては相殺することは出来ないだろう。さて、スイィティシフォネ。これで君はどう感じるかな」

消された、ミュと陽助が。

死んでしまった。新しく出来た温かい家族が、日常が。

煙が晴れてその姿が鮮明に映る。そこには大きな縦穴と天使の羽根が数枚落ちていた。

それを目の当たりにしたスイィの中で何かが切れたような音がした。回線が切り替わる音、ブレーカーが全て落ちて、視界が暗くなる。もう何も考えることはできない。もう何も感じる事が出来ない。

もう、壊すことしかできない。

男はスイィが切り替わったのがしつかりと分かった。

感じられる力の量が先ほどのちっぽけなものに比べて爆発的に増大したのが分かった。

知らず知らずのうちに笑いが漏れ、汗を流していた。

要するに男は興奮していた。このすばらしく大きな力に対して。

それが自分のものになると考えただけで震えが止まらない。恐怖の震えではなく幸福の震え。

馬鹿になりそうなほどの力、このイカレた感じがたまらなかった。

「ふはははははは！ 何てことだ、こんなにも予想を上回るとは！」

男は熱でも出たかのように身体が熱くなっていくのを感じていた。

「強大だ、最強だ、最悪だ！ 何とも言い難いこの力、これさえあれば天界なんぞ捻り潰せる。そんなことよりも私が神になることも可能だ！」

それにしても先ほどからスイは動こうとしない。

少し不思議に思い、じっと目を凝らして見てみる。

ブレていた。スイの実像がブレて見えていた。おそらく、力の大きさが男の視界にも作用しているのだろう。

それにしても汗が止まらない、と男は首の辺りや額を拭う。

額の汗を拭った瞬間、おかしいほどの汗が顔を覆った。

「何だ、俺はこんなにも……？」

違う。

何か違和感を感じた。

額を拭った瞬間に、汗の量が以上に増えた。これは何を指しているか。

汗を拭った手を見える。

無い。

手首から上が紛失していた。

「なん、だ、これはあああああつ！」

先ほどから出ていたのは汗ではなかった。血だ。血があふれていたのだ。

反対の手で首元を触る。

一部分が抉りとられていた。

「はっ、ははははっ」

熱は痛み。汗は血。

力の大きさに驚嘆しているうちにとんでもないことが自分の身に起こっていた。

だとすると、先ほど見たブレるスイの姿は、残像。

「俺は、何てモノを……。こんなものはっ……」

次の瞬間には左腕が無くなっていた。

「ははっ、はははははははっ！ 流石、流石だよスイィティシフォネ

！ 君は素晴らしい！ ぜひ地獄に招待しよう、私たちの仲間が待っている、さあ！」

後ろに狂気を感じた。

それは最早一個体から発生させられるはずのない異様な、異質な存在だった。

男は声を出すことが出来ない。

「力、エッ………セッ」

呪いを紡いで発したような声で言葉は飛ぶ。

最後に男の瞳に映ったのは血まみれになった少女。

まぎれもなくそれは悪魔だった。



### 13話：家族（前書き）

すこし遅れてしまいました。 すいません！



### 13話：家族

瞬間、だった。

いや刹那と言うべきだろうか、俺は空にいた。比喻でもなんでもなく、本当に空にいた。

「いきなり失礼な方ですね、粉々になるところでした」

いつも通りの無表情でミュは言う。彼女は今、俺のシャツの首もとを掴んでいた。

「ぐ、苦しい……。ミュ…俺死ぬ」

「またまたご冗談を、陽助様がそんなことで死ぬはずがないでしょう？」

「無理無理っ！息がっ……」

「では、手を離しましょうか？窒息死なら身体は綺麗に残りますが、転落死は……悲惨ですよ？」

どっちにしても殺されるのか……っ

というか、今はこんなことをしている場合ではないのではないだろうか。

スイが大変な目に合っているはずなのだ。

そんな俺の考えを察してか、ミュはいつもより平淡な声で呟いた。

「心配するべきは……私たちがスイに巻き込まれないか、と言うことだと私は考えます。陽助様、見ておいた方が良いと思います。あれが、スイの抱えているものです」

ミュのそんな言葉の後に、断末魔と呼ばれる叫び声が廃墟内にこだましたのが分かった。

それは、スイのものではなく先ほど俺たちに向かって攻撃を放った男のものだった。

空気を裂くような音、おそらく俺は生まれて初めてそんな音を聞いたであろう。

一人の少女が血溜まりの中に座り込んでいるのが見えた。スイだ。

彼女は肩を震わせ、散ったミュの羽根に目が引き付けられている。

「降りましょうか」

ミュはただそう言って、俺のシャツの首もとを掴んだまま下降を始めた。

地面まで残り何メートルというところでスイがこちらに気付き、少し顔を輝かせる。しかし、すぐにその笑顔は失われていって、どこか苦しそうな顔になっていった。

何が言いたくて、何を言いたくないのか。今の心の中はどうなっているのか、その複雑な気持ちは俺には理解できるとは思わなかった。想像することは簡単だ。だが、本質までは見えはしない。それにもしかしたらスイ自身、自分がどう思っているのかが分かっているような気もしたからだ。

無事に着陸し、ミュも俺の横に立つ。

スイは顔を伏せたまま拳を握りしめている。肩を震わせている。

「えーと、何だ。その……………うん…」

何を言っているのか、分からなかった。

「わ、私は……………、こんな、こんな……………」

嗚咽を漏らしながらスイは呟く。自分の力に対しての、言葉を。

「私は、こんな化物です……………。自分で制御できないほどの力を持て余した、弱い悪魔です……………」

つつつ、と一筋の光がスイの瞳から零れる。彼女はそれを拭うが、手に残るのはただの赤だった。

それを見てまた彼女は続ける。

「私が人間界に来たのは、…………精神の強さ、心の強さを高めるためでした…………。だから、強く在ろうとしました。一般の悪魔のようになろうとしました。でも、でも、駄目でした。自分の力は抑えきれなくて。頭に血が上ると、もう何も考えられなくなって…………。さっきだってそうです。ミュが、あの程度の攻撃を避けられないわけないのに、なのに、私は、勝手に……………」

ぴちゃ、ぴちゃ、と赤が跳ねる。

彼女の綺麗な黒髪は返ったモノを受け、酷く固まっていた。

「暴走、してしまっただんです……。私は自分の力さえも扱うことが出来ないんです。そんな、欠陥品なんです」

「……。帰って風呂入らないと、髪酷いことになってんぞ」

「帰れません……。人間界に来たばかりなのに。こんな、ことして……」

「今日の風呂掃除当番は、変わってやるからさ……」

「駄目です。こんな、危険な欠陥悪魔……。そばに居たら駄目です」

「時間帯的に学校は遅刻だな、朝飯も食ってねえし」

「学校になんて行けません……。無理なんですよ。やっぱり私なんかが、修行したって無理なんですよ」

「うるせえよ」

「え……？」

スイの話聞いていて、彼女は何を考えていたのか。そんなことが少しずつ読みとれてきた。

だから俺は、かける言葉を見つけれられた。かなり、強引なものだが。

「お前は何を言っただ。修行なんていつしたよ、お前のあのキアラづくりがそうだって言うんなら全くの問題外だよ」

「そういうことじゃ、無いんですよ。陽助さんは怖くないんですか？ 簡単に人を、悪魔を殺すことのできる力が近くにあるんですよ？ しかもそれは制御が効かなくて、危険なんですよ！？」

「怖くないね、誰がスイなんかを怖がんだよ。それにさ、今まで一緒に暮らしてきて……。つってもまだ一カ月も立ってないけどさ、危険なことなんてあったか？ そんなに危険だったか？ お前はビクビクしながら暮らしてたのか？」

「そ、それは……違うけど……」

「じゃあ、問題無いだろ。それに俺はまあ、矛盾しちまうけどさ。怖くないわけではないよ、でもスイを信じてるから」

「え……？」

そこでやっとスイは、こちらに顔を向けてくれた。

頭からペンキを被ったかのように赤色に塗れた彼女は小動物のように身体を震わせていた。

「スイは本当は強い子なんだろう、そんなことぐらい分かる。克服しようとなぜわざわざ人間界に来たんだろう。あきらめずに、だ。そんなスイは絶対弱くないと俺は思うんだよ。力とかそういうことじゃなくてな」

「でもっ……私は……」

「でもじゃ」

「でもじゃないですね。まったく長々と説教（笑）を垂れ流す陽助様のせいで遅刻は確定ですね」

「ちょ、おい。このタイミングで何を……」

「とりあえず黙っていてください」

いきなり話に割って入ってきたミュは、当たり前のように俺に毒を浴びせつつスイに近寄っていく。

「陽助様も言っていたように、私も信じています。それにいざというときは私も力を使います。それでどうにかなるわけでもありませんが、なんとか抵抗します。その間にあなたは自分で力を抑えてくれればいいんですよ。そう、信じているからこそその作戦です」

ミュが今までにない優しさで、そう、まるで天使のような包容力のある声色でスイを諭す。

そして彼女に触れ、汚れることもかまわずに抱きしめる。

「私たちは『家族』というものらしいですよ。一緒の家に住んで、助けあつていく集団のことを指すそうです。明確にはそうでないかもしれませんが、そんなことはいいんです。私たちは家族。だから、迷惑かけたっていいんです」

「う、う………ミュちゃああああん！」

ついにスイが決壊した。ミュに抱きつき、大声で泣く。泣く。

ミュはそれをいつもの無表情に一般人には見分けのつかないだろう少しの笑みを混ぜて受け止めていた。

そして俺はと言うと、美味しいところを持って行かれたと言うこと

に今気付くのであった。

「天界に連絡を入れておきました。この場は何とかしてくれるでしょう、私たちは一度自宅に戻りましょう」

一通りスイが泣きおわった後、ミュが唐突にそう言った。

心なしかいつもより表情が固く、それでいてどこか焦っているようにも感じられた。

が、それも一瞬のことで瞬きをするとミュはいつもの表情に戻っていた。

普段から無表情なミュの顔は些細な変化を見出すことがとても難しい。だから俺は何かの勘違いだと思うことにした。

スイのことが片付いて、余計なことを考えなくなかったからかもしれない。

「そうか、じゃあ戻るか。………と言いたいところだけど、スイはどう？ すんだその格好」

スイはペンキを頭から被ったかのように全身が赤塗れである。それに先ほどまでは気にしていたがいなかったが、臭いが酷い。かろうじて吐き気をとどめている現状だ。

「うつつぶ……。なんか体調がおかしくなってきた」

「そうですね。この状態だと不審に思われますよね。では」

そういうとミュは手をスイに向かってかざした。するとスイを中心に円が描かれ、円筒状に光の柱が出現する。その光に？ まれたスイは慌てふためいている。

「ふえええっ！ 何なんですかこれ！？」

「じつとしていてください。余計なモノを落としている最中です」

光が完全に消えたころ、その中心には綺麗さっぱりと赤を落としたスイがとんび座りで目を瞬またたいていた。

「す、すごいです！ 洗濯機みたいです！」

「その表現はどうかと思いますが……。まあこれで帰れますね。さ、私たちは素早く帰りましょう」

そのミユの物言いに俺は何故か悪寒が走った。そして徐々に嫌な予感と言うものが膨れ上がってくる。

私たち、は？

「では、陽助様。地を這ってお帰り下さい。今日中にたどり着ければいいですね」

「え、おい？ ミユ、何を言っているんだ？」

ミユは羽を広げ、スイの手を掴んで上昇する。

え、あれ、これって……。

「おいおい、冗談キツイぜ……。うそでしょ？」

「（ニヤリ）」

「ちよちよ、おかしいって。何の装備もなしで山下れるかあつ！」

男がスイを転移魔法とやらで飛ばしたのは山の中の廃虚だった。それゆえに自宅からこっちに来る時にはミユに運んでもらったのだ。

もちろん、コンクリートの道なんて存在していない。道なき道という表現がぴったりとそのまま当てはまるかのような山道が目の前には広がっている。

俺の絶望を知ってか知らずか、ミユの姿はだんだんと小さくなっていく。

「え、ええー……………」

冗談ではないらしい。

「み、ミユちゃん。陽助さんかわいそうだよ……………」

「いえ、いいんです。ここに来るときに足手まといにはならないようにと言っておきましたから」

「でもそれって、ここに来るまでの話じゃないの？……………、ミユち

やん。なんか怒ってる？」

「いいえ。別に」

ミユの一言は風に流され消えていった。

#### 14話：勉学に励む（前書き）

こんな時間に投稿してすみません！  
ギリギリ三日以内です。はい。



## 14話：勉学に励む

スイの一件が収まった後、また新たな問題が発覚した。

いや、別に命にかかわるような事件だとか天使やら悪魔やらが関わっているわけではない。

一言で言うなら、学生には定期的に訪れる事件。いや、事件と言うよりかは壁。

まあ、定期テストのことなんだけどな。

この間の一日、結局学校はサボることとなった。それが響いたのか、テスト前の追いこみ押し込み授業が受けられずに有力な情報（出題傾向）が得られなかったのだ。

その日に限って歌音も休んでいたらしく、友達の居ない俺には頼れる相手がいなかったのだ。

しかし、歌音がこれではいけない！ と知り合い関係を当たり、勉強会を開いてくれることになったのだ。

で、今は学校の図書室絶賛勉強中……なのだが。

「え、ええ。虚数って何？」

「そう言えば天使の中には虚数を応用して術を使う者もいたと聞いたことがあります」

「何なに？ 天使ってなんの話かな？ ミユちゃん」

「お前らちよつと黙ってるよ……。後、余計なことは……」

「ちよ、ちよつと！ 図書室では静かにしなさいよ！」

スイ、ミユ、歌音、俺、芹川の5人が図書室の一つの机を占領し勉強会（？）を開いていた。

歌音は友達関係からノートのコピーなどを持ち寄ってくれた。芹川は違うクラスだがテストは全クラス共通なので、問題はない。

だがしかし、この状況はどうだろうか。

レベルの高い女子4人の中に一人男の俺。周りからはヒソヒソと陰口が聞こえてくる。

はーれむ状態だわー、とか朝浦王国が形成されているわー、とかそんな感じの。

一部の男子勢からは刺さるような視線が。怖がられるよりいい、と考える俺はおかしいのだろうか。

「うーん……もうアタシは寝る！」

「寝ると朝浦様のようになってますよ？」

「それはどういう意味だよ……」

「あつ、結穂ちゃん。ここ教えてー」

「えつとそこはね。ここの」

真面目に勉強しているのは仲良し二人組。不真面目なのは天使と悪魔の二人組。

これ、勉強になっているのか？

勉強会は絶対に捗らない、とどこかで聞いたことがあるのだがその通りなのかもしれない。

情報の交換はそれなりに良かったとは思うのだが……。やはり集中できるのは最初の一時間ほどだけだな。

「なあ、そろそろ休憩しないか？　なんかスイは寝始めたし、ミユ

は……ノートすら開いてないし」

「私は大体理解できましたので」

「そうだねー。疲れてきたね、というかもうすぐ図書室閉まっちゃう時間だよ」

今学校はテスト期間中なので、生徒たちを解散させようと学校の色々な場所がいつもより早めに戸締りを始めてしまうのだ。もちろん部活は期間中活動停止である。

時計はもうすぐ5時を指そうとしている。

「うーん、なんかもったいたくないよね。折角部活ないんだからみんなと放課後こんな風に雑談とかしたいよねー」

「美里、これ一応名目は勉強会だから。雑談じゃないから」

「まあ歌音の言いたいことも分かるが……」

「どこか場所を変える？　……そうだ、朝浦くんち行こうよ！　—

人暮らしだったよね？」

ぴきーん、と俺は嫌な予感とともに凍りついてしまった。

「いや、あの、それは、ちょっと、」

「えー、なんでなんで？ あつ、まさか片付いてないとか？ 男の子の一人暮らしだもんねー。大丈夫だよ！ 私が掃除してあげるから！」

「そ、そうだ！ わ、私も手伝うからなっ！」

何故か芹川まで乗ってきた。そしてどうしてそんなにも推してくるのか……。

「いやいや、このノリはよくない。よくないぞ！ ちょっとしたところから俺が同棲（泣）をしていることがバレてしまう。

助けを求める形でミュを見る。彼女はぐっと親指を立てて見せて。

「それはナイスアイデアですね」

「おかしいだろおおおおおがつ！」

俺は咆哮した。

「なっ、どうしたの朝浦君！ そんなに嫌ならいいんだけど……。そんな叫ぶほど嫌だった？」

歌音が潤んだ瞳で見つめてくる。わけが分からないよ。

ミュは何を考えているんだ……っ。俺を過労死させる気かっ……。

「いや、あの……」

「な、何だっ朝浦陽助！ 何か隠しているのかっ。人を家に入れたくない理由が……はっ！」

何が『はっ！』なんだ。

というかどうにかしてくれ。この中で俺の味方はいない……わけじゃない！

「スイ、スイ！ 起きろ。勉強会の場所を移そうと思うんだがど

こがいい！？」

「ん……うう？ おうち……」

うわああああああ！

「え、おうち？ スイちゃんはもう帰っちゃうの？」

「んう？ だつて、おうち行くんでしょ？」

「え？」

「そうかそうか！ 分かった分かった！ 俺の家に行こうとりあえず黙ろうかスイ！」

駄目だ、これ以上スイを覚醒させてはいけない。そして無表情で笑うなミユ！

どうしてこうなった。

「おっじゃまつしまーす！」

「お、お邪魔します……」

「……………」

連れてきてしまった。もうここまできたら隠し通すしかない。ミユが余計なことをしなければいいが……。

スイは帰り道の途中で意識が戻り、自分のしたことに顔を青くしていた。どうやらスイは協力してくれるらしい。

まずは確認。何かボロが出るものはないか。よし、玄関にはない。次はリビング。

そろそろと後ろについてくる歌音と芹川。何が珍しいのかきよろきよるとあたりを見回している。

リビング。何か危ないものはあああああつ！？

リビングの、テレビの、前の、カーペットの、上。なんで靴下があるんだよおおお！

二 ソックスって言うのかあれ？ 知らんけどとりあえず回収っ！ シュバババババ、とおそらく超高速で靴下を回収し、制服のズボン

に押し込んでおく。

「あれ？ 朝浦君が……瞬間移動した？」

冷汗をかきつつ俺はみんなを机へと誘導する。

「みんなは座っててくれ……。俺は飲み物を持ってくるから」

「朝浦陽助？　なんか疲れれてないか？」

「別にそんなことは……ない」

「あ、アタシ教科書取ってこないと」

今、なんて？

「え？」

「あつ……」

「そうかそうか、スイも手伝ってくれるのか。ありがとう！」

「うええええっ！？」

スイの頭を両手で掴んで台所へと連れて行く。

台所内に入ったところで手を離す。

「わざとやってのかお前……」

「ひいっ！　怖いよお……そんな怖い顔しないでよお……」

すぐ涙目になるスイ。なんか俺がいじめるみたいじゃないか……。

いや、実際第三者がこの場を目撃したらそうとしか思えないような状況だが。

「まあ、後から気を付けてくれ。それと、これはお前の靴下か？」

「あ、うん。昨日から脱ぎっぱなしだった」

「ふ・ざ・け・て・ん・の・か……っ！」

「いたいたい。頭掴まないでよお……。アタシは悪魔だぞっ！」

と、そこで後ろから何者かの雰囲気を感じた。

振り向くとそこにはカメラを構えたミュが。

「何してんだお前は」

「いえ、大変ですね。と思まして」

「誰のせいだこの状況は！」

「私は歌音さんに力添えしただけなので」

「それが余計なことなんだよ！」

「そろそろ戻らないと不審に思われますが？」

「……くっ」

ものすごく納得できないが、ミュの言うとおりだった。

とりあえずはバレなければいい。凌げばいいのだ。簡単なことだ、

こいつらが何もしなければな……。

人数分のコップを用意し麦茶を汲んでトレイに載せる。

一応全てお客様用のコップだ。こういうところでもボロが出るからな。

「わりい、待たせ……あれ？」

リビングに戻ると、歌音の姿が見当たらなかった。芹川は何故か椅子に座りながらもじもじしている。

「歌音は？」

「えつと……他の部屋に」

「何だとう！？」

ガタン、と俺の部屋の辺りから物音がした。

本日二度目の高速移動。部屋の前に立ち、扉を開け放つ。

「何してんだ歌音！」

「うおえつ！？ えーと、エロ本探し？」

歌音は四つん這いになって俺のベットの下に手を入れていた。というか、スカートの中が見え……ない。

「いやいや、そんなものねえから！ とりあえず出てくれ」

「うえー、一冊ぐらいあってもいいと思うんだけど」

ブツブツ文句を言いながら部屋を出ていく歌音。何にせよ俺の部屋でよかった。いや、よくはなかったがよかった。

そしてそれから数時間、俺はボロが出ないかどうかヒヤヒヤしながら過ごしていた。

もちろん、勉強の内容なんて頭に入ってこなかった。

「そう言えばさあ」

勉強がひと段落ついたころ、歌音が唐突に言い出した。

「この間朝浦君さ、人探してたじゃん？」

「あ、ああ……」

俺は気を張るのに疲れていて、曖昧な返事しか出来なかった。

そういえばなんて言ってたっけ。他のクラスの女子の話だったか。

思い出した、あの女の子だ。放課後に見かけた記憶に引かなかった彼女の事。

「えっと、その隣のクラスの子なんだけどね。結穂ちゃんとは逆の方向のお隣さんなんだけど、だからB組になるんだけど。空宮杏梨<sup>そらみやあんり</sup>ちゃんって言うんだって」

「空宮杏梨か……」

「なにっ！？ 朝浦陽助はまた別の女子生徒に手を出そうとしているのか！」

「どうしてそうなるんだ！ というか、俺は誰にも手を出してねえよ」

「あれあれ、結穂ちゃん？ 何を慌てているのかな」

「美里っ！ 変なこと言わないでよね、別に何も無いわよ！」

「朝浦王国民がまた増えるのですか？」

「何それ！？ 図書室でも聞いたけど流行ってんのか！？」

そんな突っ込みを入れている中で、俺はその女の子についての記憶をたどっていた。

何か、引つかかるものがあつた気がするのだ。

それが何かは霏がかかったように分からなかったが。





15話：空と太陽、温度は低下（前書き）

ケータイより投稿です！  
（ ; ）

## 15話：空と太陽、温度は低下

『名前、名前はなんていうの？』

少年は訊いた。どこか寂しそうにブランコを漕いでいる短髪の子に向かつて。

短髪の子はサンダルを足に引っかけながらぶらぶらと揺らしていた。どこか不満そうな少年を見るその目つきは子供ながらに可愛くはなかった。

公園には二人の子供以外には誰もいなかった。

『ソラ。僕の名前はソラ。』

『そら？ ソラっていうんだ。じゃあ、ソラはどこから来たの？』  
続けて少年は訊いた。ソラはうーんと唸ってから上を指差した。

穏やかな日差しが差す春のことだった。太陽は優しく二人に微笑んでいるかのようだった。

『空、かな？』

『えっ。ソラは空から来たの？ なんか面白いね！』

『面白いの？ じゃあ、タイヨウ君はどこから来たの？』

『おうちから……だよ？ あっちに僕のおうちがあるんだ。それよ、僕の名前はタイヨウ君じゃないよ！』

『タイヨウ君なら、僕と仲良くなれそうだよ。だから、タイヨウ君』  
『どうしてタイヨウだと仲良くなれるの？』

ソラはブランコから飛び降り、空を見上げた。真っ白な雲がふわふわと行き場もなく漂っている。

『だって、タイヨウとソラっていつも一緒に居るよ？ しかもすぐく近くに！ 絶対仲良しだよ』

『だから僕たちも？』

『そう！ ね、遊ぼうよ。一緒に』

『そうだねソラ！ 僕たちは仲良くなれるよ、だってもう友達だもん！』

『あはははっ』

そう笑うソラの笑顔は輝いていた。それはタイヨウにも勝るくらいの輝かしさで。

ただ、天気の良い日なんてものは永遠ではない。

雨が降る日もあれば、雪の降る日だってある。台風だってくることもある。

二人は、一緒に居られなかった。

見上げる分には空と太陽は近い。同じ場所にある。でも。

本当は空なんてものは存在なんてしてなくて、太陽は地球の外にある恒星で。

二人の距離はあまりに遠く、遠く。

夜になれば、二人ともいなくなってしまうのに。

星が落下した。

いや、正直に言おう。星が舞った。

頭を何にぶつけたのかとか、またミユの仕業だとかそんなことではなかった。

ベットから落ちて床に頭を打ちつけていた。

「いつつ……。おいおい、ガキじゃないんだから……」

頭を振りながら立ちあがる。床は冷たくて気持ちが悪かったが、今は涼んでいる気分ではなかった。

何か変な夢を見た気がする。二人の少年の夢？ 内容がよく思い出せない。まるで霧がかかったかのようにもややと見事に何も思い出せない。

感覚で言えば、喉まで出かかっているという奴だ。まあ、喉止まりで出てくる様子は一向にないのだが。

携帯で時間を確認すると、6時だった。そう言えばミュとスイが来てから最初の方はこの時間帯に起こされたが、今は30分引き伸ばされて6時半にミュが攻撃という名の手段を用いて俺を起こしに来る。

ガチャ、と俺の部屋のドアが開かれる。隙間から覗いているのはミュだ。

「どうしたんだ、いつもより早いじゃないか」

「何か物音がしたので……。いえ、罨を張ろうかと思ひまして」

「……。ただベットから落ちただけだよ。何もなかった」

「そうですか。では、私が起きてしまったので朝食の準備をお願いします。夢落ちさん」

「へいへい……」

珍しくパジャマ姿だったミュの後を追って、リビングに向かう。ミュが部屋のカーテンを開き、俺は朝食の準備に取り掛かる。おそらくスイは後1時間半ほど起きてこないだろう。

「そう言えばお前、パジャマのままだぞ」

「……………変態ですね」

「意味が分からんぞ！俺はただ、その、指摘しただけであつてだな！」

「あまりじろじろ見ないでください。恥ずかしいです」

「だから、その棒読みを何とかしろよ……………。可愛げもあつたもんじゃないぞ」

「むっ、そうですか。では着替えてきます」

そういうとミュはリビングから出ていった。これもまた珍しく物聞きのよいミュだった。

それより何だろうか。今日はとても大切なことがあつた気がする。行事、行事だ。……そうか、テストか。

今日は1日午後までテストづくしだったはずだ。それでもって明日も1日使つてテストだ。

これは気が滅入る。朝から嫌なことを思い出してしまった。

しかし、俺は去年とは違って勉強会なるものをして情報交換を行ったし、ちょこっとだけ勉強もした。

歌音には勝てないだろうが、よいところまで行けるのではないかと思う。

ちなみにうちの学校、滝原高等学校はテストランキングなるものが張り出される。成績上位者30名の名前が並べられるのだ。二年生はD組まであつて大体200名程度。俺はその中間からちよつと下をうろうろしていた。各個人には大体位置するであろう順位と成績がプリントで配布される。

一年生の時点で最高順位は98/200位。本当に微妙である。

「ゴミムシさん。パンが焦けていますよ」

いつの間にかそばに居たミュがオーブントースターの中を指差す。そこには真つ黒とまではいかないが、こげ茶に染まつた食パンが鎮座していた。

「うあ……やつちまつた。悪い、焼き直すから待つてくれ」

「いえ、私はそれで構いません。そのかわりちーずをのせておいってください」

「あ、ああ……」

罵詈雑言、が飛んでこなかった。いつもであれば『お前も焦げるか?』といったようなニュアンスを醸し出すユニークな暴言が飛んでくるはずなのだが。

「な、なあ。どうしたんだお前」

「どうした、とは?」

「何かいつも違う気がして、なんだが」

「今日はテストですね」

「……そうだが?」

ミュは新聞を広げ、政治経済の欄を横眼で眺めつつ

「陽助様はどのような失態を繰り広げるのか、と楽しみで」

「お前……何を言っている?」

「知能の差、というものを見せつけるにはもってこいの行事ですの

で、朝から興奮してまして……。すいません陽助様」

「なにあやまつてんの！？ え、これ、俺はどう怒ればいいわけ！？」

それきりミユは朝食を催促するように俺をじっと見つめたまま何も言わなくなった。

ぐっ、と睨み返しているが、その大きな瞳に弾かれてしまう。なんだかこつちが恥ずかしくなってきた。

「何故に頬を赤らめているのですか気持ちが悪い」

「う、うるせっ」

決してミユに見惚れていたわけではない。そう、断じて違う。

セツトしていない柔らかな髪に大きな瞳、柔らかそうな唇。素のミユは可愛いなあと思ったりはしない。そう、しない。

「今すぐく強烈な悪寒が走りました。全身に鳥肌が立って気が狂いそうでした」

「……………」

本当にこいつは心が読めるんじゃないかと考えるときがある。

「おっはよー、朝浦君！ テストだよ。辛いよね苦しいよね厳しいよねー！」

くるくるくると朝から元気な歌音は教室に入るなりそんな事を叫んだ。

もちろん後ろにはミユと寝ぼけたスイを連れて。

教室の他の連中は仲間同士で集まって最終確認をしたり、問題を出し合ったりしていた。

そんな中で俺たちは何故か雑談である。

「もー、ほんとにテストってやだよ。なんか、心臓がキューッてなるよね」

「歌音は別にいつも高得点だろ」

「それはそうだけど、気分がよくないよね!」

否定はしないところが歌音らしいというかなんというか。

スイは数学の本を逆さに持って目を白黒させている。雑談などしている場合ではないくらいにヤバいらしい。

「おい、スイ。それ逆さ」

「し、知ってる。何か新たな記憶方法が無いか模索してるところなの!」

「スイ。キャラは?」

「今はちよつとタイム!」

タイムとかあるのか。便利だな、こいつのキャラづくり。

そんなこんなで朝の猶予は無くなり、ホームルームが終わってテストが始まった。

まあ、俺も雑談してる場合じゃなかったな。

昼休み。

答え合わせを行う連中は放っておいて、俺たちはまたも雑談に興じていた。

朝とは違って芹川も加わって、さらにやかましく。

スイはなんとというか、ある意味完全燃焼な感じだった。

「あ、朝浦陽助はどうだったんだ?」

あえて答え合わせはせずに、出来はどうだったかと聞き合つのがこの連中だ。

「俺? ……正直いつもどおりっちゃあいつも通りだが」

「いつも通りがたかが知れてますね」

「だあまつとれ! んで、芹川は?」

「わ、私の(出来の)ことがきになるのか?」

「うん？」

「ふうん、まあ上々かな。今度こそ1桁台に入ってやる」

芹川は頭がよかった。いつもは10何番台で2桁止まりだったらしい、なので目標は1桁台らしい。

ていうか、俺ならそこまで行けばもう充分なんだけどな。やっぱり向上心的なものがある人は何かが違うのだろう。

「芹川はすげえなー」

「そ、そうだろう。そうだろう！」

「わ、私は点数が1桁台かもしれないよう……………」

ある一名の泣き声でここら一体の温度が低下した。



## 16話：結果にともなうもの（前書き）

こんな時間に更新です。

これから忙しくなり、更新速度が大変遅くなると思います。

三日に一本ではなく、一週間に一本またはそれ以下となってしまう可能性が大いにあります。

勝手ながら私用でこのようになってしまうことにお詫びを申し上げます。

申し訳ございません。 m ( \_ \_ ) m

## 16話：結果にともなうもの

テストが終わって一週間が経過した。ボロボロと危ない点数が見え隠れする紙切れを先生から幾つか受け取りつつ、順位の発表を今か今かと待っていた。

俺の場合は期待をして待っているのではなく、不安を募らせつつ待っているのだ。むしろ結果は出さなくてもいいと思っているくらいである。

せめて半分。それくらいの順位にはいてほしいのだ。そうしないと厳しい。

大学への推薦……は無理だとしても、受け入れ先を広げるためにもやはり結果は良いものではないといけない。

「あ、朝浦君。どうしたのそんなに怖い顔をして……」

ハッ、と我に返ると目の前には椅子の背もたれに体重を預け、こちらを見ている歌音がいた。

「……考え事。あと怖い顔は余計だ。俺は別にそんな顔をしているつもりはなかった」

「ごめん、怒った？ でも、なんか怖かったし……」

「えっと、それは俺のデフォだから……ってなんか自分で言ってる嫌になってきた」

「わわわっ。そんなことないよ！ えと、あの……なんというか。それだよ、うん」

歌音。フォローしてくれるつもりなのかは知らないが内容が伴っていないどころか文章もおかしいぞ。

それにしてもこいつはなんだか余裕そうだな。

確かに歌音は勉強が出来るのだからわざわざテストの結果に怯える必要なんてなかったな。

うーん、勉強でき奴とそうでない奴の差とは一体何なのだろうか。考えてみる。普通に考えれば、日々の努力。

でも、俺は中学時代にその考えをぶち壊す奴がいたのを知っている。いつも不真面目で授業中は居眠り。それでいて点数を稼ぐ奴がいたのだ。そいつは何だったのだろうか。

まあそんな事を考えている時点で俺はおかしいのかもしれないが。

「えーと、まだ怒ってる？」

俺が黙っていたからか、歌音が不安そうにこちらをチラチラと窺いつつそんな事を聞いてくる。

目が潤んでいるのは自然現象かまたはわざとやっているのか……今までの傾向からすると前者の方なのだが。なんだか俺がいじめている気分になってきた。

「や、また考え事してたんだよ。別に気にしてないからいいって」

「そ、そうなの……？ またこわ……難しそうな顔してたから」  
もう何も言うまい。

「歌音さん、朝浦様。廊下にこの間のテストの順位が張り出されていましたよ？」

いつの間にか隣に立っていたミュが言う。

「お前、いつの間に……」

「朝浦様が大魔神のごとく恐ろしい顔をしていたところからです。…

ああ、これではいつからか分かりませんね」

「それはアレか。俺が平常運転で恐ろしい顔をしているということ  
を言っているのか」

「否定はしません」

「潔すぎて怒る気にもなれんわ！」

「只今怒っておられますが？」

「ぐっ……」

やはり駄目だ。ミュには口で勝てる気がしない。

諦めて廊下に目をやる。確かに人だかりが出来ている、その中に。

空宮杏梨、と呼ばれる少女を見た。

彼女はいつかと同じように強気な炎を瞳に宿して俺に向かって柔らかな頬笑みを見せると人だかりの中に消えた。

「待ってくれ！」

何を焦っているのか、自分自身で理解できないまま俺は席を立てて廊下へと向かっていた。

人が多くてどこに居るのが分からない。辺りを見回すが、それらしき姿は見当たらない。

心なしか俺の周りに小さなスペースが出来ているような気がする。

追って、歌音とミュが廊下へと出てきた。

「いきなりどうしたの？ 朝浦君」

「流石朝浦様ですね。すでに朝浦空間が出来上がっていますよ」

心配する言葉と皮肉を投げかける言葉。こつも対照的だと笑えてきしてしまう。

「いや、……空宮って奴が見えたから」

「空宮杏梨ちゃん？ 探してたの、朝浦君？」

「そついうわけでもないが……」

何故か会わないといけないような気がした。彼女がこちらを見るときに、いつも何かを感じるのだ。

いや、何かを伝えようとしているような気がするのだ。

思い違いかもしれない。ただ、俺のことが目に入って視線をずらせなかったただけなのかもしれない。

「じゃあさ、会いに行ってみる？ Bクラスに」

「……いや、いいわ。それより、お前載ってるんじゃないのか、これに」

俺が指差したのは順位表。成績上位者30名の名前が書きだされている。

「芹川結穂……8位。流石だなあいつは……当然のごとく俺の名前は載ってないけど……おおー！」

俺はそこで信じられないものを目にした。というか、半ば疑っていた。

一応、予想はしていた。それでも驚かざるを得なかった。

天崎美由……7位。

「おっ、おまつ。なんてことしてんだよ!？」

「別に咎められる要因は無いと思われませんが? ……………これで私のすごさを理解しましたか？」

妙に勝ち誇ったような言動。しかし、顔はいつものように無表情だった。

「すごいすごい! ミユちゃんすごいよ!」

歌音は自分のことのように喜んでいた。ミユの手を掴んで上下にぶんぶん振り回している。

そういう歌音だって27位と成績上位者の中に入っている。

なんだかここに居る俺が恥ずかしくなってきた。周りの連中は良く見ると名前の載っている奴らばかりだった。

ここには仲間がいないようだった。

放課後、テストの結果を知るために職員室に成績表を取りに行くことが出来る。

各クラスの担任がそれぞれの教科の点数とその合計、学年内での順位を書かれた紙を持っており、受け取りに行かなければならないのだ。

ちなみに、成績上位者は張り出されることで先に結果を知ることが出来るので、特に成績表は必要ないものとなってしまう。テストの点数はすでに分かっているからだ。

「失礼します」

職員室に踏み込んだ瞬間。何故か視線が一斉にこちらに集まる。だがそれも束の間、先生方は視線をそらしてそれぞれの行動に移る。一体何なんだ……………。

クラス担任のところまで行き、成績表を受け取る。

ちなみに担任の先生の名前は奈倉未可子なくらみこという。

女性用スーツがに合っており、黒くて長い髪と整った顔が特徴である。

この学校内で考えると比較的若い先生で、しっかりしていて評判もいい。朝のホームルームの時に無駄話をしてしまうのが玉にキズだが、それも愛嬌というものだろうという評価が下されている。

男子生徒の中では同級生の女子生徒を差し置いて告白してしまった奴もいるとかいないとか。

「朝浦さんは……今回なかなかよかったんじゃないですか？ 点数も順位も少し上がった」

「そうですね」

確かに順位は87位と俺の中での最高順位を更新していた。これはやはり勉強会の影響だろうか。

素直にうれしくて口の端が歪んだ。

「ひいつ！？ ……朝浦さん。ふ、不満だったかな……？」

「いや、俺笑ったつもりだったんですけど……」

「あ、はあ。そうでしたか……ほっ」

先生、どういうことですか。『ほっ』ってなんですか。

「この調子で頑張つてね！」

そんな風に応援されるが、俺は何だが微妙に複雑な気持ちだった。

「ただいまー」

家に帰ると、玄関に靴がいつもより足りなかった。ミユの分だろう、スイは帰っているらしくいつも通りに乱雑に脱ぎ散らかした靴がある。

それを整えてから家に上がり、リビングへ向かう。

何か、うめき声が聞こえる。

リビングへと続くドアの前で思わず立ち止まってしまう。これは、

スイの声だった。

なんとなく、なんとなくだが危険な感じはしない。だからこれは違う意味でスイが呻いているのだ。

理由は、まあ、分かる。

嫌でも分かる。

ふうっ、と一度深呼吸をしてから、ドアを開ける。

案の定うつ伏せでカーペット上に転がっているスイを発見した。

「うううー。うっ、うううー」

鞆は机の上に置いてあり、その隣には成績表が。 黒崎優美…… 2

00位

実質最下位。やはり元凶はこれだったのだ。

「お、おい。スイ……ただいま」

「うーっ。うううー」

「ただいまー？」

「うっ、うっ……ううー」

駄目だこれは。

最下位、という結果を突きつけられてスイは参ってしまったている。

空気を読んでか面倒だったからか、おそらくどちらでもあるであろう

うミユはこれを回避したのだ。

「スイ。制服がしわになるぞ」

「……………」

「俺が脱がしてもいいのか？」

「……………」

「これでも反応しないのかよ……。これは相当だな……………」

もう一度成績表を見直してみる。

総国…… 43点

数学…… 2点

化学…… 15点

英語…… 47点

歴史…… 38点  
物理学…… 89点

あー、理数系が全滅してるな……。それにしても、……ん？  
何かおかしい。

「す、スイ。お前物理学89点も取ってるじゃねーか！」

「……そうだよ」

「すげえじゃねえかよ！ 俺なんて60点いってないぞ？」

「そうなの……？」

「すごいぞ、うん。他の教科が足を引っ張っただけだ！ 頑張れば次は大丈夫だ」

「そう、かな……そうだよね！」

ばあああつとスイの顔に笑顔が戻った。目が少し腫れていたのは泣いていたのだろうか。

ふう、と元気になったスイを横目で眺めながら溜息をつく。そしてタイミングを図ったかのようにミユが帰宅したのであるう、玄関のドアが開く音と、帰宅を告げる声が聞こえた。

「只今帰りました。……おや、スイが」

「さっきまで死体だったよ」

「ふむ、良かったですね、スイ」

「うんうん！ 陽助さんに褒められたっ！」

子供のように無邪気な笑顔を振りまき、喜ぶスイ。ほんつとに女の子って感じだな……。

「悪魔が褒められて喜んでどうするんだ」

「はっ……そうだ。アタシは悪魔だ、だからテストの点数が悪かったくらいで何だっていうんだ！ むしろ悪魔らしいじゃん！ 不良みたいで！」

こいつの中の悪魔像はどうなっているのだろうか。  
ただ、今は喜んでいるので放っておくことにした。



「200位……フッ」

だから、ミユの黒い笑いは聞かなかったことにする。

## 17話：夏の訪問（前書き）

どうにか今日は更新することが出来ました；

後々はどうなるか分かりませんが、出来るだけ頑張りますのでよろしく願いますm（－）m

## 17話：夏の訪問

夏、と聞いて思い浮かべるものは何かと問われれば至極真つ当な答えとして『海』や『夏休み』が挙げられるだろう。他にも候補はあるとは思われるのだが、今はこれくらいにしておこう。

そう、決まって夏が来てしまったのだ。日差しの強い夏、うだうだと暑い夏。

俺は夏という季節があまり好きではなかった。友達と海へ行くわけでもなく、ダラダラと大型連休を消化して無駄に課題だけが枷となるこの流れがたまらなく嫌いだった。

100%自分が悪いことは分かっている。友達のいない一人ぼちな奴が僻んでいるだけなのだ。

とりあえず、夏は嫌いだった。他にも理由があったと思うのだが、遠い昔のことで忘れてしまった。

暑いから、という微妙な理由だったかもしれない。

そう、今も現在進行形で日差しが突き刺さっている。俺の席は窓側にあるので必然的に日光が当たるのは仕方がないことなのだが、なにせイライラする。

「おうっ……………どうした、朝浦」

ぎょっとした目で数学教師の浦辺がこちらを見ていた。そうとう俺の顔がショックを与えたのか、手に持っていたチョークが半分に折れて床へ。粉々になる。

「いや、ちよっと日差しが強くて顔をしかめていただけです。大丈夫です」

「そ、そうか……………」

夏休み手前だというのに授業はみっちり詰まっている。それも今日までの辛抱だった。

しかし、夏休みは憎い。俺は些細なことが積み重なってイライラしていたのかもしれない。

ミュがこちらに粘つくような視線を送ってくるのだったり、スイがこの日差しの中でも構わず眠りこけていることだったり、色々あるのかもしれない。

ただ、暑いことにキレていたのかもしれないが。

1学期分の授業がすべて終了し、多くの生徒が待ちに待った夏休みが幕を開ける。

といつても、最後にはホームルームがあり、通知表と呼ばれる一部の生徒には魔物にもなり得るものが待っているのだが。

「朝浦君！ ミュちゃん！ スイちゃん！ 夏休みだよ、待ってた連休だよー！」

両手を万歳させながら歌音は楽しそうにくるくると回りながら俺達の前に現れた。

何か大きな出来事があると喜ぶ、またはテンションの向上が著しいのが歌音である。

どこからそんな元気が湧いてくるのか不思議だったが、俺は額から汗を流しつつ適当に答えた。

「ああ、そだな」

「あーっ、なんでそんなに適当な返事かなあ。折角の休みなんだからエンジョイしようよエンジョイ」

エンジョイできる相手がいないからどうともいえないのが現状だった。

それよりも問題があることに気づきだろうか。連休と言えば友達の家にお泊りなどと言った俺には考えられないイベントが存在するらしいのだが……。

俺は横眼でミュを見てみる。なんだか悪いことを考えていそうな顔をしているような気がした。いつもの無表情なので詳しくは分からないが、こいつには前科があった。

スイを見してみる。汗だくになりながら机に突っ伏して寝ている。これは……………気分悪くは無いのだろうか。

幸せそうに涎を垂らして寝ているこいつは放っておこう。しかし、寝起きが一番危険だということは忘れないでおく。こいつにも前科があった。

なんということだ、近くに隠蔽工作の出来る仲間が一人もいないではないか……………。

「それよりさ、私とミュちゃんとスイちゃんと結穂ちゃんでお泊まり会しようよー」  
来た。

「いいですね。しかし、四人も泊められるようなお宅があるのでし  
ようか？ ご両親に迷惑だったりしませんか？」

「んー、確かに私の家は狭いから無理っばいかな……………。結穂ちゃん  
ちはたぶん駄目だろうし……………」

「……………ん。むにゃ」

俺は変な汗をかきながら平静を保とうとしていた。

というか、どうして俺が心臓をバクバクさせているのだろうか。よく考えれば、同棲がバレてダメージを受けるのがどうして俺だけだなんて考えていたのだろう。ミュだってスイだって困りは……………しないんだろうなあ。

ズーン、とわけもわからずに下がっているテンションの行く末を見る前に追撃がやってきていた。

「ミュちゃんはどうかな？」

「むう、私の家は少々狭くてですね……………あと家の主がうるさいので無理かもしれませんね」

「そうかー。ん、どうしたの朝浦君？ これは女の子の会だから男子禁制だよ？」

無意識のうちに歌音たちをガン見していたようだった。

「べ、別に俺はとくに何も言っていないだろ」

「変態ですね」

「止める！ そんな一言で片づけられるとなんかリアルで苦しい！」  
「お泊まり会は無理かな……。仕方ないね、だから海に行きましよう！」

シユババ！ と歌音が高速の勢いで手を挙手する。目をキラキラと輝かせながらもぴよぴよこと髪を揺らしている。

「海なら朝浦君も参加できるしね！」

「そうですね……。それなら安心ですしね。……。しね？ ……。しね」

「そのエコー的なものは無視していいのか？ いいんだよな、無視するからな」

そんな会話をしていると、奈倉先生が手を打ちながら教室に入ってきた。

「はいはい、授業は終わりましたがまだホームルームが残ってますからねー！ 席について下さいね」

その先生の声によってガタガタと椅子を鳴らす音が聞こえ、生徒が着席を始める。

俺は先生の抱えている通知表を気にしながら席に戻った。

「それじゃ！ 約束したからね、ちゃんと守ってね！」

歌音が元気に跳ねまわりながら言う。

下校中に夏休みの色々な予定を練り、話し合っていたのだ。俺は一人その中でどうにか最悪は避けようと考えを張り巡らせていた。簡単に言くと、ボロを出さないようにするための対策だ。

芹川には歌音がメールで伝えておくということで、今ここにはない。

委員会やら何やらがあるらしい。夏休み間の花壇整備がどうかそんな話をしているらしかった。

大変だな、と人ごとのように思いながらも学校で待つことはせずにこうして帰路についているのだ。

我ながら結構酷いとは思ったのだが、芹川はどうやら俺達と帰り道が逆らしかった。

では何故この間不良三人に襲われたときにこっち方面に居たのか。まあ、あそこらへんはスーパ―やらドラッグストアやらがあるから買い物に来ていたのだとしたら不思議ではないのだが。

「それにしても……そんなに予定立てて大丈夫か。課題は終わらせられるのか？」

何やら歌音の手に持つスケジュール帳のようなものには、たくさん予定が書き込まれていた。

「だいじょーぶっ！ 夏休みの最終日空いてるでしょ？ ほら」

見せてくれたスケジュール帳は確かに8/31の欄は真っ白だった。何故か自慢げに胸を張り、

「余裕だよ！ この一日の追いこみレベルは半端ないからね、学生ならではの力の見せどころだよ！」

「誰に見せつけるんだよそんなもん……」

俺のげんなりした突っ込みをモノともせずに歌音はさらに上機嫌になる。

只今絶賛輝き中の太陽のように笑顔を振りまく歌音を見ると、なんだか微笑ましく思えてくる。

復活したスイも頬を紅潮させながら興奮を押えられきれない様子だった。

なんだかんだで俺も参加することとなった歌音with仲間たちのイベントのおかげで、少しだけ。

ほんの少しだけ夏のうざったらしさを和らげてくれるような気がしていた。

「ん？ どうしたんだミュ、じつと見て」

ミュが俺の顔を凝視していたので、少し困惑した。なんだろう。また何か毒を吐き散らすのだろうか。

「いえ、……今年は一入ぼっちじゃなくてよかったですね」

「やっぱり毒を吐きやがる！……ん？ 今年、は？」

「ああ、失礼。今年も、でしたか？」

「どうしてお前はこうも正確に弱点を決ってくるんだ！」

俺の素朴な疑問は誰も答えてくれず、日常に埋もれていくばかりだった。

「ただいま」

「只今帰りました」

「ただいまだぜっ！」

三者三様の帰宅の挨拶を告げる。玄関で靴を並べてからリビングへと向かう。

スイは早速冷蔵庫から麦茶を取り出し、コップに注いでぐびぐびと飲みほしていた。

ミユは先に部屋に戻っていった。おそらく、制服を着替えてくるのだろう。

こういうところに天使と悪魔の違いが出るのだろうか、と考えたところでこいつらは普通の天使と悪魔じゃないということに思い至る。毒舌天使とビビリ悪魔、だからなあ……………。

ふうっと自分も一息入れようと、椅子に腰かけたところでケータイが鳴った。

着信相手を確認すると、『母さん』と表示されていた。

特に何も考えることなく、普通に、いつも通りに電話に出ていた。

「もしもし？」

『もしもし、陽助？ 大丈夫？』

「いきなりなんだよ母さん……………」。特に変わったことは

ないよ」

……………なければよかったんだがな。

『いやあ、一人暮らししていろいろ大変じゃない？ もう一年経つ



けどやっぱり心配なのよ』

「心配はいらないよ。こっちはしっかりやってる」

『そう？ 特に問題は無いわけね。よかった、じゃあ近いうちにそっち行くね』

「ああ。……………ああ!？」

『え、どうかしたの陽助？ 大丈夫？』

「大丈夫……………ではないような気もするけど！ なんで、来るの？」

『なんで、って……………去年行った時に夏は必ず行くからねって行ったじゃない。父さんなんてもう準備始めちゃってるわよ？』

「はええよ！ ていうか、いつ来るんだよ！ っていうか、来るなよ！」

『父さんその日会社休んじやったのよねえ。だから行くしかないのよ、休みを無駄に出来ないでしょ？』

「俺の質問聞こえてる!？ あからさまに無視してない？」

『じゃあ、そういうことだから。陽助、またね』

「またねじゃねえ！ おい、ちょっ!」

『ツーツーツー……………』

あまりのショックに立ちあがってしまっていた。

これは、大変なことになった。



## 18話：輪と集団と（前書き）

どうもこんにちは、鳴月常世です。

11月になってしまいましたね、まだまだこちらは忙しい日々が続きます。

今日のところはとりあえず更新と……。

## 18話：輪と集団と

両親がこの部屋に来るといふ大事態。いや、いつもならば問題は全くないのだが、今はタイミングがタイミングだろう。

ちらり、と台所の方を見る。そこには背の小さな長い黒髪の少女。スイがいる。

「どうしたのですか。顔面凶悪……じゃなくて顔面蒼白ですよ？」  
リビングのドアを開けて入ってくるなり毒舌で対応してくるのは、ちよつと背が平均女性より高めの茶がかった髪の色を肩まで伸ばしている少女。ミュだ。

そう、この状況こそが最悪なのだ。駄目なのだ。

一応この状況は一般的な言葉で言うと、同居ということになるのだ。そんなものを両親に見られようものならすぐにこのマンションの契約は解除、俺は実家に戻され学校は転校となり、この天使と悪魔は家なき子となってしまふ。

問題が山積み過ぎた。例えばこの二人をその日だけは隠し通せたとする。

ただ、現在ミュとスイの部屋であるかつて空き部屋だった部屋はどうする？

見つかる 制服がある（女子用） 社会的に死亡  
危険すぎるっ……。どうしようもねえっ……。

「むう、シカトですか？ 陽助様」

隠すことが無理だとすると、いつそ説明してしまうか。

神から天使と悪魔を一匹ずつ預かってるんだー、はっはー。

そんな風に言ってみようか。

思考一秒後、この案は崩れる。それはそうだ、むしろそんなもので通じてほしくない。

頭の出来を心配されるレベルの発現は無理。大体、神とか誰が信じるんだよ。

では、普通に言ってみるか。

女の子二人と同棲してるんだぜー、はっはー。

親父に殴られるビジョンを見た。これはシュミレーションをしても無駄だ。

「どうしようもない……」

つい、声に出してしまっていた。

キラんとミユの瞳が光り、何か面白いことを発見した時のように無表情かつじりじりと近づいてくる。

「お困りのようですが……何か（面白いこと）ありましたか？」

「その言葉のニュアンスをもう少し解明したいところだがそれどころじゃないな……。実は」

俺は先ほどの電話の内容を伝えた。

するとミユはうんうんと頷いて、俺に椅子に座るよう促した。俺の対面に座り、スイモバタバタと走ってきてミユの隣に座った。

「私はきちんと挨拶をしたいですね。一応お世話になっているので、でもさ、どういう挨拶になるわけ？」

「食費代はそちらから頂いているわけですし、感謝はしなくてはいけませんからね」

「問題逸らそうとしていないか？気のせいかな？」

「わ、アタシもちゃんといわねえとな！ こういう性格ですって！」「お前は黙っててくれ」

いわゆる家族会議な席配置になり、いつものように会議になるかと思いきや自分の願望を伝えてきやがった。

考える気はあるのか？ 最悪を回避しようと思っているのか？

「いや、だからな？ バレるのはまずいんだって」

「まるで浮気しているみたいですね」

「余計なことは言わなくていい！」

「ですが、この間もそうでしたが、隠し通すということは難しいものだと私は思っています。それに陽助様は甘いのです。本気で隠し

通す気があるのならば、家に入れなければいい。徹底的に行動しようとしていないから駄目なのです。そういう性格であるということを知っていますが、それでは駄目なのです。結果、陽助様は駄目人間だということですね」

「長いこと語つといて帰結はそれかよ!? お前は本当に俺を馬鹿にするのが好きだな!」

「いえ、そんな事はないのですが……」

「嘘付けや! ……最初の方の言い分はもっともだが。どうすればいいか」

「はいはい! 提案!」

スイが手をビーン! と伸ばして拳手している。何故だかスイの姿に小学生を見た。

……気のせいだ。

「何だ、いい案あつたか?」

「あ、あのね……。夫婦、つてことにすればいいんだよ!」

「却下」

「えうう!? ちょっとぐらいコメントくれたっていいじゃん!」

「馬鹿か! 掘り下げる必要性が全く感じられんわ!」

「そもそも面白くない提案をする時点で浅はかさが知れますね」

「ミュちゃんまで酷い!?!」

「あー! 分かった分かった、これでどうだ。その日はたまたまお前らが俺の家に遊びに来ていた、そこでミュは間接的に礼でも何でも言えればいい。お前らの部屋は塞いでおく、それでいいな」

「アタシの性格発表は?」

スイが立ちあがったがシカトしておく。ミュは形の良い整った顎に手を当て、考える素振りを見せる。

「いいんじゃないでしょうか」

「うし、とりあえず余計なことは言わないという方針で頼むぞ……」  
小さな不安を拭いきれないまま、後に迫る出来事に対しての方針が定まった。

何故だかスイはふくれた顔をして怒っていたが。  
そう言えば母さんたちはいつ来るのだろうか………？

次の日の朝。ねっとりとした暑さの中での最悪の目覚めだった。  
時計を確認すると、時刻は9時を指していた。かなりの寝坊だった。  
遅刻どころの騒ぎじゃねえ！ とベットから跳ね起きたが、よく考えてみると夏休みだった。  
ミュがキレのあるボディーブローで起こしに来なかったことに変な風になんて思ってしまった。  
頭を掻きながらリビングに行くと、そこには異質な光景が広がっていた。

俺の母親と、父親と、ミュと、スイが談笑していた。

「どういう状況だコラア!?」  
混乱しながらその輪の中に入っていく。なんだ、なんだこの状況は!?

何故こんなに早くに母さんと親父が来てんだよ。というか、なんで家の中にいんだよ。

分からないことがたくさんあり過ぎたが、何よりも一番不思議なのがミュとスイと普通に、ごく普通に話をしていることである。あるのはどこかの一家のような温かな団欒。

どう考えつつあっておかしい。だって息子の家に女の子二人いるのに突っ込みなしで動揺なしでナチュラルに何故会話できるの？

俺がそっちの状況に出くわしたらまず意味もなく叫ぶわ！

「朝からうるさいぞ、陽助。……おっ、また背が伸びたか？」

「伸びてねえよ！ 来るの早すぎるだろ、つかなんでこいつらにつ

いて突っ込まないんだよ！」

「こらこら、陽助。お父さんに当たらないの、反抗期？」

「いや、突っ込むところそこ違う！」

「陽助様、朝からうるさいですわよ？」

「お前はすでに何キヤラだよ！？」

朝から俺の体力と喉を疲労させていった。

詳しく説明すると、朝……7時ぐらいだそうだ。俺の両親が訪ねてきたのは。

その時すでに目を覚ましていたミユは何のためらいもなく、俺を起こしに来るでもなく、両親を家に迎えた。最初の方こそ驚いていたらしいが、話をしていくうちにどうでもよくなっただけらしい。

どうでもよくなさすぎるのだが、うちの親は頭がやられているのではないかと思われるくらいレベルだった。まさかこちらが心配する羽目になるとは思っていなかった。

ただ、ミユはちゃんとやってくれたようで少々強引だが、たまたま俺の家に遊びに来ていた体<sup>てい</sup>で話を進めてくれたらしい。スイは今もなお性格と奮闘中である。

で、リビングにて談笑中と今に至るわけである。

「それにしてもミユちゃんもスイちゃんも可愛いわね。娘にした気分だわあ。ほら、うちの息子なんて犯罪者みたいな目つきして……全く誰に似たのかしらね」

色々突っ込みたいところであるが、こいつらミユとスイで通してやがる……。

「いえ、陽助様は素晴らしい方ですよ？ お友達になれて本当に良かったです」

「あらあゝ、本当にミユちゃんはいいい子ね」

「ああ、可愛いもんだ。うちの息子は万年反抗期のような顔をしているのにな」

突っ込み所があり過ぎる……。もう駄目だ。俺にはこの場の収集



を付けることは不可能だ……。

疲れた顔のまま楽しそうに話をする四人を見てみると、急に母さんがこつちを振り向いた。

そのまま寄ってきて声を潜めて言う。

「ちよつと陽助、なんなのあの子たち超可愛い。どっちが本命なの？」

「は？」

「だから、どっちが好きなのよ。両方なんて駄目よ？」

「母上、何を言っているのかよくわかりませぬ」

「んもつ、分かってるくせに。ちゃんと選りなさいよ？」

「や、だからさ。そうゆうんじゃないんだけど……」

母さんは最早俺の話を聞いていなかった。というか、勝手に妄想が膨れ上がっていた。

続いて親父が寄ってくる。またも小声で。

「こら陽助、よくやったぞ」

「意味分からん、親指を立てるな」

「あんなに可愛い子二人も……大事にしろよ」

「あ、親父は選べとか言わないんだ……」

「守つてやるんだぞ」

「え……」

最後の親父の一言が、妙に真剣味を帯びていて俺は啞然としてしまっていた。

鋭い親父の眼光と、念の一押し。あんな顔をした親父を俺は久しぶりに見たかもしれない。

いつ見たのかは正確に覚えていないが、二回目ではあつたはずだった。

「親父……？」

親父はすでに団欒の中に戻っていて、いつものように馬鹿話を始めていた。

「さあて、じゃあお母さんがちよつと早いけどお昼ごはん作っちゃ

おうかな！」

「わー！ アタシ超楽しみだぜ！」

「そうですね。母の味、というものには興味がありますね」

「張り切っちゃうからねー？ ほら、陽助も手伝いなさい！」

何故かこちらでも妙に張り切っている母さんに呼ばれ、昼飯を作ることとなった。

「じゃ、そろそろ帰るかね」

親父がそう言い出したのは夕方4時ごろのことだった。

それまでは近況報告をしたり、談笑し合ったりをしていたがそろそろネタも尽き親父は明日は仕事があるのでということで帰ることになった。

両親を駅まで見送ろうということで駅まで行き、改札で別れを告げる。

「元気でやるのよ？ 風邪引かないようにね」

「陽助、頑張るんだぞ。勉強もしっかりな」

二人からそれぞれ言葉をもらい、なんだか照れくさくなる。そっけない返事を返していた。

「分かってるよ」

俺の後ろにはミユとスイがいる。両親は二人にも向けて、陽助をよろしく頼むね、といった。

なんの真似？ と聞き返そうとも思ったが、なんだか母さんも親父もよくわからない顔をしていた。

そう、子供が三人になったとかそういう顔かもしれない。別れの惜しさも三倍ということだろうか。

「お母様もお元気で、またお会いしましょう」

「元気でな！ またお昼ごはん作ってね！」

ミユとスイも返事を返し、母さんと親父は改札の向こうへと消えて

いった。

なんだか喪失感のようなものが急にこみ上げてきた。

普段ならそんなこともなかった。少なくとも一年前はそうだった。

でも、なんだか二人とも良くわからない顔をするから、こっちまで感化されてしまったのかもしれないかった。

「家族って、いいものですね」

ミュが唐突にそんなことを言いだした。

「私には家族というものがありませんので、何が普通なのか分かりませんが……少なくとも陽助様の家族はとても温かなものだったと思いますのです」

ミュが両親の消えていった改札を遠く眺めながら、ずっと眺めながら言葉を漏らしていた。

やけに傷心的なミュに、愛おしさすら湧いてくるような気分だった。俺が知らないだけで、天使だって複雑なのかもしれない。寂しさ、というものは決して一人では埋められないものだから。

「どうしたんですか、じっと見て。早く帰りましょう」

「あ、ああ……」

毒舌が発動しないことに不信感を覚える俺が、なんだか恥ずかしかった。

ミュは、大切なことを言っていたのだと、思う。

それは、自分自身に関することだった。プライバシーという言葉で守っていたミュの欠片だった。

またひとつ、何かが変わったのだ。



## 19話：堕ちてきた水滴（前書き）

前の投稿から10日経ってしまいました。申し訳ございません。  
まだ忙しさが解消されそうもないので、お待ちいただけると嬉しい  
です。

予想では、また10日後辺りに投稿できそうです。

それでは次話の前書きでまたお会いしましょう。

## 19話：堕ちてきた水滴

夏休み中の学校というものはなんだか新鮮で、普段には見られない一面が垣間見える。

例えば、朝から汗水流して部活に励むグラウンド上の生徒たち。同年代とは思えないような体格をした野球部や陸上部が走りまわっている。

こんなに暑い中で頑張っている姿を見ると、自分とはまったく違う世界がその人たちには見えているのではないかと錯覚するレベルだった。おそらくその人たちが見ている、いや住んでいる世界は俺の世界よりも少しランクが高いのだろう。それはその人たち自身のレベルが高いからで、悲観することは全くないと俺は考えている。しかし、やっぱり心のどこかでは自分はどうなのだろうと考えてしまふ。

同年代が頑張っている姿を見るのをいつの間にか嫌になっていた、そんなこともあるかもしれない。

いわゆる現実逃避と呼ばれるような行動なのだが。

「陽助様……いえ、堕落人間ヨースケさん。何をボーっとしているのですか。さつさと仕事を済ませましょう」

後ろから少しだるそうにミュの声が聞こえてきた。

「何だその命名は……。漫画の題名か何かか」

「どうでもいいです。早く帰りたいのでさつさと」

多少の苛立ちを漂わせるミュの発現に、俺はげんなりしていた。

第一、俺はついて来いとは言っていない。勝手についてきて文句を垂れているのだ。

確かに外がこんなに暑いとは思わなかった。朝はスイが限界を迎えてクーラーを解禁していたので家の中ではそうでもなかったのだが。「確か校舎裏でしたね。鍵は貰ってきていますか？」

「ああ、さつき職員室行ってきたよ。クーラーガンガンに効いてた

ぞ……」

「教室にはクーラーが設置していないというのに酷いですね」

「まあ、こんなもんだろ」

額から流れ落ちる汗を拭いつつ、校舎裏へと向かう。

そう、何故俺は休みの日なのに学校に来ているのか。それは今朝が  
かってきた電話のせいであつた。

いや、せいというのは違うかもしれない。俺が引き受けてしまった  
のだ。

「花壇の水やり？」

朝、寝ぼけたままの頭で鳴っていた携帯をとると、聞こえてきたの  
はそんな言葉だつた。

どこか焦っているような、落ち着きのない様子で電話の向こうがわ  
の何者かはそう言ったのだ。

耳から携帯を離して、ディスプレイに表示されている名前を確認す  
ると、そこには芹川結穂と表示されていた。

再び携帯を耳を当て、事情を詳しく説明してもらう。

「花壇の水やりが……何だつて？」

『そ、そうなのよ。今日の当番が私だつたんだけど、急に外せない  
予定が入っちゃつて。出来れば代わりにやつてもらいたいという  
か……。そういうお願いの電話なんだけど……。』

「そうか……。っていうか、なんで俺の携帯の番号知ってんの？」

『ちよちよ、ちよつと！ この間交換したでしょ！？ 覚えてない  
ほどどうでもいいことだつたの……。』

「え、何？ なんていきなり萎はしんでんの？」

『なんでもないっ！ それより、引き受けてくれるの？ くれな  
いの！？』

「おおぅ……そんなに叫ばなくてもいいだろ……。分かったよ、やってやる」

しぶしぶ了解すると、電話の向こう側からは小さなため息が聞こえてきた。

そう言えば、どうして俺に頼むのだろうか。……考えてみると、歌音は予定ギリギリだったし同じ委員会の奴らには頼みにくいんだろぅと予想できた。芹川の性格だ、自分で引き受けておいて同じ仲間にはみつともないところを見せたくはなかったのだろう。

とは言え、休み中に学校か……。

『あ、ありがとね。じゃ、また今度ね』

「ああ、じゃあな」

芹川からは水やりに対する適当な説明を受け、それから世間話をするともなく電話を切った。

ベットから起き上がると、俺の部屋の入口から視線を感じた。

「……………」

ミユだった。こいつはまた……。

「何見てんだよ」

「いえ、別に」

「……………」

よくわからない返答だった。毒を吐くこともなく、この場から去ることもなく。

「どこかに行かれるのですか？」

「ん？ ああ、ちよつと学校にな」

「では、私もお付き合います」

「え……？ 何を企んでいるんだ……………」

「別に何も企んでいないですよ？ そう、何も企んでおりませんよ」  
なんで二回言った？ なんで二回言ったんだよ！？

もやもやする変な気持ちを抱きつつ、俺はミユを学校へと連れて行くことにした。

スィはクーラーの効いたリビングで下着姿で寝ていたので、毛布を



5枚重ねて押しつぶしておいた。

そして今に至るのであった。

校舎裏には、いくつか花壇が設けられていた。花壇のそばにはビールハウスもあり、なかなか植物を育てるには設備が整っているのではないかと思えた。とはいっても、植物に詳しいわけでもないのが、本当のところはどうなのかはわからないが。

花壇にはたくさんの向日葵が太陽に向かって咲いていた。

よくもまあ、こんなにも容赦なく照りつけてくる太陽に向かって背を伸ばせるもんだなあと感じさえ覚える。

人間にとっては暑すぎて大変だというのに。……天使と悪魔もそうかもしれない。

「すごいですね、こんなにも向日葵が……。やはり生命を感じさせるものは美しいです」

ミュは向日葵に歩み寄り、そつと葉に触れる。

その光景が俺にはどうも異質に見えて仕方が無かった。

ミュのことをあまり知らない奴が見れば、花の世話をする美少女のように映るのかもしれないが、俺の目には慈しんでいるミュの姿はどうもおかしなものに見えた。

俺が悪いのではない。ミュの日ごろの行動のせいでそう見えるのだ。だからあれほど普通にしていれば可愛げのある女の子はいないと思う。どうやら神は性格と容姿のどちらをも格別にすることはしなかったようだ。

……『神』という度にあの腹の立つ爺さんが頭の中に浮かぶのをどうにかしてほしかった。

「……どうしたのですか？ 何か私でも共感できるような悩みを抱えているのでしょうか？」

俺は頭を振ってその事柄を追いだすようにして、ミュに返事を出す。「想像通りだ。それより、蛇口は……あった。あれ？ 肝心のホ

「ースが無いじゃないか」

花壇の水やりの方法は芹川から教わった通りにすればよい。ただ、道具をそろえないといけないのだが、ホースが見当たらなかった。芹川が言うには、ホースは蛇口の近くに束ねてあるとのことだったが……。

「確かにホースがありませんね。もしかしたら事務室の方に片付けられてしまったのではないでしょうか」

「その可能性もあるな……。とりあえずビニールハウスの中の植物の世話からしようか、先に鍵借りてきちまったからな」

「それがいいかもしれませんね」

ビニールハウスには簡単な鍵が取り付けられていた。ドアの部分とビニールハウスの骨組みであるパイプを鍵で留められていたのだ。これが必要なのかどうかは置いておいて、さっそくビニールハウスの中に入る。

中は若干しっとりしており、湿度は異様に高いであろうことが体感できた。

辺りを見回すと、さまざまな種類の植物が鉢に植えられていた。

三段の棚に所狭しと並べられていて、天井にはスプリンクラーのようなものも設置されていた。

「なんか……結構すごいんじゃないか？ 設備とか」

「そうですね。私、校舎裏にこんな場所があるなんて知りませんでした」

奥の方まで行くと、簡易スプリンクラーの取扱いについての注意書きがスイッチの横に張られていた。

それを確認し、スイッチを入れる。サアアアアツという音とともに細い雨が降り注ぐ。

簡易スプリンクラーは的確に一つ一つの鉢の上で作動している。

間違っても俺達に降り注ぐことは無かった。

ガウン、と何かが振動するような音がして、雨は止んだ。

先ほどとは見違えるほど植物たちが変わっていた。

雨を受けて元気になったのもあるだろうが、雨の雫が葉や花に付着してそれが太陽の光を反射して煌めいているのだ。

まるで芸術の世界のようだった。生きた芸術、洒落た言葉を使うとそう表現できると思う。

少しの間、俺とミュは言葉を失っていた。

「……本当に、美しいですね」

ミュは表情にこそ出さないが、うつとりとした様子でそう言った。俺は言葉にしなかったが、心の中でそつと同意しておいた。

「じゃ、次は花壇の水撒きかな。俺はホースとってくるから待っててくれ」

ミュは返事をせず、花の様子を熱心に観察していた。俺はそれを見て小さく笑った。

ホースを取りに事務室まで行くには、再びグラウンドの横を通らなければならぬ。

校舎をぐるりと回って、グラウンドの前まで来ると何か異変を感じた。

いつの間にかグラウンドで練習していた野球部、陸上部の姿が見えなくなっていた。

それだけではない、グラウンドの中心が歪んでいる。

夏の暑さで俺がおかしくなったわけでもなく、夏特有の遠くが揺れて見えるあの現象でもない。

擦じれて歪んでいるのだ。

「どういうことだ、これは……」

次に瞬きをした時、俺の見ていた世界は姿を変えた。

空は毒々しい紫色に染まり、学校は廃虚のような造形に姿を変え、葉で生い茂っていたはずの桜の木は枯れ果てていた。

もう一つ。大きな変化があった。

この学校以外がここには存在していなかった。

向こうに見えるはずのビルの群れが見えない。山が存在していない。外界は全て黒で塗りつぶされて、闇に？まれている。

俺はよく分からない閉鎖空間のような場所に飛ばされていたのかもしれなかった。

だとすると、これは悪魔の仕業なのか。この間スイを襲ったような奴らなのか。

俺は拳を握りしめて走った。

急いで校舎裏に戻る。しかしそこにはミユの姿は見当たらなかった。なんとなくは感じていたが、俺だけがここに飛ばされているのだ。もし、悪魔が作った閉鎖空間なのだとしたら、対抗する術を持たない俺はすぐに捕まってしまっただろう。

それ以前に殺されるのかもしれない。

暗いイメージを振り払い、自分を叱咤する。

安全を確保するために周りの様子が見える広いところへ向かうことにする。それはすなわち先ほどのグラウンドへ向かうということだ。もしかしたら元の世界に戻る何かがあるかもしれない。

そう信じて、また走る。

再びグラウンドに戻ると、やはり中心に何かがあった。

青白く光る何かはここからでは何なのかを見分けることはできない。近づいて確認しようと、一步を踏み出しグラウンドの敷地内に入った瞬間、その青白く光る何かが肥大化し、幾何学的な魔方陣のようなものを生み出した。

それはグラウンド全体を覆い尽くし、俺も巻き込まれる。

爆発に似た衝撃に吹き飛ばされ、俺は地面を転がってグラウンドから追い出される。腕が擦り剥けて血が滲んできたが、それよりも俺の目を奪うものがグラウンドには降り立っていた。

そう、俺の目を奪うような者だ。

彼女は所々白と黒が混ざった両翼を、腐敗した左腕と禍々しい右腕を持っていた。

無感情なその眼が、俺を捉える。

想像の上での存在。俺の視線を捉えて離さなかった彼女はまるで、  
そう、まるで。

墮天した天使のようだった

## 20話：肉塊と共に紡がれた証（前書き）

予定より一日遅れの更新となりました。申し訳ございません。  
これからテスト期間となるので、いつも通りのこの10日に一回程  
度の更新となると思います。

次回の更新は12月に入ってからになると思います。

みなさん、応援をよろしくお願いします。

それが作者の頑張りとなります；（すみません）

## 20話：肉塊と共に紡がれた証

墮天使、俺は確かにそう表現した。

まるで天使と悪魔が混ざったかのような存在。明確に墮天使という位置づけがどんなものかは分からないが明らかに天から、神から、見放された者だと理解が出来た。

いや、感覚的に感じ取られたのだ。

「？」

墮天使が何事かを言う。しかし、俺には全く聞き取れなかった。

距離のせいではない、声量のせいでもない。それを言語として聞き取れなかったのだ。

まるでテープを高速再生させたときのようなキュルキュルという音に加え、多少の雑音<sup>ノイズ</sup>。

外国語が聞き取れないのとはまた違うような感覚。人間の中には存在しない音感。人が脳で認知することの敵わない音。

その墮天使が放った音を、人間の持てる音感では言語で当てはめることもできないのだ。

異質。この世界であつてはいけない現象である。

人が理解することが出来ない存在が近くにあるということ。これ以上の恐怖はない。

俺は墮天使から目をそらせないまま固まってしまっていた。

もしかしたら死を覚悟していたのかもしれない。頭のどこかで何をしようと無駄という警報が鳴っている。

「、」

何かを俺に、伝えようとしている？

それが理解できない、感情も理解できない喜怒哀楽全てが混じっているような表情。

ただ、殺気だけは先ほどからヒシヒシと感じられる。

だからこそ動けない。立つことがままならない。

「　　！」  
バチバチバチッ！　と墮天使の右腕が赤黒く染まり閃光を迸らせる。

みるみるうちにその力は球体状になり、天使をそれを頭上に掲げる。俺が両手を広げて抱えきれないような大きな球体は鼓動を始め、黒い閃光を纏わせる。

来る、と思う前に墮天使の手からはその球体が放出されており、俺に向かつて恐ろしいスピードで向かってくる。

大気を切り裂き、周りの砂を巻き上げ粉碎し大地を抉りながら俺の命を喰らいに向かってくる。

「あああああああああああああああああああああッ！」  
ズガアアアン！　と視界が砂煙で覆われた。

身体が引き千切れ、脳漿をぶちまけることは　　なかった。

一陣の風が吹き、視界が良好になった。ただ、黒が視界の一点に固定される。

「な、に、が……？」

自分の身体を見渡す。何事もない。

再び目をあの墮天使に移す。しかし、墮天使の姿が見える前にうちの学校の女生徒の制服が目に入った。

「だ……」

「何してるの、早く逃げるわよ」

座りこんだ俺の手を強引に掴み、彼女は羽を広げ飛翔する。

天使のように輝く真っ白な羽を四枚展開させ、赤黒い空に向かつて飛び立つ。

「うわわわっ……！」

あっという間に学校の屋上へと連れてこられ、俺は再び腰を落とす。足に力が入らないのだ。

俺を助けてくれたのである。彼女の顔を見上げる。

強気な炎を灯す瞳に少しウェーブのかかった肩までの髪、俺が会おうにも会えなかった彼女。



俺の手を引いていたのは空宮杏梨だった。

「そらみや、あんり……？」

「っ……。そうね、私は空宮杏梨よ。　た、……。あなた、どうしてこんなところにいるの」

「どうしてって……知らない、気がいたらここに居て、それであいつが襲ってきて」

「そうだ、あの墮天使はどうなった。すぐにここまで追いついてくることぐらい簡単だろう。」

「すぐにでも俺を殺しにくるのではないのか。」

「それは大丈夫、彼女はあのグラウンドから出ることが出来ないから」

俺の心の中を読んだように彼女は俺に返事をする。

俺はそのことに呆氣にとられ、口を開いたままになってしまっていた。

「みつともない顔。……………早くここから出ましょう」

彼女はそういうと、手を空に向かって掲げ光りの玉を次々と放出して行く。

シャボン玉のようにふわふわと浮かんでは消え、この赤黒い空の色を淡く染めていく。

ガキン！　と何かが外れるような音が響くと、空から一筋の光が差し込んできた。

それは数時間見ていなかった本当の世界の太陽の光だった。

「……………」

彼女は無言で俺に手を差し伸べてくる。掴まれという合図なのだろう。俺はその手をしっかりと握った。

すると向こうもしっかりと握り返してきた。

柔らかな手だった。普通の女の子の手、しかし俺は分かっていた。バサッ、と彼女は先ほどのように四枚の羽を展開させる。

そう、彼女は天使なのだ。何故か大きな衝撃は受けなかった。どこかで分かっていたのかもしれない。

またはこの閉鎖空間で現れたことで今理解しただけなのかもしれないかった。

彼女に運ばれ、俺は空を飛んだ。

下を見るとあの堕天使がやはりグラウンドの中央でこちらを見ていた。

その顔は何かを訴えるような顔だった。だが、言いたいことの内容までは理解できなかった。

俺はその堕天使に恐怖しかなかった。

命を喰らわれるその瞬間、あの体験は一生忘れないような気がする。太陽の光に包まれ、俺たち二人はこの閉鎖空間から消える。

地上に縫いつけられた堕天使はただただ、光のムコウへと飛んでいく二人を眺めるだけだった。

次に視界が良好になった時、俺が見たものは現実世界だった。赤や黒などと言った毒々しい色合いではなく、白や青加えて緑が存在する俺の暮らしていた世界だった。天使に運ばれて戻ってきたこの世界の景色は俺を安堵させるのに十分な効力を持っていた。

再び学校の屋上に着陸し、俺はようやく自分の力で立ちあがる。

目の前には助けてくれた少女、空宮杏梨が立っている。

「助けてくれてありがとうな、えーと。空宮？」

「礼には及ばないわ。そんなことより、あなたはどうしてあんなところにいるのかしらね。気になるわ」

彼女は何か俺と目を合わそうとせず、どこか他の場所を見ながら話を進める。遠くから俺を眺めていた時はあんなにがつつりと目が合っていたのにどうしたというのだろうか。

今は関係ない話だったな。

「いきなり視界が歪んであっちの世界に飛ばされたんだ。特に何かをしたわけでもないし……」

数時間前の俺の行動を思い返してみる。特に問題は無かったはずだ。特殊なことをしたわけでもない、俺はただ水を撒くためのホースを事務室まで取りに行こうとしたただけだ。

ふと、何か違和感を感じる。

「そう、特に問題は無かったというわけね。……何かに触れたのかしら？」

空宮が顎に手を当てながらブツブツと何事かを呟いている。

俺は、違和感を感じていた。空宮に対してではない。自分に対してだ。

何かおかしい、気分が？ いや、呼吸？ 喉？ 口？

瞬間、俺は血を吐き出していた。

「ぐううっ！ おえっ、ツゲホゲホ……。な、んだ……。これ」

視界が霞む、身体のバランスが保てない、屋上の固いコンクリートの床に身体を打ち付けて横になる。

「朝浦陽助？」

空宮はそれを不思議そうな眼で見つめている。いつもの瞳で、だ。慌てるような素振りは見せない、その現象が今ここで起きている、ただそういうことを認識しただけというように眼を瞬かせている。時間が立つにつれてさらに咳は酷くなり、吐き出す血の量も増えていく。

一体何が起きているのか。俺の身体はすでに血塗れだった。

自分の血に浸かり、温かささえも伝わってくる。しかし、徐々に体温は低下して行く。

俺は、死ぬのだろうか。

意味も分からずに。

「うつ、オゲホウエツ！」

ひととき大きな血の塊を吐いた。いや、これは違う？

「な、んだ、これ……？」

霞んだ目でそれを捉えようと力を込める。固体だ、しかし血塗れで何かまでは分からない。

ドクン、と俺が吐いた塊が振動する。肉塊、そう表現するのにふさわしい姿が俺には捉えられた。

ニチャニチャと嫌な音を立てて肉塊が蠢く。縦に亀裂が入り、さらに振動する。

その亀裂が裂け

中から充血した目が産まれた。

それはこの世のものとは思えないような奇怪なもので、気味が悪かった。

肉塊に目がついた得体のしれない生物。そいつは俺のことを凝視している。

目が離せない。血を吐いて死ぬ恐怖より、このまま見つめられているという恐怖の方が圧倒的に上だった。

「あ、……あああ……」

怖い、怖い。

何が俺をそう思わせるのか、頭の中から直接心へ作用するように、恐怖というものが染み渡ってくる。

目が、その肉塊の目が思いつきり開かれた。

ぶちゅ、という音を立ててその目からは血が流れる。

視線を上に向けてみると、黒と、彼女の足が見えた。肉塊を踏みつぶしていたのだ。

「朝浦陽助、あなた死にそうね」

なんの抑揚もない声で空宮は淡々と俺に告げる。それはまるで死の宣告のように。

「おそらくあつちの世界で植え付けられたものかもしれないわね、この化物は。寄生者の内臓を食い散らかし、心臓を乗っ取ってそこに生まれる。のちに口から出て誕生。って所かしら。じゃああなた、

今心臓が無いのね」

意味は分かっても理解はできなかった。それ以前に頭がぼんやりと  
していて物事を考えることが出来ない。

「死なせはしないわ。私がね」

そういうと空宮は陽助の近くにしゃがみ込み、陽助を抱き起こした。

それから息を吸うと、彼女は彼に口づけをした。

唇と唇との距離は0。その時間は5秒間。  
彼らは重なっていた。

そう、まるで何かを紡ぐように、何かを。

## 21話：欠落した結果と要因（前書き）

なんとか今日中に投稿できました。

あと、応援ありがとございます。元気になっております。

もう少しで更新率の方も上がると思いますので、よろしく願います。

最後に、前回（20話）でちょいちょい出てきている『黒』という単語。

アレは何を表しているか、皆さんは分かりましたか？

（ものすごくしょーもないことですが；）

## 21話：欠落した結果と要因

目が覚めたとき、俺は全く見覚えのない天井の部屋に寝かされていた。

体調に問題は無く、先ほどまでの脱力感や痛みはさっぱりとなくなっていた。アレは一体何だったのか。

俺の口。いや、体内から生まれた得体のしれない化物。

そして、どうしてあんなにも空宮は冷静だったのか。

そこで俺は気がついた。いや、記憶が無いこと気がついた。

あの後、口から化物を吐き出した後の記憶が全くないのだ。倒れたのは覚えている、化物と目が合ったのは覚えている。

しかし、その後の記憶がすっぱりと抜け落ちていた。何か、とても驚くべき出来事があった気がするのだが。もしかしたら本当に気絶していただけで、その先の映像というものは無くて当然なのかもしれない。

そんなことよりも、生きていてよかった。

そう安堵すると、向こうに見える白いドア。その向こうから騒がしい声が聞こえてきた。

『陽助さん大丈夫なの！？ 本当に？ 何事もないの？』

『大丈夫ですよ。あの人がそう簡単に死ぬわけがありません。ゴキブリ並みにしぶとい人ですから』

『ミユちゃん……。でもさ、朝浦君は大丈夫だよね』

『そ、そうだ！ 弱ってもらっては困るんだ、朝浦陽助にはお礼をまだし終わっていない！』

おそろくいつものみんな、そこで俺はここが病院だと気がつく。白く清潔感のある部屋、シーツやベットからは病院独特の匂いがする。

カーテンがはためき、窓からは夏の風が吹き込んでくる。今日はそんなに暑くなく、過ごしやすそうな日だった。

バァン！ とドアが開かれてわらわらと四人が部屋に入ってくる。

「お、おう……………」

なんだか今の自分の立場が恥ずかしく、そんな曖昧な返事をしてしまっていた。

「何ですか、以外に元気そうですね」

「陽助さん！ 大丈夫！？……………、じゃなくて大丈夫かおらぁ！」

「朝浦君！ もう大丈夫なの？」

「朝浦陽助！ あの……………その……………」

四人が一斉に話し出し、俺は誰から返事をしていいのかが分からなかった。

でも、なんだかいつも通りで騒がしく、俺は安心した。

「何をニヤニヤしているんですか気味が悪い」

「俺は病人だぞ！？ それにニヤニヤはしていない！」

「そうですか？ 美少女四人に囲まれて王様気分になっていたのでは？」

「そ、そんなことはない！」

「ずずいっ！ とミュがその顔を近づけてくる。

俺は反射的に顔を引こうとしたが、壁に頭を打ち付けてしまう。

「いでっ……………な、何だよ」

「……………空宮杏梨に会いました。どうやら異界に行ったようですね」  
ヒュウツ、と身体に悪寒が走る。あの空間を思い出すと、氷漬けにされたような、そんな感覚に陥る。

異界、とやらの居たあの堕天使。もしかしたらミュなら何か知っているのかもしれない。

堕天使に空宮杏梨、謎が頭の中を支配する。

「ちよつと、天崎さん！ か、顔が近いわよ！？」

芹川が我に返ったようにそう叫び、俺とミュを引き剥がす。

ミュは無表情そのまま離れていき、対して芹川は何故か顔が赤くなっている。

そのせいでなんだか俺は拍子抜けしてしまい、心の氷がすっかり



溶けてしまっていた。

「あ、朝浦陽助！　また女子を誑かして！」

「今のはどう見たってミュから迫ってきただろ！？」

「迫ってきただなんてそんなー。恥ずかしいですー」

「何度も言うがその棒読み止めろや！」

「と、とにかく！」

一度仕切り直すように芹川が横道にそれていった話を元に戻す。

そして目を伏せがちにし、ポニーテールとしてまとめた髪を弄りつつ。

「私があんな暑い日に水やりの代行を頼んだのが悪かった。　熱射病だつて下手すれば命にかかわるからな……。　で、でも、無事でよかった……」

そう言つた。確かに、一字一句間違いはないのだろう。しかしそれは芹川の中で、だ。

俺の心のどこかでは力が働いて、一般人には何らかの都合のいい情報に操作されているのだろうと思つていた。

だが、実際それを目の当たりにすると、驚きに加えて何だか騙しているような申し訳なさというものがこみ上げてきた。

別にだましているわけではないのだ。知られるわけにはいかないから黙っている。

こうした小さな一般人との記憶の齟齬、それが俺にはたまらなくもどかしいものだった。

「朝浦陽助……？　どうした、やはりどこか調子が悪いのでは……」

「い、いや、問題は無いよ。もう歩いてもいいレベル、だと思う」  
先ほどのミュと同じように顔を近づけてきた芹川。心なしか少し顔が赤いのだが、口調はいつも通りだった。日焼けでもしたのだろうか。

「そ、そうか。それなら良いんだが……」

そう言いつつ元の場所にずりずりと戻っていく芹川。一体何なのだ

ろうか。

何故かミュがいつかのように冷たい目で俺のことを射抜いていた。なんか怖い。

少し沈黙が流れたところで、歌音が唐突に言い出した。

「あつ、そうだ！ 私、花持ってきたんだよ。飾ろうか！」

そういうと窓際にお約束のように置いてある空の花瓶を手に取る。

そして花を抱えて……ものすごくバランスが悪そうだ。今にも花瓶を落として割りそうな勢いである。

「ちよつと、美里。手伝うよ」

すかさず芹川が花瓶を持ちあげる。

「えへへー、ごめんね。じゃ、ちよつと水汲んでくるよ」

そういうと歌音と芹川は病室を出ていく。

ボタン、とドアが閉まったと同時にミュはまたも近寄ってくる。

「陽助様、先ほどは訊けませんでしたが……唐突に言います。空宮杏梨に何かされませんでしたか？」

いつものようには毒舌を交えず、真剣な目でそう訊いてくるミュ。

視界の端の方ではスイがこちらをじつと見ている。

ミュは無表情でその質問の真意が読み取れず、俺はしばしの間困惑した。

「なんで、そんなことを？」

「いえ、特に意味はありませんが……。吐いた化物のことが気にかかりましてね」

「……………」

「あの心臓を喰らう化物に取りつかれる原因として、挙げられるのは一部の天使が使える術式にかかることなのです。アレは神罰を下すために使われる術式で、普通の天使には使うことができません。燐天使かそれ以上の階級でなければ使えないのです。ですから、私以外の天使に接触したことがあるのは空宮杏梨だけだったので訊いてみたということです」

神罰、燐天使などと言った俺には理解できないあろう言葉が出てき

てとまどったが、要するに俺は何者かの術式とやらを受けたということなのだろう。

しかし、俺は空宮が何かしたという風には考えられないのだ。何よりも、あの異空間から助け出してくれたのは空宮なのだ。わざわざ助け出して術式をかける意味があるのか俺には分からない。おそらく、ないだろう。

それに俺は直感らしきもので彼女はいい奴だと思っている。言動こそ冷たいように感じられるが、どこか瞳の奥には優しさのようなものが垣間見えた気がするのだ。

「多分、空宮は関係が無いと思う。勝手な直感だけど」

「そうですか。……あてのない勘を前面に押し出す辺り頭の悪さが露呈されていますがまあそれはいいでしょう」

「なんだなんだ、綺麗に毒を盛ってきたぞ？」

どこかミユは遠い目をして、俺のことを眺めるのであった。

しばらくすると話すことも無くなってきて、みんな帰っていった。まった。

まあ、俺としてはそんなに長々といってもらっても対応に困るというか慣れないことだから羞恥心というものが大きく膨らんできたのだ。だって病院着だし。

一応今日まで入院ということで、明日には退院できるそうだ。そのことを親に連絡したのだが、特に反応はなかった。普通、息子が入院したら駆けつけてきそうな気はするんだが……。

それにしても、よくあの状態で死ななかったと思う。おそらくは、……いや、多分だが空宮が何とかしてくれたのだとは思っている。

しかし、ミユは少々空宮のことを疑っているかのようなことを言っていた。

俺を参らせた術式は天使専用である、と。

俺が引つかかったのは天罰、というところである。

誰もが思うだろうが、天罰というものは何か悪い行いをした者へのペナルティのようなものだ。

それが俺にかかったということは、俺は悪いことをしたのだろうか。それとも、天罰という俺の認識がおかしいだけで、本当は誰にでも適用される一種の技のようなものなのか。

いくら考えようと答えは出ない。

なので俺は違和感のある唇に指で触れ、それから目を閉じる。

違和感のある唇を何度もなぞりながら。

## 22話・出来るウエイトレスと副産物（前書き）

少し早めの投稿となりました。

忙しさも抑え気味となってきたので、がんばっています。

一週間に一回の投稿ペースにできるかも……？

## 22話：出来るウエイトレスと副産物

次の日、無事に退院した俺は真つ先に学校へと向かっていた。家に帰るよりも先にこちらに足が向いてしまっていたのである。理由は分からない。

ただ、学校へもう一度行けば何か分かるかもしれないといった直感のようなものを感じたからである。

あくまで直観である。勘違いである可能性は大いにある。

それでも俺は、進まずにはいられなかった。

何か、引がかかることがあったから。

学校の校門をくぐると、蝉の鳴き声が一層大きくなる。うちの学校の校内にはたくさんの木が植えられている。おそらくそれらの木々にとまっている蝉が大合唱を始めたのだろう。

一昨日のようにグラウンドへ向かう。どうやら今日はサッカー部が練習をしているらしかった。

特におかしな点は見当たらない。

空を見上げても見えるのは少々の雲と太陽のみ。

内容が見えない直感はどうやら外れていたようだった。内容が分からないのだから、何が直感の結果となりうるのかさえ分からないのに、俺は外れた。と感じていた。

俺はもしかして空宮杏梨を探していたのかもしれない。ただ、空宮に会ったとして何を話すのか。

助けてくれてありがとう？ 俺に術式をかけたのはお前か？ 何者なのか？

質問、疑問、そんなものしか湧いてこなかった。多分俺は、空宮のことが気になっている。

廊下で目が合った時、一定の距離をもつてして彼女と対面した時。何故か彼女は微笑んでいた。瞳の奥の光は柔らかく優しくかった。

しかし、異界とやらで会った時、学校の屋上まで運んでくれた時。

彼女の声や瞳は冷たかった。

その違いは何なのか。釈然としない。

まともに会話をしていないから、いつだって一方通行だったから。だから俺は彼女が何なのかを知らない。

ゆえに、気になっている。

これは恋とか愛とかそんな感情ではないと、そう考えている。

歩を進め、校舎の裏に回って花壇がある場所へと俺は向かった。

今日も変わらず向日葵は太陽に向かって背を伸ばし続けていた。

「あつ、朝浦陽助!？」

水撒き用のホースを取り落とし、素っ頓狂な声をあげたのは制服姿の芹川結穂だった。

ざばざばとその間にもホースからは水が流れている。

「よう、今日も水やりか」

「そうだ、というかなんでここに居る!？」

「そんなに驚くことかそれ？　俺はただ……、なんだろう。暇だったから」

「暇だったから会いに来てくれたのか……?」

芹川は何事かを小さな声で呟いていた。もちろん蝉の鳴き声に遮られて俺には聞こえない。

「何？　なんか言ったか？」

「な、なんでもない！　それより、出歩いて大丈夫なのか？　退院したばかりではないか」

「いや、体調に問題はないよ。　ああ、そつえばお見舞いありがとうございます」

「べ、別に私は何もしてない。それに美里が行こうというからついて行っただけで本当なら私は委員会の仕事で忙しくて行く暇などなかったのだがやはりこれは私が頼んだことによる作用で朝浦陽助は入院してしまったのだと考えると仕方なく本当に仕方なく美里につ

いて行つた、それだけだからな！」

「はは……、とりあえずありがとう」

芹川ははあはあと肩で息をすると、後ろを向いて固まってしまった。もちろんホースは拾われずに乾いた地面に水をまき散らしているままだった。

「おい、水出つばなしだぞ。　　というかホース拾わないと……」

俺はホースを掴み、向日葵の方へと向ける。

花に水をやるときは花本体に水をかけがちだが、本当はそれではだめなのだ。

いや、普通に考えれば分かる話なのだが、根元に向けて水をやらなければならぬのだ。しかし、ここにもちよつとした注意点があつて、土を挟らない程度に水を霧状にしてかけてやるのがいいのだ。でもまあ、このホースでは少し無理がある。

なのでホースの先を指で潰して微調整をして水を何とか霧状にしないとイケないのだ、これがまた難しい。

「ん……んん？　難しいな」

思考錯誤しているうちに芹川は金縛りが解けたのか、赤い顔をしてこちらに向かつてきた。

ん？　赤い顔？

「あ、朝浦陽助……あのな。　　えっと、その」

「大丈夫か？　　なんか顔が赤いぞ。　　もしかして日光にやられたか？　　それなら日陰で休んだ方が」

「ち、違う！　　だから、朝浦陽助が体調を崩して入院してしまったのは私のせいでもあるわけで……」

「芹川？」

「なので、その……。　　お詫びと兼ねて花壇の水やりのお礼がしたいのだ！」

芹川は胸の前で両手を握りこぶしにし、ボクサーの構え……。　　とはちよつと違うポーズで叫んだ。

もちろん、顔は赤いままで。



俺が芹川につれてこられたのは駅近くの少しお洒落なカフェのような場所だった。

窓際の席に二人座り、注文が来るのを待っていた。

その間、何故か会話は一つもなかった。

「……………」

「……………」

静かな店内と同様に無言になってしまい、店内のBGMであるオルゴールだけが何度もループしていた。

芹川が何故か異様に緊張している面持ちだったので、自然と俺も口数が少なくなってしまったのだった。

これは……………何だ。

しばらくして注文したアイスコーヒー二人分が机の上に並ぶ。それに加えて何故か小さなパンケーキが二人分並べられた。確か俺たちはこんなものを注文していなかったはずだ。

それを見た芹川は顔を上げ、ウェイトレスに顔を合わせる。

「それはサービスです、ウチの店では男女のカップルに無料で店長手作りのパンケーキをお渡ししています。どうぞ召し上がってください」

につこりとほほ笑むウェイトレスに対して芹川はボバボンと顔を赤くし、立ち上がる。

「べっべべっ別にカップルじゃないですよ!？」

「あら、でもお二人さんの初々しい感じは成り立てのカップルに見えましたよ?」

「でもちがうんです!」

「では、将来そうなるようお願いを込めまして、これを二人で頂いて下さい」

そういうとウェイトレスはお辞儀をして俺達の席から離れていってしまった。

あのウェイトレスさん……できるっ!?

そんな感想を抱いて考えまいとしていた俺に芹川は質問を投げかけてきた。

「わ、私たちがカップルに見えるそうだ……。朝浦陽助はどう思う……?」

語尾がだんだんと萎んでいっているのが分かった。

アイスコーヒーのストローをカラカラと回し、芹川は上目づかいで俺を見る。

「どう思っつて……。特には」

「そ、そうか……。はぁ」

見るからにテンションの下がった芹川。こいつはさっきからどうしてしまったのだろう。

「というか、芹川は迷惑じゃなかったか? 俺何かと恋人扱いされて」

「こっ……恋人おっ、……。わ、私は……っに」

「ほらさ、俺の方は構わないんだけど。 芹川は……」

「か、っ構わないのか!？」

「な、何だよいきなり……。 芹川には好きな人がいるかもしれないから迷惑じゃなかったかって話で」

「そうか、構わないのか……」

「あれ、聞いてます? 芹川さん?」

「ふふふふ……」

多少壊れてしまった芹川を横目に俺はパンケーキを一口食べてアイスコーヒーを飲んだ。

なかなか美味い。

「それじゃ、またな」

そう言つて芹川と別れたのは、一時間後のことだった。

日はすでに傾きつつあり、まさに夕方と言つた感じだった。駅近くの建物は全て茜色に染まつており、帰宅途中と思われる学生やサラリーマンなどが闊歩していた。

そう言えば、と思います。今日は何しに学校へ寄つたのだったか。空宮杏梨を探すためではなかったのか。しかし、彼女はどこにもいなかった。当たり前だ、夏休みなのだから。

そうすると、学校が始まるまでの残りの夏休みの間、その長い間ずっとお預けを食らうのだろう。

何に対してのお預けなのか俺には少し覚えが無かったが、なんだかモヤモヤする。

そんな事を考えながら自宅へと向かう道を歩いていたら、見知らぬ青年に声をかけられた。

黒の半袖シャツに、これまた黒っぽい色のジーンズを履いた男である。耳には銀の髑髏が光っており、それでいて髪の色は普通に黒だった。

「ちよつとすみません、この辺の住所つて教えてもらえるか？」  
疲れているのか、少しぶっきらぼうな言い方で俺に訊いてくる。

旅人や旅行者には見えなかった。荷物を何一つ持っていないし、見えているのはジーンズからはみ出している長財布だけだった。

「いや、違うなあ。　この場所、そうこの場所を教えてほしいんだけど」

カサカサに乾いた紙のようなものに地図が記されていた。しかし、それに記されていたのは日本語でもなく英語でもなく、もっと他の何か。読み取れそうで読み取れないような、文字であることは理解できるのだが、点字のようにも見えなくはない何かだった。

「えつと……、外人さんですか？」

「え？」

「いや、だって。これ、外国語、ですよ？」

「へ？ …… あつ。少年！ 俺は今、急に用事を思い出した。丁寧に答えてくれて感謝、では！」

何を思ったのか、ぐしゃりと紙を握りつぶしてから青年は額に冷汗を浮かべ、駅の方角へと走っていつてしまった。

道の真ん中に立ちつくす俺はただ、口を開けてぼんやりとしているしかなかった。

なんだ、なんなんだ？

「用事って……道に迷ってたんじゃないのか？」

そんな陽助の独り言は町の雑踏の中に消えていくのであった。

## 23話：海へ向かうそのさなか（前書き）

なんとか投稿できました。

一週間に一回ペースでも行けるかも……？

### 23話：海へ向かうそのさなか

病院から退院して一週間は経ったであろう日のことだった。

これまでの毎日ならだらだとテレビを見たり、ゲームをしたりして過ごしてきた。もちろん、課題は一つも片付いておらず、やるうやろうとは思うのだが、行動できていないのが現状。

これは、後々日もあるじゃないか、という自分の中での勝手な安心感のせいである。

踏ん切りをつける一歩目というのは何事に対しても大変なことだ。そんな事は分かっている。いや、分かった振りをしているのではないか？

これは課題を片付けるといったことのほかにも言えることである。それでも俺は決心を付けられていない、一番難易度の低い選択であるにも関わらず。

今に始まったことじゃないんだけどな……。

と、そんな自分の脳内感情を垂れ流していると、携帯電話が震えた。ディスプレイには歌音美里、と表示されており、俺は何のためらいもなく電話を取った。

「もしもし？」

『もしもし！ おはよう朝浦君、今日はすごくいい天気だよねっ！ こういう日って海行きたくなるよね、というか一学期最後の日に行こうって約束したよね！ ということで今日行こうね、ってかそれも決めたよね！ だから駅前集合だからね！ ミユちゃんとスイちゃんにも言っておいてね！ じゃね！』

一気にまくしたてるように言いたいことを全部吐き出した歌音は俺の返事などろくに聞かずに電話を切ってしまった。もちろん俺は棒立ちのまま頭が真っ白になっていた。

無呼吸であんなにもはしゃいで話す歌音は初めてだった。というか何が楽しくてそんなにはしゃいでいるのだろうか。……いや、みんな

なと遊ぶのが待ちきれないのだろう。

そんな純粋な歌音の心に苦笑を浮かべつつ、部屋から出る。  
リビングには美しい姿勢で椅子に座っているミュがいた。　どうやらニユースを見ているようだった。

俺の登場に気がつくと、クルリと振り向いてじつと俺を見つめる。  
朝からすでに着替えて私服のミュが俺の家に居るということに何故か違和感を感じる。

これはその、同棲と、そう言いかえられる何かを感じさせるようなシチュエーションだった。

視線をそらさずにじつと見つめてくるミュ。前にも言ったかもしれないが、ミュは毒を吐くことと性格を除けばこれ以上ない美少女だと思う。

現に、クラスの男子の視線や好意を集めているわけだし、先輩方にも一目置かれているらしい。

これは歌音情報だ。

「な、なんだよ……」

俺は思わず上ずった声を出してしまっていた。

これじゃあ何か、俺は何か緊張しているみたいじゃないか。そんなことはない、目の前に居るのは毒を吐き散らす天使だ。

「いえ、先ほどニユースで見たコンビ二強盗の似顔絵とそっくりでしたので」

「のでなんだよ!?　何か、お前は俺が犯人だとも思っているのか、っていうかそれ以前に犯罪者面だっけ言いたいのか!？」

「両方です」

「なんでだよっ!　前者は違うだろ!」

「後者を否定しないところに私は感動を覚えました」

「畜生!　なんで朝から罵られなきゃならないんだ!」

「朝からうるさいですね」

「お前のせいだよっ!」

ミュが来てからというものの、朝は大体こんな感じだった。

人が増えて賑やかになった、というよりは騒がしくなった、と表現する方が正しいだろう。

幸いにも俺の部屋の左隣には人は住んでいないし、右隣の人は朝早くから仕事に出ているので迷惑はかかっていないと思う。ミユはそれすらをも計算してやっているようでなんだか怖い。

だから、どれだけ騒ごうと朝のうちは迷惑はかからないのだ。

「ふああ……おはよ」

寝ぼけ眼を擦りながらリビングに現れたのはスイだった。

何故かいつものようにパジャマは着崩れ、ズボンはきわどいところまでパンツと一緒に下がっていた。

見た目はまんま休日の小学生、というレベルだ。しかしこいつは、れっきとした悪魔なのだ。

「おいお前……。ちゃんと着替えてから部屋を出るようになっていつも言ってるだろ」

「ひうつ！　なんでそんなに怖い顔するんですかあ。……見てる、私のことをみてますう！」

まるで凶悪犯罪者が獲物に忍び寄るかのような構図。俺は全く悪くないというのに。

「やはりあなたが例のコンビニの……」

「違うつつうの！　そんな事よりお前ら、歌音から誘いの電話があったぞ」

強引に話を捻じ曲げて、これ以上被害を拡大させないようにする。いつまでもこんなことを続けていたらおそろく日が暮れてしまうだろう。

「海の件ですか？」

「そうだ。……んで、お前ら水着とか大丈夫なのか？」

ミユ達がこの夏休み中に買い物に行ったということは聞いていない。もしかしたら、俺が入院していた間に買っていたのかもしれないが、一応聞いておく。

「変態ですね」



「何故だっ！俺はただ水着の用意は出来ているかと聞いただけだぞ！？」

「いえ、分かつてはいたのですが。……やはりその顔で仰られると」「すげえ貶しかた！？俺はもうライフゼロですが！？」

「あ、あわわわっ。 ミユちゃん！だから何度も言っけど陽助さんはカッコイイよっ！？」

デジャビュ。時が止まった。

「えっ？」

「え？」

「あっ」

なんかこの展開は前にも見たことがある気がする。

「とっ、とりあえず、各自準備して来い。後でまたリビングに集合な」

俺のこの言葉に反対する者はいなかった。

海に行く用意を終えてみんなが集まったところにはすでに太陽は容赦ない日差しを降り注がせていた。

それをカーテン越しに感じながらも俺は今日の海を少し楽しみにしていたりした。

「さて、戸締りもしたことだし。……行くか」

そう二人に呼び掛けて、玄関をでた。

むわり、と夏特有の熱気が身体を取り囲み、熱中症へと誘ってくる。そんな暑さに顔をしかめながらも、とりあえずエントランスまで降りて最寄りのバス停まで歩く。

歌音と芹川はおそらくバスの中で合流できるはずだった。

バス停にたどり着き、時刻表を確認すると後5分ほどで到着するらしかった。それまでの間暇なので、天使と悪魔を観察することにした。

ミユは白いワンピースに身を包み、足元にはお洒落なビーチサンダルをすでにつっかけていた。

肩には橙色をしたトートバックをかけていた。おそらく荷物はその中なのだろう。

その姿はまさに夏の美少女。表情に変化が無いのは少し惜しいが、それでも美少女である。

「何を見ているんですか、警察に通報しますよ？ 間違いなく捕まりますね（笑）」

毒を吐かなければ。

対してスイは黒の半袖Tシャツにショートデニムを合わせ、こちらでも可愛らしいサンダルを履いている。

肩にはプールセットを担ぎ、それはまるで学校のプールに遊びに行くお子様のような格好だった。

「なっ、何見てんだ！ ぶ、ぶぶ……ぶっ殺すぞ!？」

今日もまたキヤラづくりに励んでいるらしい。

俺はあまり巻き込まれないようにとスイから視線を外し、真夏の太陽を見上げる。

眩しい。あまりにも輝きすぎていて、しかしそれでいて綺麗なブルーの空とはしっかりと調和している。

太陽と空。これほどまでに互いを引き立てている組み合わせがあるだろうか。

「っ!？」

ズキン、と頭の奥が痺れた感覚がして、立ちくらみを起こす。かろうじてバス停に手をかけるが、足が震えていて立てない。

「陽助様？ どうかされたのですか」

俺の異変に気がついたミユが、近寄ってくる。トートバックから水筒を取り出している。

痛みは一瞬だった。先ほどまでの足の震えも収まり、今の出来事が嘘だったかのように俺の体調は元通りになっていた。

「いや、……大丈夫。 なんだ、今の」

自分でも理解できない出来事に困惑していた。また何か呪いのようなものにかけられたのだろうか。

それにしても唐突だったし、痛みはもうない。

そんな事を考えていると、向こう側からバスがやってきていた。

「今日は止めておきますか？」

ミュがそんなようなことを言ってきたので俺は首を横に振った。

「や、ただの立ちくらみだったから大丈夫だ」

そういうことにしておく。

バスのドアが開き、乗客が次々と降りていく。その中に見知った顔、というより見たことのある顔の者がいた。

前に道を聞かれたあのおかしな青年である。

「おっ」

「あっ」

目が合ってしまった、そんな声を出してしまう。対して知り合いでもない仲なのだが、彼はにひーと笑って。

「久しぶりだな少年。美少女二人も連れてお出かけか？」

どこかからかうような声色で俺のことを見据えつつ言ってきた。

初対面に近いはずのこの人はなかなか失礼ではなからうか。しかし、そんな事は顔には出さない。

「いえ、……………まあ」

「そうかそうか！ 少年は青春を謳歌しな、では」

シユタツと敬礼まがいモノマネをして青年は去っていった。向かっていくのは俺達が来た方向だった。

そんな彼を目で追っていると、バスの窓から聞き覚えのある声が聞こえた。

「おーい、朝浦君。ミュちゃん、スイちゃん！ こんにちはー」

歌音だった。頭には水中ゴーグルをすでに付けているという徹底ぶり。どれだけ海に行きたいんだあいつは。

そんな歌音の姿に苦笑しながらも、俺はバスに乗り込む。後ろからミュが付いてきて、スイは遅れて階段を上がろうとし、脛をぶつ

けていた。

「あ、朝浦陽助……。おはよう」

「こんにちわ、だけどな。芹川」

何故か超絶小声で話しかけてくる芹川に突っ込みを入れ、俺は席に座る。

アレ？

「なんで芹川こっちに席移ってきてんの？」

俺のとなりにいつの間にか芹川が座っていた。さっきまで歌音の席の隣に居たはずだ。

チラ、とミュとスイがこちらの動向を窺っている。なんだこれ。

「いや、これは、その、アレだ。そう、アレだ」

ほとんど代名詞で構築された台詞に俺はうん？ と適当に相槌を打つことしかできなかった。

と、そこに。

リクライニングシートが全力で俺に向かって倒れてきた。

「うばあっ！」

自分の席と前の席に挟まれて苦悶する。なんだこれ、なんだこれ！？顔を傾けるとミュがリクライニングシートに寝そべっていた。というかこれ、そんなに倒れるもんだったか……。！？

「あら、朝浦様。大変苦しそうですね」

「おま、おまつ……」

ギツ、とリクライニングシートを元に戻したかと思うとぐるりっと席を回した。

二人掛けの席が二つ向き合うようになり、電車で見えるようなパーティー座り（勝手に命名）になった。

バスにこんな機能が付いていることは俺は知らない。どう考えてもおかしい。

「お前ら何を……。おう！」

ズビシッ！ といつの間にか現れていたスイが俺に指を突きつけながら言う。

「そうはいかせねーぜ！ ハッハッハ！」  
高笑い。幸いにもバスの中には俺たち以外は誰も乗っていないかった  
ので、迷惑がかかることはなかった。

だがしかし、俺にはミユとスイの行動の意味が理解できなかった。  
もちろん、俺の席の後ろで笑いを漏らしている歌音のことはなおさ  
らだった。

24話：水着披露で疲労困憊（前書き）

遅くなりました！

## 24話：水着披露で疲労困憊

バスに揺られること数時間。中心街から離れて郊外までやってきた俺達の目の前には青い海が広がっていた。

俺達の住む町は内陸に向かって発達しており、沿岸部は田舎……という表現もおかしいのだが、あまり人が住んでいないのである。観光客用のホテルもなければ、コンビニだって数キロ歩いたところしかない。移動手段はバス以外にはない。

だから俺達が目的としていた海は静かで綺麗で、最高のロケーションなのだ。

言い換えるなら穴場とでもいうべきなのかもしれない。しかし、海の家は存在していない。そこだけが少し不満なところであった。代わりに簡易更衣室のようなものが存在している。ロッカーが無いという意味のわからない構造をしているのだが、着替え場所があるだけまだましな気がする。

「海だーっ！」

目を輝かせた歌音はいつになく元気なスイと共に砂浜へ走りだしていつてしまった。

後ろではやれやれと芹川が肩をすくめ、ミユは眼前の海をぼーっと眺めていた。

流石夏休み中というべきか、自分たちの他にも海水浴に来ている人は多かった。

家族連れ、カップル、友達大勢と……たくさんの人が集まっていて賑わっていた。

「とりあえずこの歌音が持ってきたパラソルを立てようか」

「そうですね。位置的には海から近すぎず遠すぎずと言った場所がいいと思われるのですが……。そんな場所はほとんどなさそうですね」

ミユが隣に立ち、場所取りにちょうど良い場所を探してくれたのだ

が、やはり人が多くそんな場所は無かった。

「後ろの方で妥協しましょう。 朝浦様、行きますよ」

歌音たちが放りだしていった鞆やら何やらをミユは回収し、俺の足を歩いて行く。

はて、ミユはこんなキャラだったのだろうか。人が忘れた荷物などは燃やしてしまうような性格の持ち主ではなかっただろうか。いや、冷静になって考えてみると、俺以外には普通かそれ以上の態度で接している。差別というか区別されていた。

嫌な新発見に苦笑いしつつもパラソルを砂浜に突き刺すだけの簡単なお仕事を請け負った。

はしゃいでいた歌音とスイが一度戻ってきて、水着に着替えてから最集合ということになった。

パラソルを置き去りにすることに少し抵抗を覚えたが、パラソル単体を盗む奴などいないだろうという歌音の発現に渋々了承し、俺も簡易男子更衣室へと向かった。

というか、歌音は早く遊びたかっただけなのではないだろうか。

簡易男子更衣室のなかは薄暗く、光を発するはずの蛍光灯3本のうち1本がこと切れていた。

外装のボロさとはかく、中も結構大変なことになっていた。ロッカーは存在しないのでそれなりに空間はあるのだが、なんといったらいいのかただの小屋のような感じだ。

そして床はプールサイドでよくみられる水を弾くような素材のアレ。詳しい名称の方は俺は知らない。

なんとか着替えると、等身大の鏡があったので自分の姿を確認してみた。

顔……は見る必要が無いので、身体の方をしてみる。

やっぱり全然鍛えていないからか、よく分からい体型になっていた。痩せ過ぎでもなく太つてもいなく、筋肉が付いているわけでもない。中途半端な身体だった。



改めて日々の墮落した様子を直視させられるていうような感覚だった。

砂浜に出て、一度歌音の parasol の元へと戻る。　少しして、向こう側から俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

「朝浦くん！　お待たせい！」

「あー、……おうつ！？」

元気よく走ってきたのは歌音だった。　タンクトップビキニ、略してタンキニと呼ばれるであろう水着を着用していた。上はキャミソールのようになっており、下にはショートパンツを履いていた。いかにも歌音らしい水着だった。

「……………」

歌音に続いて赤い顔をして手を組んだりそれを解いたりと忙しく動いていたのは芹川だった。

彼女は少し大胆な黒のビキニで、周りの海水浴に来た人たちの注目を集めていた。

それは芹川の隣に居るミュにも言うことで、ミュは白いパレオとよばれている者を腰に巻いていて見る人が見れば、お嬢様のようにも見えるくらいだった。

そして、俺の視界の端でちよろちよと動いている悪魔の子は……。

「おい」

「なっ、なんだこのやろー！　私に見惚れたかつ！」

少し照れたような様子でそんな事を言ってみせるスイ。もちろん、可愛い可愛いのだが。

ベクトルが違う。何か違う。全くの反対方向を突っ走っているのか、それともその選択は正しかったのか、スイはお決まりのパターンのようにスクール水着を着ていた。

「お前は……また。なんてモノを」

「ええっ！？　だってミュちゃんが『これが似合いますよ』って！　いや、間違っではないんだ。似合っているんだが、それは可愛いとかいうよりも見た目の年相応に似合っているということなんだ。そ

の前になにかがおかしいとスイには気がついてほしかった。  
というより、勉強をしっかりとしてほしかった。

「ミュ……」

「朝浦様が思っている通りの結果がこれです」

「もう何も言うまい」

呆れて溜息しか出ない俺に対して、歌音は何故か興奮気味にスイのことを褒め称えていた。

「流石スイちゃん！ 変化球で攻めてくるねっ。確かにそういう

のが好きな人もいるもんね！」

何か不吉なことを言っているような気もするが、俺は巻き込まれないように距離を取っておく。

軽く準備運動をしてから、俺はあることに気がついた。

「そう言えば、荷物とかはどうしようか。誰かが見張り番するわけか？」

そうなったら一人がここに残ってしまうこととなり、みんなでは遊べなくなってしまう。

他の海水浴客は乱雑に放置しているところもあったが、俺は少し心配だった。

「そうだねー。どうしようか……」

歌音もそこまでは考えてはいなかったらしく、色々と模索していた。しかし、そこにミュが。

「いえ、私が少し細工しておきますので、大丈夫です。みなさんは気遣うことはないですよ」

明らかに何か意図を込めた言い方でそんな返答を返してきた。

ああ、まあそんな事だろうとは思っていたけどね。

歌音と芹川をとりあえず先に行かせ、俺はミュに近づく。

「お前、」

「ちよつとだけ卑怯なことをしますが、構いませんよね？」

「……駄目っていつてもやるだろお前」

ブウン……とミュの手から藍色の光が放たれると、俺達の荷物を

包みこんだ。天使の術を使っただろう。

だが、ここでまた問題を見つけて俺はミュに聞く。

「ところで質問なんだが……今やったこの術があるだろ？ ……誰かが盗もうと触れたらどうなるんだ」

恐る恐るミュの横顔を見る。いつもと変わらない無表情がそこにはあった。しかし。

「腕が半ば吹き飛びます」

「危なすぎるだろそれ!？」

そんな恐ろしいことを言っていた。こんな海水浴場で腕が引き千切れるような悲惨な事故があつてたまるかっ！

「嘘です。私たち以外の者が触れた時に感知できるようにしただけですので」

「だ、だよな。天使はそんな怖いことしないもんな？」

そんな俺の何気ない発言に対してミュは。

「……時には厳しい罰も下しますけどね」

そんな事を言っていた。俺は聞かなかったことにした。

久しぶりの海は新鮮さが満ち溢れていて、若干開放的な気分になりながらも楽しんでた。

俺はあまり泳ぎが得意なほうではないが、それなりには泳げるのでまったくもって無理だとかカナヅチだとかではない。しかし、それでも普通よりは劣るのだ。

ザバザバザバと縦横無尽に泳ぎ回る歌音を見てそう思ったのだ。いや、アイツは普通ではなかった。

運動もできて勉強もそれなりに出来る。歌音はそういう奴だった。ぐぼっ、と歌音が水面から姿を現した。俺の目の前で。

「どーかしたの、朝浦君？」

「お前……現れ方が心臓に悪い」

ゴーグルを付けたままきょとした顔を向けられる。いつもの小さなツインテールは下ろしていて、普段とは違った印象を受ける。

「い、いや……なんでも、ないけど」

「んー？」

歌音にドギマギしてしまっている俺がいた。やはり普段と違う姿を見せられると、調子が狂うものだ。

そう言えば、さっきから周りの人の視線を感じる。

バツと振り返ってみる。サツと視線を逸らされる。

遠巻きにこちらを見ている人が大勢いた。それはそうだ、ここには黙っていれば美少女が揃っているのだから。その中で俺が浮いているということは言うまでもない。

『アレヤバいよな、可愛い。……でも、あの男超怖え』

『一夫多妻制ってヤツ？』

『一国を築き上げてるよねー』

周りから漏れる声。いや、聞こえてるんですけど。

というか、分かってはいたのだけれどテンションが下がらないわけが無かった。

「どうかしましたか、朝浦様」

俺の不自然さを察してか、ミュが声をかけてきた。

「どうもこうも、周りの視線が痛い」

「いえいえ、朝浦様の視線の方が痛……じゃなくて厳しいものがありますよ？」

「あのな、それは全然言い換えになっていないと思うんだ」

「私の清廉潔白な心の声が聞こえるのです。どんなに苦しんでいる方がいても、嘘についてはいけないのだと」

「じゃあ黙ってればいいだろ！？」

「それだと面白くないじゃないですか。あ、間違えました」

「わざとだろ？ そうなんだろ、っていうかそれ以外の選択肢が見

当たらねえ！」

俺の咆哮に対し、周りの人がすごい勢いで遠ざかって行くのを感じだ。

「良かったですね。これで視線は減りましたよ？」

「……………」

俺は天使にいじめられているらかった。

## 25話：スイとの時間（前書き）

大晦日ですね。今年最後の更新です。  
来年はもっと更新率を上げるよう頑張りたいと思います。

## 25話：スイとの時間

しばらく一人で海の中を泳いだ後、歌音が持ってきたパラソルの下に戻り少し休憩していた時のことだった。

何やらスイが一人離れた場所で、こそこそと何かをやっているようだった。

腰まで海に浸かり、手は前にピンツと出している。

アイツは何をやっているのだろうか。気になった俺はスイの元へと向かうことにした。

「むゝ……むむむ」

唸り声を上げながら怪しげに手を交差させるスイ。

「何やってんだお前」

「ひゃうつ！？ な、なんだこのやろー！ びつくりするだろ」

「俺は未だにキャラを作り通しているところにびつくりだ」

「うるさいうるさい！ それより何か用ですか……？」

「……いや、何をしているんだろうかと思っただけ」

俺がそう訊くと、何故かスイはばああつと顔を輝かせて俺に向き合ってきた。

スクール水着つて所をどうにか改善してほしいところではあるが。

「よくぞ聞いてくれましたね、陽助さん！ これはですね、こうやって……」

スイが再び手をまっすぐに突き出すと、掌から少し離れたところに浮いた水球を発生した。

その水球は微妙に回転しているらしい。そうすることで球状に保っているのだろうか。

つてそういうことじゃなくて！

「お前こんなところで何をしてんだ！」

「えっ……？ 海なんだからお水で遊んだっていいでしょ？」

「違うだろ、普通の人間はそんなこと出来ないんだからすぐにやめ

なさい」

そう言つて俺が水球に触れると

「あつ、触っちゃだめですよお！」

バチン！ とものすごい勢いで腕が弾かれ、その慣性に身体ごと持って行かれる。

俺の身体は数メートル飛び、背中から思いつきり水面に叩きつけられた。

「あわわわわっ！ 陽助さん、大丈夫ですかあ」

地上で走ると何ら変わりのない速度でスイはこちらに歩み寄ってくる。

俺は鼻に入つた海水と格闘しながらも起き上がって辺りを見渡した。よし、おそらく誰も見ていない。

「もう、普通に球体なんて作れるわけないんですから力が加わっているに決まつてるでしょ？」

俺に手を差し伸べるようにしてスイは得意気にダメな子を見るような目で俺を見る。

あれ、俺は今スイに説教されているのか？

棒立ちの俺に見上げるようにしてスイは何事が難しいことを話していた。

「ふはははっ、やっぱり馬鹿だぜお前！」

調子に乗ってきたスイは、いつもの悪魔キャラの口調になっていた。

「これだから人間は駄目なんだ！ もつと水の使い方を考えないといけない、ただ飲むだけとかお料理に使っただけとかじゃもったいない」

ついに人間全体の集合を馬鹿にし始めた。

こいつには制裁を下してやらねばならん。そう思った俺はすぐに実行に移せる案を思いついた。

「ほう、俺達人間を馬鹿にするのか。よし、ではこれを喰らえ！」

俺は水中に手を潜めた後、両手を筒状にするように合わせてギョッと押し出した。



海水が綺麗に放物線を描き、スイの得意気に笑っている可愛げのある顔に直撃した。

「ぶへっ、何するんで……あっ、何すんだデメエ！」

一旦弱気になったものの、持ち直したようだった。

「馬鹿め。これは朝浦家に伝わる手のみで水鉄砲の代用になる秘術、おやからのつけつり『風呂で得た知恵』だ！」

二発目、三発目とスイの顔にかけていく。

スイは苦しそうに身を振るが、俺の攻撃からは逃れられない。

「くっそー、馬鹿にしゃがって！ 水の使いスイを舐めるなよお！」  
先ほどのようにスイは水球を飛ばしてきた。

速度はそれなりにあるが、避けることは容易かった。直線状にしか飛んでこないため、スイの手の向いた方向にいないければいいのだ。それに引き換え、俺は手の形を変えることによって、長距離射撃も可能になっていた。

「オラオラオラオラオラ！」

「うーっ！ 陽助さん、もう容赦しませんからね！」

ギュウルルンッ！ とバレーボールぐらいの大きさの水球を生み出し、同じように俺に向かって放ってくる。

何度も同じ手は喰らわない。そう思いながらスイの手の直線状から逃れる。

思った通り、水球は俺の元居た位置に落ち、海水と同化する

しない！？

水球は海面上で停止し、回転を続けていた。  
それに驚いた俺は立ち止ってしまっていた。

「今だっ！」

パルウン、と制止していた水球が俺の方に向かって飛んでくる。

「なにいいいっ！？」

水球が直撃、身体全体に鞭で打たれたようなピリピリとした衝撃を受け、先ほどよりはるか遠くへ吹き飛ばされる。

空に浮かぶ雲が見たこともない速さで逆行している。これは今、自

分が相当な状況下に居るということを知らせてくれている。

だっぱーん！ とまたも背中から海に落ち、一時的に溺れる形となった。

「っぷは！」

水中から顔を出すと、遠くの方でスイがどや顔でふんぞり返っているのが見えた。

くそう、スクール水着のくせに。

俺が泳いでスイの元へと戻ると、何か嫌な雰囲気を感じ取った。

「なんだ……」

「よよ陽助さぁん……、後ろ」

スイの尋常じゃない怯え方に俺も寒気がしてきた。いや、実際背中が冷たいような  
って凍ってる！

「痛い痛い！」

海の中に倒れこむと、その氷はすぐに溶けて消えてなくなった。

そして後ろを振り向くと、そこにはミユがいた。

間違いなく怒っていた。

表情に変化が無くとも、それくらいは分かった。そりゃ普段から一緒に居れば分かる。そういうことじゃなくて。

「……陽助様。いえ、今となつては海を汚す汚物さん。何をやっていらしたんですか」

「えっ、えっ、……俺はただスイと遊んでいただけで」

「馬鹿ですか、馬鹿ですね、馬鹿なんでしょうね。もし他の人に見られていたらどうするつもりだったんですか？」

「スイマセン」

「うっうっ……陽助さんは悪くないんだよお。私が術を使っていたら注意しに来てくれただけでえっ」

ギンツ！ とミユはスイのことを冷ややかな目で見下す。隣に居る俺でも怖い。

「ひうっ！？」

「スイも分かっていたのでしょう？ 正体がばれると色々ややこ

しいんです。それはあの糞ジジイからも聞いていましたよね？」

「お前つてば神様を、おうっ！」

俺の目の前に桃色をした大きな刃を突き刺した。これはいいのか？　ばれないのか！？

「ミュちゃん……ごめんなさい」

「分かればいいんです。ただ、調子に乗った朝浦様は全身にアルミホイルを巻いて砂浜で5時間ほど寝ていていただきたいと思います」

「蒸し焼き状態！？　俺に死ねとそう言いたいのか！」

「分かっただけで結構です」

「イヤ、ホントニスマセンデシタ」

「……………」

俺の誠心誠意の謝罪もミュには冷ややかな目で氷漬けにされるだけだった。

「ときに朝浦様。あそこに見える建物……アレがいわゆる『海の家』というものではないのでしょうか？」

ミュに叱られた後、拗ねてスイと一緒に砂山を作っている時に再びミュが話しかけてきた。

その言葉通り、ミュの指した先には海の家にしては少々立派な建物が建っていた。

何故今まで気が付かなかったのだろうか。いや、それ以前に海の家が出来たという話は聞いていなかったが……。

海水浴に来ている他の客も、ちらほらと海の家に入っていくのが見える。

そこで、パラソルの下で休憩している歌音と芹川に訊ねてみた。

「なあ歌音、芹川。ここに新しく海の家が建ったってこと、知ってた？」

「え、うそ。私の情報網には引つかからなかったんだけどなー。もしかしてほんとの最近に出来たのかな？」

「わ、私も知らなかった」

どうやら二人とも知らなかったようだった。 宣伝も特にしていな  
いようだった。

折角だし、軽く覗くくらいしてこようか、と思った時。

「そう言えば、お昼はどうする予定だったのですか？」

ミユのその問いかけに一同はハッと気が付く。

「もしかしてみなさん、考えてませんでしたか？ では、ちょうどいいのでは？」

奥の建物を指している。

歌音に加えて芹川も忘れていたらしい。 実際、俺も忘れていたのだから何もいう権利はないのだが。

「す、すまん朝浦陽助……。弁当の用意を忘れていた」

「別に芹川が謝ることじゃないと思うんだが……。昼食係なんて決  
めてないんだからさ」

「いーじゃん、いーじゃん！ そうだよ、折角なんだからあの海の  
家行ってみようよ！」

歌音は立ち上がり、すでに行く気満々だった。

「なんか都合がよすぎて怖いような気もするんだけど……いいか」

「そうですよ、朝浦様。何も怖いことはございません、逝きましょ  
う」

「何かおかしな気がするんだが気のせいでいいんだよね？」

そんな俺のコメントをもスルーしたミユはさっさと謎の海の家に向  
かって行ってしまった。

おそらく彼女は腹が減っているだけなのだろうと俺は心の中だけで  
思っていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8550v/>

---

天使と悪魔の共同戦線

2011年12月31日16時49分発行